

ご注文はうさぎですか？ 下宿人は男の娘！？

ミツフミ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ープロローグのあらすじー

同性である男子から告白される程の女顔である上白かみしろ 冬華とうかは中学3年生である。

そんな彼の日常を描く物語。

ー第1章のあらすじー

生まれ育った「巡ヶ丘市」を離れ、「木組みの家と石畳の街」に越して来た冬華と由紀。2人はそこで出会った人達と共に、かけがえのない大切な思い出を作っていく。

3 / 3 (金)

・通算UAが17000を突破しました♪ 読んで頂きありがとうございます♪  
ごぎいます。

2 / 20 (月)

・通算UAが16000を突破しました♪ 読んで頂きありがとうございます♪  
ごぎいます。

2 / 11 (土)

・お気に入り数が140人を突破しました。この小説にお気に入り登録して頂きありがとうございます♪

感想ご指摘お待ちしております。

# 目次

## プロローグ 中学生編

始まり | 1

ただいま | 6

ひみつ | 11

おはよう | 16

まいにち | 23

きれつ | 29

それぞれ | 36

## 第1章 高校1年生編

たびだち | 42

であい | 48

かんげい 1 | 54

かんげい 2 | 60

かんげい 3 | 67

かんげい 4 | 72

にゆうがく 1 | 76

にゆうがく 2 | 83

にゆうがく 3 | 90

にゆうがく 4 | 98

にゆうがく 5 | 106

にゆうがく 6 | 114

にゆうがく 7 | 122

にゆうがく 8 | 130

おもいで 1 | 138

おちおと	174
おもいで4	163
おもいで3	154
おもいで2	148

## プロローグ 中学生編 始まり

2月の最後の週。

春の訪れには少し早く、まだまだ寒いこの時期は、卒業式が近い事もあって、送る側である学校はどこもその準備に忙しい。

そして、送られる側の3年生にとっては、残り少なくなった学校生活を噛み締めるように、毎日を過ごしている時期である。

そんなこの時期は卒業してしまう3年生に、または卒業する3年生が、想い人に自身の気持ちを伝える時期でもある。

つまり言い方を変えたら告白シーズンだ。

――第1話 始まり――

巡ヶ丘学院中学校。

市内にある中学校の中では大きくもなく、小さくもないこの学校は僕が2年と11ヶ月、通って来た中学校だ。

そんな校舎から少し離れた体育館の裏に僕は今、憂鬱な気持ちを抱えたまま向かっている。

時刻は放課後から少したった頃で、見上げた空は今の僕の気持ちを写したかのようにドンヨリとしていた。

そもそも何故僕が体育館裏に向かっているのか、なんでこんなに憂鬱なのか。

それは今日の朝に僕の下駄箱の中に入っていた差出人不明の一通の手紙が全ての原因だ。

僕は歩きながら、憂鬱の原因であるその手紙を制服のポケットから取り出して広げてみる。

そこには、「大事な話がありますので今日の放課後、体育館裏に来てください」と、武骨ながらも丁寧に書くように努力した形跡の残る文字が並んであった。

「はあ……。」

その手紙をポケットにしまつて、今日何度目か分からないため息が口から零れた。

――

体育館裏に辿り着くと、そこには僕と同じ年の坊主頭の男の子が一人いた。

彼の事は知っていた。

とは言つても、彼が「唐木 八雲」と言う名前からき やくもで、今年引退した野球部のエースで、ピッチャーをやっていた。という位しか知らないのだが。

引退したとは言つても唐木君の身体は3年間毎日野球部で鍛えていたのでがっしりしていて、肌は日に焼けて黒い。

身長も175cmと、160cmもない僕よりも10cm以上も高く、厳つい顔とあいまってとても中学3年生には見えず、野球をしている時はさぞ相手に圧迫感とか、威圧感を与えていたのだと容易に想像出来た。

だけど今、その圧迫感や威圧感は何処へやら、彼は挙動不審にそわそわしていて、明らかに怪しい人になっていた。

近付いて行くと、僕の足音に反応して唐木君が振り返る。

その顔は特に日に焼けていて分かり難いが赤くなっていた。

「……！ 来てくれたんですね、トウカさん！」

僕を見つけた唐木君は嬉しそうにそう言ったが、その声は緊張しているのが必要以上に大きくて、上擦っていた。

その声の大きさに思わず耳を塞ぎたくなっただけど、流石に彼の目の前でそれをするのは失礼だと思ったので、やめておいた。

ただ少し渋い顔をしてしまったのは仕方がないと思う。

「えっと、これを書いて僕の下駄箱に入れたのは、君？」

僕がポケットから下駄箱に入っていた手紙を唐木君に見せると、彼は元氣良く「はい！」と答える。

「それで、用件は何？」

「！」

僕がそう言うと、彼の大きな身体がピクリと跳ねる。

「えっと、あの、自分、野球の推薦で、4月から県外の〇〇高校に行く事になりました、」

たどたどしい喋り方で、彼の口から出たその高校は野球が強い事で有名な所で、毎年甲子園にも行っている所だ。

そこから推薦を貰えるなんて、彼の実力が本物だと言うのが分かる。

ただ、それをいきなり話す理由は分からない。

と、普通の人なら思うだろうが、僕は彼の話し方や態度に嫌な既視感を感じて、既に芽生えていた不安が大きくなるのを感じた。

「それで、巡ヶ丘学院高校に行くトウカさんとは4月から離れ離れになってしまうので、その前にトウカさんに自分のこの気持ちを伝えたくて、今日呼び出させて頂きました。」

話していく内に緊張からか、段々と声を大きくしていく唐木君。その顔もヒートアップしていつているのか、段々と赤くなっていた。

そんな彼の様子を見て、僕は逆にどんどん冷静になっていき、心の中には、

（「また」か……。）

と、諦めに似た感情が不安の変わりに広がっていくのを感じた。

既に似たような状況を何度も経験している僕は、なんとなくこの後の展開は察しが付いていたから。

というか、朝に手紙を手を取った時点でなんとなく察していた。

ただ、疑念が確信に変わっただけ。

だから、

「トウカさん、好きです。俺と付き合って下s「ムリ」!!」

案の定言ってきた告白の言葉を、言い終わる前に冷酷とも言える程冷静に拒否する。

「……えっ?」

「聞こえなかったの? ムリ」って言ったの」

唾然とした表情で聞き返してきた唐木君を再び拒否すると、唐木君の顔がサーッと赤から青に変わる。

その変わり様はまるで信号機のようにだった。

「な、なんでですか!?! 自分の何がいけなかったんですか!?! 教えてください。俺、直します。トウカさんの為に!」

2度もばつさりと拒否されたのに、なおも挫けないその心意気は立



派なものだが、残念ながら今回の場合にとってはその心意気は煩わしく感じた。

僕は苛立っている自分を落ち着かせる為に、一度ため息をついてから話し始めた。

「いや、直す直さないの問題じゃなくてさ、」

今回の場合は、そんな表面上の問題じゃない。

もっと根本的で性別的な問題だ。

そう、今回の問題は、

「男同士で付き合うわけないじゃん」

僕も唐木君も男という事だ。

相変わらず青い顔をしている唐木君をその場に残し、僕はきび返して校舎の方に戻る。

――

校舎に戻って、階段を上がっている途中で僕はため息を一つついで、

「“また”か、いいかげんにしてよ。」

と、呟く。

これで5度目だ。

今月、同性の男の子告白されたのは……。

ただいま

巡ヶ丘中学校から歩いて10分程度の所にある住宅街。

そこは同じ様な家々が連なっており、その統一性からか、隣との敷地距離の近さからか、今時珍しくごく近所同士の繋がりの強い事が特徴な所だ。

その住宅街の真ん中にまっすぐ伸びる道路を歩く1つの影。

その影の持ち主は、艶のある黒髪に、健康的で華奢な体型、そして少し幼いながらも整っている顔立ち。

それらは、男性から見たら魅力的に映るためか、さつきからすれ違う男性はみな、その顔をよく見ようと振り返り、不躰な視線を送っていた。

しかし残念ながら、彼、かみしろ上白、とうか冬華の性別は男である。

その証拠に、今冬華が着ているのは、近くにある中学校の男子用の制服だ。

そのため、周りで冬華を不躰な視線で見ている男性達は、自分と同じ男に不躰な視線を送っている事になる。

いつもならそんな視線を送る相手には、絶対零度の視線を送り返す冬華なのだが、今日は同学年の元野球部のエース(♂)から告白され、精神的に疲れている為、そんな元気はなかった。

道路を歩いている冬華は不意に立ち止まり、並んでいる家々の中の1つの玄関の戸を開ける。

その表札には「上白」と書いてあった。

――第2話 ただいま――

「ただいまー」

「おかえり、トー君！」

「うわあ！」

玄関の戸を開けた瞬間冬華に、女の子が飛びついた。突然の事で驚き、思わず大きな声を出しながらも、冬華は飛びついてきた女の子をなんとか落とさずに優しく受け止める。

飛びついてきた女の子の名前は丈槍たけや 由紀ゆき。

ピンクでショートヘアの、ちよっと子供っぽいのが特徴の女の子だ。

由紀と冬華は同じ年で、幼稚園の頃から一緒であり、家が隣同士という事と、互いの両親が共働きで仕事の関係上なかなか家に帰れない事、そして由紀が一人っ子で、家にひとりぼっちになってしまう事から、由紀はほぼ毎日この上白家に泊まりに来ている。

「もー、ユキ。それ危ないからやめてって言ったじゃん」

「えへへへ、ごめん」

冬華は由紀の頭を撫でながら注意するも、悪びれる様子のないユキは、いつものように無邪気な笑顔を見せて、いつものように軽く謝る。

きつと治す気は無いのだろう。

それを知っていながらも、由紀の頭を撫でる冬華の表情はまるで、妹に振り回される兄のように、呆れながらも優しいものだった。

「じゃあ居間で待ってるね〜」

「はーい」

居間に行く由紀を見送った後、冬華は学校鞆を置くために一度2階に行き、自身の部屋の戸を開ける。

冬華の部屋は、あまり物のないシンプルな部屋で、置いてある家具も青を基調とした色合いの男の子らしい雰囲気のものだが、部屋の中にいる折りたたみ式のテーブルの上には、ピンク色のいかにも女の子らしい鞆が1つ置いてあった。

この鞆は由紀の持ち物で、中には彼女のお泊まりセットが入っている。

自分の部屋に入った冬華は、学校鞆を勉強机の横にあるフックに掛け、クローゼットの引き出しから青いラインの入った黒色のスウェットの上下を取り出し、それに着替える。

その後1階に降り、脱衣所で手洗いうがいを終えた冬華は、居間の戸を開けた。

その瞬間、由紀とは別の女の子が冬華に飛びついてきた。

「うわあー！」

再び大きな声を上げた冬華は、今度も飛びついてきた女の子を優しく受け止めた。

「お帰り、トウカ♪」

「……ただいま、姉さん」

冬華は飛びついてきた女の子に挨拶する。

彼女の名前は上白かみしろ一姫かずき。

冬華と由紀より3つ年上で、冬華の姉である。

姉弟という事もあり、一姫は冬華と同じ黒髪で、ストレートな髪質も同じだ。

ただ、女の子である一姫は冬華と違い、髪を伸ばしていて、腰まであるその髪は、一姫のこまめな性格と手入れの上手さから枝毛は1本もない。

そんな一姫は年齢の割に落ち着いていて、幼い頃から冬華と由紀の面倒を見ている為、周りの面倒見もよく、成績も優秀で、整った顔立ちと女性らしい体つき、そして男女関係なく接するその性格から、通っている高校ではファンクラブも存在している。

……しかし、それは学校での話。

本来の一姫はこのようにイタズラ大好きな女の子なのだ。

「……姉さん、さつきユキにも言ったけど、それ危ないからやめてよ。」  
「あら、ごめんなさいね♪」

冬華が注意するが、一姫はどこ吹く風でしばらく冬華に抱き着いた後、冬華から降り、由紀の隣に座った。

「とりあえず、晩御飯の支度するね。何が良い？」

解放された冬華は、一姫と由紀にそう聞きながら、部屋を仕切るように置いてあるカウンターテーブルを回ってキッチンに入る。

そして棚から、料理の時にいつも身に付ける空色のエプロンを身に付けた。

ちなみに一姫と由紀が居間から一步も動かないのは、2人とも料理が全くとっていい程出来ないからである。

「そうだね……」「そうね……」

由紀と一姫が考える素振りする。

その間やる事がない冬華は手際良く、食洗機の中にある食器を戸棚にしまっけて行く。

居間の方では由紀と一姫が何やら話をしていたが、食器の重なる音で冬華には届かない。

「そうだ!」「そうかわ!」

少しして聞こえてきたその声に冬華が顔を上げると、2人は新しく買ってもらったオモチャを見る子供ののように、目をキラキラさせ、満面の笑みを浮かべて冬華を見つめていた。

その2人の顔に得も知れない悪い予感を冬華は抱く。

「トー君の告白された話が良いな」「トウカの告白された話が良いわ」「え!?!」

その予感は見事的中して、2人の発言に、冬華が戸惑いの声を出したのと、持っていたお皿を1つ落としたのは、ほぼ同時だった。

落としたお皿は、材質が良かったおかげで割れずに済んだが、2人の顔を見た冬華は、

(あ、これ危険なパターンの奴だ。)

と、素早く自身の危険を察知し、逃れられない事を悟った冬華は、今日の放課後に男子生徒から受けた告白の話を洩々2人に説明し始めるのだった。

## ひみつ

冬華は夕食の支度をしながら、一姫と由紀に今日、男子生徒から受けた告白の話を説明し終えた。

「スポーツ推薦貰った野球部のエースね……。先週は2年の陸上部新キャプテン、その前はサッカー部の期待の1年生部員……。見事に1. 2. 3と、並んでるわね。」

「……このまま行ったらトー君、来週位には運動部のOBから告白されそうだね。」

「いや、おかしいでしょ!」

冬華は居間のテーブルで寛いでいる由紀と一姫にツッコむが、

「……でも否定は出来ないわよね?」

と、返して来た一姫の言葉に何も答える事が出来なかった。

実際これまでも数回、OBからも告白された事があったからだ。

――第3話 ひみつ――

「それにしてもトウカってなんで運動部員、それも屋外競技の部員からモテるのかしらねえ。」

「そんなの僕が一番知りたいよ」

ふと呟いた一姫の疑問に冬華は不満気に答える。

いつもはひと月に2. 3回程度なのに、今月は卒業式が近いせいか毎週のように同性から告白されている冬華にとって、いい加減うんざりしていて、来たる高校生活の平穩の為に早い所終止符を打ちたい問題だからだ。

「……やっぱり料理部部长だからかな？」

「あー、」

数秒の静寂の後、冬華の代わりに答えた由紀の言葉に一姫は納得した声を出し、由紀と共にキッチンのの方を見る。

そこにはエプロンを身に付けた冬華が、早いながらも丁寧で、かつ見事な手際でミンチ肉を下ごしらえしている姿があった。

その姿は、冬華自身が女の子みたいな顔をしている事もあって、見てて甲斐甲斐しく、見方によつてはまるで仕事から帰ってくる夫の為に料理する新妻のようにも見え、とてももうすぐ高校生になる男の子には見えなかった。

「なるほど、胃袋掴まえちゃったのかあ。流石部長ね♪」

イタズラっぽく微笑む一姫とは対照的に、冬華の表情は不満気だった。

引き継ぎも済み、既に名前だけなのだが、冬華は料理部の部長を務めている。

その料理部は1年生から3年まで各学年4人ずつの計12人程度の部活で、男女や先輩後輩の壁も少なく、部員同士の仲も良いのが特徴だ。

そんな料理部は週に数回、活動場所である校舎1階の家庭科室で、調理師免許を持つ顧問の指導の元、料理実習をしている。

実習は料理好きの部員にとっても楽しく、充実しているものであり、その1人である冬華も実習のあった日にはいつもその様子を楽しそうに一姫と由紀に話している。

そんな一見問題のなさそうな料理部だが、去年の夏まである1つ問



題を抱えていた。

それは料理から実食、そして片付けまでを下校時間までに終わらせなければならぬ為、料理をたくさん作ってもそれを食べ切る事が出来ない為、どうしても作る量を減らさないといけない事だった。

その為、部員達の料理の腕がなかなか上がらない事が危惧されていた。

それを解決したのが、校庭や体育館等にいる運動部達だ。

運動して空腹の育ち盛りで食力旺盛な彼らに作った料理を食べて貰う事で、たくさん料理を作れ、料理部の腕も上がるし、運動部の彼らの空腹をなくす事が出来、まさにwin-winの関係となったのだが、そこに冬華が告白される理由が潜んでいた。

料理部の部室である家庭科室は校舎の1階にあり、運動部のいる校庭からもよく見える位置にある事もあって、料理している姿は校庭にいる運動部に見られる事になる。

そこで自分達の為に甲斐甲斐しく料理を作ってくれる冬華の姿を見て、そして出来た料理はとても美味しいとあれば、運動部員達が冬華に惚れるのも必然だった。

例えばそれが男であっても、女の子顔負けのきれいな顔立ちをしている冬華なら尚更である。

そうして、その後も冬華を構いながら暫くそんな話をしている内に、夕食が完成する。

今日の夕食はハンバーグと、トマトやコーンやキャベツで綺麗に彩られたポテトサラダ、豆腐とワカメと油揚げの味噌汁に白米と言ったメニューだった。

「それじゃあ」

「いただきます」

それを一姫の号令で合掌し、3人で食べ始める。  
冬華の作った夕食はどれも美味しく、瞬く間に食べ終わった。

その後、一姫と由紀が入浴している間に冬華は使った食器を洗い、  
2人があがった後、冬華も入浴する。

その後、冬華の部屋に布団を3つ敷いて小の字になる。  
眠りに就くまでに話した内容は他愛もない事ばかりだったが、それを話す3人はまるで本当の兄弟のようだった。

――

所変わってここは巡ヶ丘市の中心街。

そこに立ち並ぶオフィスビルは深夜だと言うのにどこもポツポツ  
と灯りが点いていて、静かな賑わいを見せていた。

その灯りが点いている窓の1つ。

そこは会議室の窓で、部屋の中には窓に手を突いて外の景色を眺め  
る1人の男性と、彼とテーブルを2つ挟んだ向こう側の席に座ってい  
る1人の女性がいた。

2人に共通するのは、どちらも白衣姿で、胸には同じバッチを付け、  
首からは紐に通した研究証がぶら下がっていた。

そしてこの2人が夫婦である証が、2人の左手の薬指に、同じ指輪  
という形ではまっていた。

「参ったな……。」

男性は深刻な顔で呟く。

その彼の手には1枚の異動辞令の書類が握られていた。

「そう……ね。あの子の事、どうしよう。」

男性の後ろにいる女性も眩く。  
彼女の表情も男性と同じく深刻なものだった。

「……とりあえず、あいつの所にかけてみるよ」  
しばらくしてから男性はそう言ってスマホを取り出し、どこかへ電話をかけた。

『もしもし、天々座だ。』

数回のコールの後、電話に出た相手は男性の古い知り合いだった。  
「久しぶりだな理座。俺だ、春樹だ。突然で悪いが頼みがある。」

『なんだ？』

「……息子の冬華をしばらくお前の家に下宿させてやってくれないか？」

この電話によって冬華の人生が大きく変わる事になるのだが、その事をまだ冬華は知らず、自分の部屋で姉の一姫と幼馴染みの由紀に挟まれ眠っているその顔は無邪気なものだった。

おはよう

冬華の朝はとても早い。

夏、日が長くなれば朝日と一緒に目が覚めて、冬、日が短くなれば朝日が昇るより前に目を覚ます。

なかなか家に帰れない両親の代わりに、家の家事の全てを行って、冬華は、365日、体調の悪い日以外欠かす事なく、誰よりも早く起きて家事に勤しんでおり、そんな冬華の姿はまるで主婦のようである。

今日も朝日より前に目を覚ました冬華は、身体にかかる抵抗感を感じ、自分の左右の腕を見る。

「……。」

そこには姉の一姫と幼馴染みの由紀が自分の両腕にそれぞれ抱きついて幸せそうに眠っていた。

どうやら今日冬華の朝一番の仕事は、この2人を起こさずに自分の腕から引き離す作業のようだ。

――

「……ふう、漸く抜けた。」

格闘する事数分間、なんとか2人を起こさずに自分の両腕から剥がした冬華は、幸せそうに眠る2人の寝顔を見る。

「幸せそうに寝てるな。……よし、今日1日頑張ろう♪」

しばらく2人を見た後、気合いを入れた冬華は静かに自分の部屋を後にした。

――

1階に降りた冬華は脱衣所の洗面台で顔を洗い、タオルで拭く。

拭き終わった冬華は、鏡に写った自身の姿を見た。  
少し長い黒髪と長い睫毛に大きな瞳、色白の肌に桜色の唇、158  
cmの華奢な身体、そんな冬華の身体つきは、男子よりも女子のよう  
だった。

「ハア……。」

そんな自分の姿を見て、憂鬱そうにため息を吐く。

冬華は自分の姿が嫌いなのだ。

男子に告白される女の子みたいで自分の姿が……。

その後、冬華は脱衣所から出て行って居間へと向かった。

——第4話 おはよう——

「えっと、昨日がハンバーグだったから、今日はどうしようかな……。」

居間に到着した冬華はテレビを点けた後、冷蔵庫や棚を開けて今日  
の朝食のメニューを考え始める。

家によつては朝食が和食か洋食かご飯派かパン派が決まっている所が多いが、上白家  
はその日その日の冬華の気分メニューが決まる為、特にそういうの  
は決まっていない。

ちなみにだが、高校生である一姫がお昼に食べるお弁当のメニュー  
は、既に冬華の中では決まっていた。

「おとといは魚屋さん来て、お刺身とかフライとかしたから魚はダメ  
だし、今日の夕食はカレー作ってるからご飯は残しておきたいし  
……。うーん……。……ん？」

先程何気なしに点けたテレビに冬華は視線を向けた。

そこには、フレンチトーストの特集がされていたから。

それを見た冬華の口角が上がる。

「どうやら、朝食のメニューを何にするか決めたようだ。」

早速冬華は朝食とお昼に一姫が食べるお弁当の準備に取り掛かった。

「……」

「おはよう、トウカ」

朝のテレビ番組が、〇×クイズをする頃、一姫が起きて来て、眠そうに弟である冬華に挨拶する。

「おはよう、姉さ……ん？」

冬華も挨拶を返そうと一姫に声をかけるが、その言葉は一姫を見た瞬間止まった。

何故なら、今の一姫の服装は、寝起きという事もあって、着ている襟付きのパジャマはだらしなく、上から2つ目までのボタンが開いて、それにより片方に寄った襟元から、一姫の健康的な白い肌が少しだけ顔を覗かせ、一姫の女性らしい体つきと相まって見る人が見れば妖艶さを感じずにはいられない姿になっていたからだ。

この格好は冬華の慌てる姿を見るために、一姫がわざと着崩したもので、眠そうにしているのも一姫の演技であり、内心は刹那の後に訪れる冬華の慌てた反応を今か今かと楽しみに待ち構えていた。

しかし、肝心の冬華の反応は、

「もう、姉さん。パジャマはちゃんと着なきや、風邪ひいちやうでしよ。」

と、まるで幼い子供に言い聞かせる母のようで、料理する手を一旦止めた冬華は、手を洗ってから一姫の元に行き、ただ淡々と一姫の着崩れた服を直していった。

もちろんそんな態度、冬華の慌てる反応を見ようとわざと着崩していた一姫からしてみれば、少しも面白くなく、服を直し終わった冬華

に「トウカのバカ」と恨めしそうに言うと、居間のテーブルに行き、体育座りの格好で点いてるテレビを見始める。

(え、えー……。)

後に残ったのは、訳も分からず呆然と立ち尽くした冬華の姿だけだった。

――

「トー君、おはよー」

一姫が起きてから数10分後、由紀も降りてきて、冬華に挨拶する。

「おはよう、ユキ」

冬華も挨拶を返す。

すると、由紀がトコトコと冬華のいるカウンターテーブルにやってきて、

「ねえトー君、かずねえが機嫌悪そうだけどどうしたの?」

と、一姫に聞こえない位小さな声で冬華に質問してきた。

顔を上げた冬華の視線の先には、今尚不機嫌そうにしている一姫の姿が映る。

由紀に聞かれたが、冬華自身何で一姫が機嫌を悪くしているか分からず、

「あー、分かんない。着崩した服を直したら機嫌悪くなった」

と、さつき起こった事を素直に答えると、

「それはトー君が悪い。」

と、由紀にばつさり切られた。

その後居間でテレビを見ている一姫の元に行く由紀の後ろで、冬華は訳も分からず?マークを頭から飛ばしていた。

「おはよー、かずねえ」

「おはよう、ユキ」

由紀と一姫は互いに挨拶をして、由紀は一姫の隣に座る。

「もう、冬華ってば少し位慌てても良いじゃない」

一姫は冬華に聞こえない位の声で文句を言う。

その膨らんだ頬は怒っているからか、少し赤くなっていた。

「まあ、トー君だからねえ。仕方ないよ」

年頃と同級生の幼馴染みが、実の姉だが、こんなに美人の女の子から迫られても何も反応しないという事に呆れながら、由紀は一姫の言葉に返答した。

「……………ハア」

そして隣にいる一姫にバレないようにそつとため息を吐いた。

—————

「……………よし、出来た。姉さん、ユキ、朝食出来たよ」

それから再び10分後、お弁当と共に朝食が完成し、冬華は2人を呼んだ。

……………が、やって来たのは由紀だけ。

一姫はテレビの前から動こうとしなかった。

「ねえさーん。」

「……………」

冬華が呼びかけるも一姫はそれを無視する。

「ねえさん。」

「……………」

冬華は一姫の後ろに行き、もう一度声をかけたが、一姫からは反応



はなかった。

「……。」

「……。」

「……。」

居間に静寂が包む。

テレビを見ている一姫も、後ろで立っている冬華も、その2人を守る由紀も誰も話そうとはしなかった。

「はあ。」

しばらく無言の駆け引きが行われた後、まず声を出したのは冬華だった。

冬華が折れたのは2つの理由から来ていて、

1つ目の理由は、例え今は時間に余裕があるとしても、いつまでもこうしていれば学校に遅れてしまうという、学生らしい理由。

そして2つ目の理由は、せっかく作った出来立ての朝食が冷めてしまったのは美味しさが減ってしまうという、主婦らしい理由からだった。

ため息を吐いた冬華は一姫のすぐ側に膝を付けると、

一姫を後ろから優しく抱きしめ、左手で一姫の頭を撫で始めた。

「んっ」

一姫の口から短い吐息が漏れ、その頬に少し赤みが灯る。

後ろから抱きしめて、頭を撫でる。

これは一姫の機嫌を直す1番の方法だ。

しばらく冬華は何も言わず、一姫を抱きしめ、撫で続けた。それをした時間は5分となかったが、

「……姉さん、朝ご飯食べよっか。」  
「うん♪」

しばらくした後、聞いた冬華の提案に一姫は上機嫌に答え、一姫を含めた3人で朝食をとった。

……朝食の後、「私もやって」とせがんできた由紀にも一姫と同じように抱きしめて、頭を撫でたのは言うまでもない。

まいにち

「行ってきまーす」

玄関から響く冬華、一姫、由紀の元気な声。

3人の服装はそれぞれの学校の制服に変わっており、背中には各々のスクールバッグが背負われていた。

「よし、鍵もオツケー」

玄関の戸に鍵をかけた冬華は、後ろにいる由紀と一姫とともに学校へ向けて歩き出す。

一姫は冬華と由紀と違い高校生で学校も違うのだが、一姫が通っている巡ヶ丘学院高校は冬華と由紀が通っている巡ヶ丘学院中学校の先にある為、3人はいつも一緒に家を出て学校に行くのだ。

この3年間、3人一緒に通っていた通学路だが、4月から一姫は逆方向にある聖イシドロス大学に、冬華と由紀は巡ヶ丘学院高校に行く事が既に決まっている。

その為、この道を3人で歩けるのは後数週間程である。

それを思っただか、3人の口数は少ない。

……なんて事にはならず、

「「おはようございます」」

「あら、おはよう。」

いつも通り、道中に出会ったご近所さんに3人は元気の良い挨拶をするのだった。

「いつも仲良しな3姉妹」"として、3人は近所の人からちよつとした有名人である。

例え姉妹のように過ごしてきても由紀は一姫と冬華とは姉妹ではなく、冬華に至っては女の子でもないのだが、いつも3人一緒にいるのと、冬華が女の子みたいな顔立ちの為、周りの認識はそのようになっっていた。

ちなみに自分達が周りから姉妹として見られている事を知っているのは3人の中では一姫だけである。

その後も今日の天気と同じような、晴れ晴れとした元気の良い挨拶が、住宅街に響いた。

――第5話 まいにち――

「じゃあ2人とも、行ってらっしゃい」

「行ってきます。姉さんも気をつけて学校行ってね」

「かずねえ、またね」

10数分後、中学校の校門の前でここから更に先にある高校に行く一姫を見送った冬華と由紀は、一姫の姿が見えなくなってから校門をくぐり、生徒用玄関から校舎の中に入った。

「おはよう」「おっはよー」

『おはよう』

教室に入った冬華と由紀はクラスのみんなに挨拶すると、所々から挨拶が返ってきた。

冬華と由紀は同じクラスである。

そして席も隣同士で、由紀が真ん中の列の1番後ろ、その右側、廊下から2番目の列の1番後ろの席が冬華の席だ。

「きーちゃんおはよう」

自分の席に座りながら、由紀は自分の左側の席に座るクラスメイトの女の子に声をかけると、冬華も由紀に倣って「柚村さんおはよう」とその女の子に挨拶をする。

「よう、仲良しコンビ。今日も一緒に登校か？」

由紀と冬華に声をかけられた女の子は2人の方に顔を向け挨拶を返す。

彼女の名は柚村ゆずむら 貴依たかえは由紀の友達である。

本当は「たかえ」と読む貴依の名前だが、「きい」とも読める為、由紀はそう呼んでいる。

「うん。いつも通りだよ」

「毎日一緒にお前らホント仲良いな」

「えへへ。良いでしょ」

由紀が子供っぽく笑う。

その笑顔を見て、冬華と貴依の顔は自然と優しい笑顔になっていた。

「トウカ、丈槍、おはよう。」

貴依と話していると、冬華達に近づく2人のクラスメイトがいた。

「あ、音緒君に友哉君、おはよう。」

「おはよう、音君、友君。」

冬華と由紀は2人に挨拶を返す。

黒崎くろさき 音緒おとおと、安達あだち 友哉ともや。

その2人の名前だ。

2人は中学校から知り合った冬華の友達で、クラスメイトである。

「冬華、聞いたぞ。お前昨日唐木の奴から告られたんだってな」

「流石友哉君、話が伝わるの早いね……」

「当たり前だろ！ オレの知らない噂なんてない！」

「噂を調べるのは良いが、この前みたいに市立図書館の立ち入り禁止区域に忍び込む、なんて無茶な事するなよ」

「何言ってるんだ、音緒。気になった事は調べ尽くすのは当然だろ！」

オレの辞書に“調べない”なんて文字はない！」

その言葉を聞いた友哉以外はの4人は呆れてため息を吐いた。

しばらく5人で喋った後、冬華と音緒と友哉の3人は少し離れた所にいる他の男子グループの会話に混ざる為に由紀と貴衣から離れていく。

……離れていった冬華を見つめる由紀の瞳は少し寂し気だった。

「……なあ由紀、」

「ダメだよ、キーちゃん。」

自分に何か言おうとする貴依を由紀は首を横に振って止め、

「この想いを伝えれないのは嫌だけど、今あるトー君との関係を壊して、一緒にいられなくなるのはもっと嫌なの」

と、静かに呟いた。

その後担任の佐藤先生が教室にやって来て朝礼を行い、いつもの様に授業が進んでいった。

――

数学の授業中。

「――」

後少しで授業が終わる時間。

初老を迎えた教員がラストスパートをかけ、教科書の内容を黒板に板書して、説明する。

進行ペースはかなり早く、今日最後の授業という事もあって、疲れている生徒達は板書されたものを各々自分のノートに書いていくの

が精一杯で、教員の説明などほとんど左から右に聞き流している状態だった。

そんな鬼気迫る教室の中で、ある一角だけ他の生徒と違い和やかな雰囲気を出している2人がいた。

「スピー、スピー……。」

その内の1人は腕を枕代わりにして子供っぽく無邪気な寝顔を浮かべ、いつも通り眠っている由紀。

「……フフツ」

そしてもう1人は隣の席からその寝顔を優しい笑みでいつも通り見ている冬華だった。

本来この授業は黒板の板書をノートに写すだけで精一杯なのだが、トップクラスの学力を持ち、既に黒板の板書をノートに写し終わっている冬華は、後は教員の話聞くだけである。

だが、それをせずに冬華は授業の終わりまで由紀の寝顔を堪能したのだった。

――

「ゆき、ユキ起きて」

授業が終わり教員が出て行った後、冬華は隣の席で眠っている由紀を起こす為、彼女に優しく声をかけ肩をさする。

数回それをしていると、「おはよー……ごいませ……。」と、由紀が目覚まして、大きくノビをする。

そんな由紀に冬華は「おはようございませ。もう放課後だよ」と、少し苦笑いして、本日2度目の朝の挨拶を返したのだった。

「放課後か。今日も1日頑張ったよー！」

「ユキほとんど寝てたじゃん」

「え、えへへへ」

ドヤ顔をする由紀に冬華はツツコミを入れると、状況の悪くなった由紀は紛らわすよう笑った。

そうしている内に担任がやって来て終礼が始まった。

――

「起立、気をつけ、礼」

『ありがとうございます！』

終礼が終わって担任が教室から出て行くとさつきまで静かだった教室が途端に騒がしくなる。

「帰ろっか」

「うん♪」

そんな騒がしい教室を後にした2人は下駄箱で靴を変え、校門をくぐると上白家に向け歩き出した。



きれつ

冬華と由紀が学校を出た頃、上白家の家の横にあるガレージに1台の普通車が入る。

車から降りてきた1組の男女は上白家の門の前に立つと、懐かしそうな表情で家を見上げた。

彼らは3週間ぶりに上白家に帰って来た一姫と冬華の両親である。

「……久しぶりの我が家だな。冬華と一姫は元気にしてるかな。」

父親である春樹は帰って来た我が家を見て、久しぶりに出会う子供達の事を思い、しみじみ言々と、

「あの子達はまだ学校よ。もう少ししないと帰って来ないよ。」  
と、隣にいる妻の玲奈からツツコミが入られる。

「そういうえば今日平日だったな。どうりで車の数が少ないわけだ。」  
ツツコミまれた春樹はおどけた表情をして右手で頭をかいた。

春樹が曜日感覚が鈍くなったのも無理はない。

何故なら彼らはこの3週間、平日も休日も関係なしに働いていたからだ。

「……………」

頭をかいている春樹の手が止まって、その顔が神妙なものに変わった。

それを見て玲奈は、自身の両手で春樹の空いている左手を包むように握ると、

「大丈夫」

と、一言呟いた。

しばらく春樹は、握られている左手から玲奈の体温を噛みしめるように目を瞑った後、閉まっている玄関の戸を鍵を使って開け、2人一緒に家の中に入っていった。

——第6話 きれつ——

帰り道を歩く冬華と由紀。

既に住宅街に入っており、家までもう少しの所まで帰っていた。

「ねえトー君、今日の夕食なあに？」

「ん？ 今日？ 今日カレーだよ」

「やったり、カレーだよ♪」

「うわあ!？」

夕食のメニューを知った由紀が嬉しさのあまり冬華に抱きつく。

「……もうユキ、急に抱き着いたら危ないっていつも言ってるじゃん」  
そう言ってたしなめている冬華だが、その顔は優しく、手は由紀の頭を撫でていた。

「えへへ、ごめん」

だからか、由紀も口では謝っているがその顔は笑顔だった。

「じゃあトー君、家まで競争だよ！ よーいドン！」

「あっちよつとユキ！」

冬華から離れた由紀が突然駆け出し、少し遅れて冬華も駆け出した。

足の速さでは冬華の方が上なのだが、家までの距離と最初に出遅れた分、由紀に追いつけず、

「ゴール♪」

由紀により突然開催されたかけっこ大会は、僅差で由紀が勝利して無事閉会となった。

「ふっふっふっ、トー君まだまだだね」

由紀がすぐ後から来た冬華にドヤ顔をする。

「追いつけると思っただけだなあ。ユキ、足速くなったな」

「えへへ、これがカレーの力だよ！」

「……少しだけだからね。」

「やった〜♪ トー君早く早く。」

カレーの味見の許可を貰った由紀は、待ちきれないといった感じで冬華を急かしながら、鍵のかかっている上白家の玄関の戸に手をかける。

「あつユキ、鍵ないと開かないよ。」

そんな由紀を見て、後ろにいる冬華は慌てて鞆の中から鍵を出そうとするのだが、前から聞こえてきた由紀の「あれっ？」と言う不思議がる声で顔を上げた。

「戸、開いてる……。」

その言葉と同時に由紀が戸にかけている手を動かすと、閉まっていたはずの玄関の戸が手の動きに従って開いた。

「えっ!？」

その光景を見た冬華は驚いた声を出す。

それもそのはずだ。

何故なら今朝、玄関の戸を閉めたのは冬華自身であり、きちんと鍵がかかっている事も確かめている。

それなのに帰ってきたら鍵が開いていたのだ。

「と、トー君……。」

「……大丈夫。」

不安そうな表情で近づいてきた由紀を冬華は背中に隠し、警戒しながら家の中を覗くと、

「……あれ?」

玄関にはどこか見覚えのある男物と女物の靴が1足ずつ置いてあった。

「この靴って。……!」

その2足の靴を見ていると、家の奥から足音が聞こえてきた。

その足音は徐々に冬華達の方に近付いてくる。

そして、姿を現したのは、

「やあ冬華、おかえり。」

「ユキちゃん、いらっしやい」

「えっ! 父さん、母さん!?!」

冬華と一姫の両親だった。

――

夕暮れの高校の校庭を歩く一姫と、一姫のクラスメイトである灰色の髪丸メガネをかけた少女。

一姫は今日、その少女から『出された追試課題の問題が分からないので勉強を教えて欲しい』と頼まれたので、学校に残って勉強を教えていたのだ。

「カズ、疲れたよ……。」

疲労を顔に浮かべながら、少女は一姫にボヤいた。

一姫をカズとあだ名で呼んでいる所を見ると、2人の仲は良いようだ。

「弱音吐かないの。頑張ったおかげで課題全部終わったじゃない」

疲れ気味の少女を一姫は励ますと、少女は「それはそうなんだけどさ……」と、バツの悪そうに口を尖らせた。

少女に出された課題は現国のレポート3枚で、授業をある程度真剣に聞いていけば一応は解けるレベルの課題なのだが……。

やるべき事よりもやりたい事を優先してしまう性格の少女は、授業中も好きなゲームの事ばかり考えていたせいでテストの点が悪く、その結果課題を出されたのだ。

「まあでも今日はホントにありがとね。お礼に何か奢るからどっか寄って帰らない？」

勉強を見てくれたお礼にと、少女が帰りに寄り道をする事を提案する。

「気にしないで。家に帰れば弟が作ってくれた晩御飯が待ってるし、私も教えてて楽しかったから。」

またいつでも勉強見てあげるわよ♪」

そう言つて一姫がイタズラっぽく微笑むと、

「づう、……しばらくは良いや。」

と、少女は苦笑いして、一姫の提案を断った。

「そう、残念ね。」

対する一姫は口ではそう呟いたが、その表情はあまり残念そうではなかった。

「じゃあ、カズ、また明日ね」

「うん、トウコ、また明日」

校門をくぐった2人はそこで別れて、それぞれの帰路に着いた。

—————

「思ったより遅くなったわね……。」

住宅街まで帰ってきた一姫は、歩きながら腕時計を見て呟く。

下校時間までに終わる事が出来たとはいえ、帰宅部で生徒会にも入っていない一姫にとつて放課後、学校に残る事事態が珍しく、この時間に帰るのはあまりないのだ。

「そう言えば今日はカレーだったわね。楽しみい♪」

上白家に辿り着いた一姫は事前に確認しておいた今日の夕飯を思い出して、玄関の戸を開けた。

『ちよつと待ってよ、そんな事いきなり言われても困るよ!』

戸を開けた瞬間、聞こえてきたのは、自分の弟である冬華の戸惑った声だった。

その声は玄関にいる一姫の元にまで届く程大きく、

「……!」

その声色で自分の弟の非常事態をいち早く察知した一姫は、玄関で靴も脱がずに廊下を走り、冬華の声が聞こえてきた居間の戸を勢いよく開けた。

中には弟の冬華と、幼馴染の由紀の他に、いつもはいない両親の姿があり、両親のすぐそばには2枚の書類が置かれていた。

その書類に書いてある文字が視界に入った瞬間、一姫は素早い動きでその書類を取った。

「な、なに……これ……」

それは、両親の名前が書いてある異動辞令の書類と、既に必要事項が記述されてある冬華の名前が書かれた転校手続きの書類だった。

上白家の居間に重々しい静寂が包む。

それぞれ

夜、いつもでは考えられない程静かな夕食を終え、お風呂からあがった僕は、居間に戻って床に寝転ぶと机の上に置いてある2枚の書類を手を取った。

両親の異動辞令の書類には、両親が海外に勤める事が書いてあり、転校手続きの書類には、僕が巡ヶ丘学院高校から名も知らないどこかの高校に転入する事が記述してあった。

『……父さん達、4月から海外で働く事になってな、それで一姫はおばあちゃん家に、冬華は父さんの知り合いの人の家にお世話になる事になったんだ。』

書類を見ると、何時間も前に母さんと共に再び会社に戻った父さんの言葉を思い出した。

信じれなかった。

理解出来なかった。

そして、したくもなかった。

父さんから転校の話が聞かされた時、そんな思いが頭の中を巡った。

……そして若干薄まったとは言え、その感情は未だに僕の中で巡っている。

だから僕は、そんな思いを消すかのように、床から起き上がってキッチンに行ってコンロに火をかけると、

その2枚の書類を火にかけた。

茶色く変色していく書類を僕は、ただ静かに見守っていた。



――第7話 それぞれ――

一姫 side

朝、いつも通り冬華の部屋で目覚めた私が居間に行くと、テーブルの上には朝食のサンドイッチと、私の昼食のお弁当、そして冬華からの置き手紙があった。

『ちよつと気持ちの整理をしに出掛けて来るから今日は学校休みます。心配しなくて大丈夫だから2人はちゃんと学校に行ってね。』

「！ 冬華っ！」

手紙を読み終えた私は飛び出るように居間から出ようとする時、

「わっ！」

ドアの所で珍しく私より先に目を覚ましていた由紀とぶつかりそうになった。

「由紀、大丈夫?!」

「うん、大丈夫。それよりかずねえ、トー君のバックと帽子がないよ！」

ぶつかりそうになった由紀をなんとか避けると、由紀が冬華が外出の際にいつも持って出ている茶色のショルダーバッグと、猫耳の様な突起の付いた帽子がない事を知らせてくれた。

玄関に行くと冬華の外行き用の靴も1足なかった。

どうやら出掛けたのは本当らしい。

冬華を待つ事にした私達は、朝食を食べ支度を済ませた後、家を出るギリギリまで待ったけど結局冬華は帰って来らず、仕方なく学校に行った。

「あれ？ 丈槍、今日上白の奴どうしたんだ？」

朝礼中、出席を取っていた佐藤先生が不思議そうな声を出して私に聞いてきた。

『由紀、ゴメンけど、冬華が休んだ理由を言われたらこう言って欲しいの。』

私は今朝、校門の前でかずねえから言われた事を思い出し、

「ちよつと熱出したらしいので……。明日には来ると思います。」

と、今日何度目にもなるトー君かずねえの作った嘘の休みの理由を話すと、先生は「ふん、あの上白が熱ねえ……。珍しい事もあるもんだな」と、眩き、何事もなかったように朝礼を進めていく。

そんな先生の反応を見て、私は静かに胸を撫で下ろした。

トー君が学校をお休みするのは本当に珍しい。

朝、教室に着いたらきーちゃんや音君、友君や他のクラスメイト、終いには料理部の部員の子達までトー君のお休みの理由を聞きに訪れたから。

その人達全員に同じ理由嘘を言ったけど、何度目になっても慣れないものは慣れなかった。

「丈槍、ちよつと良いか？」

「？ なに？」

「ちよつと話があるんだ。廊下に行こう」

「うん、わかった」

朝礼が終わってすぐ、音君が私の席に来て、私を廊下に連れ出した。

「ねえ、話つてなに？」

「……なあ、丈槍。今、冬華の奴、行方不明じゃないのか？」  
「!？」

廊下に出て、私が聞くと音君は開口一番にそう聞いてきて、いきなりの事だったからつい大きな反応になった。

「……その反応はやっぱりか。実は俺、毎日早朝にランニングしてるんだが、今朝あいつに似た奴がタクシーに乗る所見たんだよ。……どこに行っただかまでは知らないがな。」

「……そう、なんだ。」

私がポツリと呟くと同時にチャイムの音が聞こえて来た。

「おっと、もうこんな時間か。……心配するな、丈槍。あいつならきつと大丈夫だ。だから早く教室入ろうぜ。」

「……うん」

音君に呼ばれ、教室に入る前に私は窓の方を振り返って、

「早く帰って来てよ、トー君。」

と、周りに聞こえない程静かに、そう呟いた。

貴依 side

「……」

3時間目の数学の授業。

授業速度が速すぎて相変わらず教員が何を言っているか分からない授業の最中、チラツと右隣を見ると、由紀がボーっと前を向いていた。

私の右側の席に座る由紀は、普段から授業なんて聞かない奴だけど今日は特に聞いてなくて、今の所授業中はどうしてボーっと前を向いているだけだった。

こいつがこうなった理由は分かってる。

上白が休んでるせいだろう。

(……元気のないこいつなんか見ててつまらないから、明日は絶対に来いよ、上白！)

そう心の中で上白にボヤいた後すぐに、黒板のまだ書いてない所を教員が消し始めたので私は慌てて手を動かしていった。

冬華 side

目の前をさつきまで乗っていたタクシーが通り過ぎた後、振り向いた僕の視線の先には、両親のいる借り上げのアパートがあった。

「……来ちゃった。」

思わずそう呟いた後、僕は2枚の紙を握りしめ、そのアパートに向かって歩き出した。

一姫 side

キーンコーンカーンコーン

終礼の終わりと同時に小学生みたいに騒ぎ出すクラスメイト達。

高校3年にしては少し子供過ぎる位に騒いでいる彼らを横切って私は早々に教室を出た。

そこそこ人のいる廊下を早歩きで歩いていく。

もう冬華が家に帰っているかもしれないと思うと、足が勝手に動いた。

校舎を出ると迷わず走り出す。

一刻も早く家に帰りたいかったから。

中学校まで戻ると、前方の校門から飛び出してきた  
ピンクの髪の少女を見つめる。

「由紀！」

「えっ、かずねえ!？」

立ち止まって振り向いた由紀は、走ってくる私を見つけると、少し  
驚いた顔をする。

「早く行くわよ」

そう言って由紀の手を取って走り出した。

## 第1章 高校1年生編 たびだち

四月らしい春の爽やかな晴天の下、線路の上を走る一台の電車。新幹線などに比べると走る速度も遅く、車内の揺れも大きい。

しかし新幹線と違い、開いた窓から吹き込む涼やかな早春の風と、窓から見えるゆっくりと流れる田園風景により、車内の中の居心地は悪くなく、向かい合っている席には小さい子どもを連れた多くの家族が座っていた。

そんな車内を歩く1人の少年。

一見すると女の子と間違えてしまう程の女顔である少年、かみしろ上白冬華とうかの手には、冬華が後方車両で買ってきたジュースとお菓子の袋があった。

数両の車両を通り抜け、自分の席まで戻った冬華は、自分達の席に頭を傾け窓を枕代わりにして幸せそうに眠っている、猫耳のような帽子を被った女の子を見つめる。

「あらら、寝ちゃったか。」

自分が買い物に行っている間に寝てしまった幼馴染であるたけや由紀ゆきを見て苦笑いした冬華は、買ってきた物を窓側にある机に置く、棚の上に置いてある自分のキャリーバックの中から携帯枕を取り出し膨らませ由紀の首に着けた後、自分の上着を由紀にかけた。

そして冬華は由紀の反対側の向かい合っている席に座り窓の外を流れる景色に目を向ける。

外の景色は今日の天気が晴天という事もあり、遠くの山まではつきりと見え、カメラがあれば思わず写真を撮りたくなるような景色だった。

冬華は、ゆつくりと流れるその景色をしばらく見ていると、視線の端に何か動くものを感じ、顔を動かすと由紀がモゾモゾと動いていた。

そして少しした後、由紀の唇が少し開き、

「……とー、くん」

と、冬華の名前を小さく呟いた。

そんな由紀を見て、冬華の中でイタズラ心が目覚める。

冬華は机に置いてある買ってきた2つの缶ジュースを両手に取ると、静かに立ち上がって、

由紀の両頬に冷え冷えの缶をペトリと当てる。

「んひゃあ!？」

由紀が猫みたいに飛び起きた。

「おはよう、由紀♪」

そんな由紀に冬華はイタズラっぽく微笑むと、周囲を見回していた由紀が、冬華の顔と、彼が両手に持つ缶ジュースを見て状況を察し、「むう、トー君のイジワル。」と膨れっ面で呟く。

対する冬華はにこやかに微笑みながら両手の缶を再び窓側にある机に置いて、空いた右手で由紀の頭を撫でてから自分の席に座ると「ユキ、どっちのジュースが良い？」と何事もなかったように買ってきたりんごジュースとオレンジジュースを差し出した。

そんな冬華の態度に由紀は膨れっ面のまま、少し悩んだ後りんごジュースを手にとった。

「もう、トー君。寝ている女の子にイタズラしちゃダメだって!」

由紀は怒りながらも冬華が開けた海老の絵のついたお菓子の袋から中身を一つ取って口に入れる。

その由紀の顔には『プンブン』と怒っている擬音がよく似合っていて、怒っているながらもハムスターみたいにお菓子を口に運ぶ由紀を見て冬華は思わず笑いそうになってしまった。

「ゴメンゴメン。」

「全くもう。……あつ、トー君見て見て。見えてきたよ。」

由紀が指さした先を冬華が振り返って見ると、窓の外、線路の先に向かってうっすらと街が見えていた。

その街こそが、これから冬華と由紀が暮らす、木組みの家と石畳の街”である。

振り返ってしばらく街を見た冬華は少し目を俯かせて由紀に向き直ると、「ねえ、ユキ。本当に良かったの?」

と、由紀に聞いた。

「もちろん♪」

問われた由紀はそう答えて立ち上がると、棚の上にある自分のキャリーバックの中から一枚の書類を取り出す。

それは由紀の転校手続きの書類だった。

1か月前、冬華が学校を休んで両親のいるアパートに行った日、冬華が家に帰ると、一姫姉と由紀が居間で待っていた。

そして、2人に引越す事を告げると、由紀が「じゃあ、私も一緒に行く!」と言い出し、自分の両親を説得して冬華と共に転校する事になったのだ。



「私の気持ちはこれを書いた時から変わってないよ♪」  
そう嬉しそうに言う由紀の瞳の光は、電車がちょうど影に入ったせいで見えなかった。

――第8話 たびだち――

〃木組みの家と石畳の街〃。

西洋風の建物が目立ち、日本でありながらどこか外国の様な雰囲気を持つこの街は、街中に野生の兎が生息している事でも有名な街である。

その街に今、冬華と由紀は降り立った。

「うわあ、うさぎいっぱいだよ♪」

駅から出てすぐ沢山のうさぎを見つけた由紀は、そのうさぎ達を追いかけ始めた。

そんな由紀に冬華は「ユキ、迷子にならないでよ。」と、声をかけると、周りを見渡す。

「……本当に外国みたいな所だな。それに結構学生も多いんだ。」  
周りを見渡した冬華は街の第一印象を述べる。

冬華がそう思うのは当然で、駅の周りは、木組みの建物がほとんどで、道路は石畳で出来ていた。

そして新学期も近いという事もあり、観光客の他に多くの学生の姿も目立っていた。

「……それにしても、」

冬華は視線を周りから、楽しそうにうさぎを追っかけている由紀……でなく、その頭にある猫耳のような突起の付いた帽子に向ける。

それはつい1週間まで冬華の物だったが、由紀が欲しいと言ってきたのであげたの物だ。

その帽子は冬華にとって愛着のある物だが、同時に古くなっていた。

だから冬華は思わずにはいられなかった。

(なんで由紀はあんな古い帽子が欲しいなんて言ったのかな?)と。

その後、うさぎを思う存分堪能した由紀が冬華の元に戻ってきて、2人は目的地であり、これからお世話になる天々座家に向かって歩き始めた。

――

「ユキ、今どこら辺?」

2人が見渡しの良い橋の上まで来た所で冬華が振り返って由紀に質問すると、由紀は「えっ!? あっ、ちよつと待ってね」と言ってから、その場でいったん止まり、左手に持つ地図を広げて周りを見渡した。

「えーつと、こつちがこうで、そつちがこう、あつちがこうだから……うん、今ここだね。」

と、地図上に現在地を指でさし示した。

その箇所と目的地を比べてもまだ半分も行っておらず、道のりはまだまだ長い。

「まだ大分遠いね……。ユキ、疲れてない?」

「ちよつとね。でもまだ大丈夫だよ。」

張り切る由紀だが、その表情は少し辛そうで顔には汗も出ていた。

そんな由紀の表情を察した冬華は、

「無理は禁物、どっかで休憩しよ。……あつ、ほら丁度ここに喫茶店あるし行ってみよう。」

「あつ、ちよつとトー君」

地図で今自分のいる場所から少し行つた所に喫茶店を見つけ、素早い動きで由紀の左手を掴むと、有無を言わさない雰囲気歩き出した。

――

「到着。」

2人が辿り着いたのは『RABBIT HOUSE』という名前の一軒の喫茶店で、ドアの上にある木製の看板には、コーヒーカップを持ったウサギの絵が掲げてあつた。

「もー、トー君強引。」

橋の上からここまでずっと手を引っ張られてきた由紀は冬華に苦情を投げるが冬の冬華は、

「ゴメンゴメン。じゃあ、入ろっか」

と、軽い感じで流すと早速入り口のドアを開けて中に入つていった。

であい

私の名は天々座ててざ 理世りぜ。

このラビットハウスでバイトとして働いている。

ラビットハウスは隣にいるチノのお爺さんが始めた喫茶店で、彼は去年に亡くなっており、今はチノの父のタカヒロさんが2代目マスターとしてこの店を切り盛りしている。

切り盛りしているとは言っても、タカヒロさんが店に出るのは、夜にラビットハウスが喫茶店からバーに顔を替えてからで、昼間は私とチノとココアの3人で働いている。

チノは今度中学2年生なのにすっかりしていて、昼間のラビットハウスのマスターとして頑張っている。

今までは私とチノ、そしていつもチノの頭の上にいる、この店の看板ウサギのティツピーの2人と1匹で店を回していたけど、

「チノちゃん、2番テーブルにブルーマウンテン1つ♪」

昨日から新しいバイトのココアも加わって3人と1匹で店を回す事になった。

ココアはこの春からこの街の高校に通う為に昨日街にやって来てチノの家にホームステイとして暮らしている。

ココアの通う高校は『ホームステイ先の家の手伝いをしろ』と言う決まりがあるらしく、彼女は昨日からこのラビットハウスで働き始め、先輩である私は、ココアに色々と指導する立場となったのだ。

ココアのバイト初日という事で少し不安もあったが、特に問題もなくバイトが終わり帰宅した。

……ただ、私が帰る時に仲良さそうに夕食の話をしている2人を見て、羨ましさと同時に少し寂しさを感じたこと以外は。

(……そういえば今日私の所にも、ホームステイしに誰か来るんだっ  
たな。)

私は今朝、親父に言われた事を思い出す。

親父が言うには軍人時代の同期が、「海外に出張に行く間、息子と私の友達を預かって欲しい。」と、頼って来たらしいのだ。

なんでも最初この街に来るのは息子だけだったらしいが、後から友達も来る事になって、(なんで友達も?)と、頼まれた親父も最初そう思ったらしいが特に気にすることなく受け入れたらしい。

2人ともこの春から高校生で、息子の方は今年から始まる共学化試験のため、特待生として私の通っている学校に来て、友達の方は別の高校に通うそうだ。

(どんな奴なんだろう……。仲良く出来ると良いな……)

私は淡い期待を持ちながらいつも通り仕事をこなしていった。

——第9話 であい——

それから数時間が経って、ランチを食べに来ていたお客さんが全て帰り、店内がひと段落して、私もチノもココアですらも手持ち無沙汰を感じ始めた頃、来客を知らせるベルが鳴った。

「いらっしやいませ」

たまたまドアに近かった私が接客する。

来店して来たのは、2人の女性客だった。

片方の少女は、顔立ちが私やココアとあまり変わらないので、多分高校生なのだろう。

女性にしては少し短い黒髪で、白いシャツの上に空色のカーデiganを羽織っており、ズボンには黒色のジーパンに赤色のスニーカーで何故かそれらは全てメンズだったが、違和感はなくとても似合っていた。

もう片方の女の子はピンクのフリル付きのTシャツに黒のボイダーが入った赤色のパーカー、青色のハーフパンツ、白色のスニーカーで、頭には猫耳のような突起の付いた赤紫色の帽子を被っていた。

そして背負ってる白い羽の付いたピンクのカバンやその顔立ちや幼い雰囲気から多分中学生だろう。

2人の顔立ちはあまり似てなく、一見すると友達だと思ったが、友達と言うにはまるで家族や姉妹みたいに親しい雰囲気だった。

そして2人は旅行者なのか、この辺りで見かけない顔で、それぞれ空色と赤色のキャリーケースを引きずっている。

「お2人ですか？」

「はい」

「では、こちらへどうぞ」

今は他に客がないので、私は2人をカウンター席に案内する。

カウンターには、チノが珈琲豆を挽いており、チノの頭にはいつも通りティッピーが乗っていた。

女の子はティッピーが気になったのか、席に座った後ティッピーを不思議な物を見るような顔をして、じーと見つめる。

「……？ ……あ、これですか？ これはティッピーです。一応ウサギです」

チノは女の子の視線に気づいたのか手を止め、ティツピーの説明をすると、女の子は「！ウサギ!? ねえ、触っても良い?」と、チノに聞く。

「コーヒーマー杯で1回です」

女の子の質問に間髪入れず答えるチノ。

その対応は少し手慣れていて、まるで以前にも同じ事を聞いた客がいたような雰囲気だった。

そんな事を思っていると、近くでテーブルを拭いていたココアが「あのお客さん、昨日の私と同じ事言ってる。」と、私に耳打ちしてきて、思わず（お前だったのかよー）と、ココアにツツコミそうになった。

「じゃあ3杯で!」

少し考えた後、女の子は指を3にして答えると、女の子の隣に座っている少女が「ユキ、コーヒーマー飲み過ぎると夜寝れなくなるよ。」とまるで姉のように嗜める。

「ムウ、じゃあ2杯で」

嗜められた女の子は素直に2つに変えた。

「かしこまりました。お客様はどうしますか?」

「じゃあ……、僕はオリジナルブレンドをお願いします。」

チノがその少女に聞くと、少女はメニュー表を開き、少し迷った後オリジナルブレンドを注文した。

「かしこまりました」

注文を聞いたチノが一度お辞儀をしてから後ろの棚からコーヒーを淹れる器具を取り出し、慣れた手つきでコーヒーを淹れ始める。

「……………」

数分後、チノが淹れた3つのコーヒーが2人の前に置かれた。

コーヒーからは芳醇な香りがあり、カウンターから少し離れた所の机を拭いていた私とココアの元にもその香りが届く。

「いただきます」「いっただいだっきまーす」

少女はブラックで、女の子はそれぞれのカップにミルクと角砂糖を1つずつ入れ、一口飲む。

「美味しい。」

「うん、このブルーマウンテンも美味しいよ。」

「ん？ それコロンビアじゃないの?」

少女は香りだけでコーヒーの銘柄を答える。

「えっ!?!」

「はい、コロンビアで正解です。」

(すごい、チノと同じ事を!?)

「よし、次は当てるぞ〜!」

私が驚いている間に一杯目を飲み切った女の子が次のカップを手にとって一口飲んだ。

「うん。このコロンビアも美味しい。」

「ユキ、そっちがブルーマウンテン。」

「えっ!?!」

「はい、ブルーマウンテンで正解です。……驚きましたコーヒーにお詳しいんですね」



「はい、家でもよくコーヒー淹れるので。」

「！　そうなんですか。ならあの、うちのオリジナルブレンドの味、どうでしたか？」

意を決したという表情でチノがその少女に淹れたコーヒーの味を聞いた。

今日はその光景を何度か見る。

なんでも昨日、とある客にオリジナルブレンドを出した所、インスタントコーヒーと間違えられたらしいのだ。

他のコーヒーなら気にしないだろうが、オリジナルブレンドはこの店の顔とも言えるもので、その味が客の口に合うかはいつも気になっているのだろう。

それを示すようにチノの表情は少し心配そうだったが、真剣そのものだった。

そんなチノの雰囲気を感じ取ったのか、少女の顔つきも真面目なものになり、今度は味わうようにコーヒーを飲む。

「……。」

私とチノが見守る中、少女はカップから口から離すと、

「美味しいです。素人の僕が言うのもなんですがコーヒー、淹れるの上手なんですね」

ふわりとした笑顔を浮かべてコーヒーの味を褒める。

「！　あ、ありがとうございますー。」

それが嬉しかったのか、ホツとしたのか、チノは少し頬を赤らめ口元をほころばせながら少女に礼を言ったのだった。

かんげいー

「フワフワ〜♪」

ラビットハウスに由紀の嬉しそうな声が響く。

今、コーヒーを飲み終えた由紀が、チノに許可を貰ってティツピーの毛並みを堪能しているのだ。

由紀の撫で方は上手く撫でられてるティツピーも気持ちよさそうだった。

「良かったね、ユキ。」

「うん♪」

それを横で見っていた冬華が声をかけると、由紀は嬉しそうに返事する。

—————

「?」

しばらくした後、冬華が何かの視線に気が付き顔を上げる。

冬華が感じた視線の正体、それはティツピーを撫でている由紀を羨ましそうに見つめているココアの姿だった。

(……う？この店員さん、どうしたんだろう?)

そんなココアを冬華は不思議そうに見つめ返していると、

「? ……! ココアさん、ティツピーをもふもふ出来ないからって、お客さんをそんな目で見つめないで下さい!」

冬華の視線を追ったチノが由紀を羨ましそうに見ているココアに気付き、ココアを注意する。

しかし、注意されたココアは、

「えー、私もティツピーをもふもふしたいもん!」

と、駄々をこね始めた。

年齢的にはココアの方が上なのだが、駄々をこねているココアは、

窘めているチノより幼く見え、そんな2人のやり取りを見ていた冬華はココアかチノ、どちらが年上なのか一瞬分からなくなってしまうた。

ー第10話 かんげいー

「ウサギを撫でさせていただいてありがとう。ティツピー、すつごく気持ち良かったよ。」

しばらくしてティツピーの毛並を堪能した由紀がティツピーをチノ（の掌の上）に返す。

「いえ、こちらこそ。ティツピーも気持ち良さそうでしたし。良かったですね、ティツピー。」

そう言つてチノがティツピーに優しく微笑むと、ティツピーはチノの掌から頭の上にジャンプで移動する。

ティツピーの特等席はチノの頭の上なのだ。

「……そう言えばお2人ともキャリアバックを持っていますが、この街には旅行で来られたのですか？」

冬華がおかわりのコーヒーを、由紀がサイドメニューのショートケーキを頼んでそれが運ばれて来た頃、冬華と由紀の横にあるキャリアバックが気になったチノが2人に質問する。

「いいえ、引越して来たんです。僕ら、この春からこの街の高校に通う事になって、今ホームステイ先の家に行く途中なんですよ。」

チノの質問にキリマンジャロが入ったカップを置いた冬華が事情を説明する。

「そうだったんですか。」

「そういえばトー君、下宿先の家の名前ってなんだったつけ？」

「ん？ 天々座さんって人の家だよ。」

「!!?」

冬華が何気なしに答えた由紀の質問に、チノとりゼの動きが止まる。

「? どうかしたんですか?」

2人のその突然の行動に疑問を感じた冬華は、何故か驚いているチノとりゼに聞く。

「……えつと、すみませんが、そのテテザさんの家が記した地図か何かあったら見せて頂けませんか?」

「? 地図ならここにがあるよ。」

チノの質問に疑問を覚えながらも、由紀は鞆の中にしまった地図を取り出し、カウンターのの上に広げてみせた。

「……うちだ。」

「……え?」「?」

地図を見たりゼが呟くと、冬華はポカンとした顔をして、由紀は頭の上に?マークを浮かべる。

「だからここ、うちの家だ!」

「……へ!?!」

もう一度、さつきより大きな声で呟いたりゼの言葉に冬華と由紀は同時に声を出す。

「えつ、じゃああなたが天々座 理世さん……なの?」

「そうだ。じゃあお前達が上白 冬華と丈槍 由紀なのか?」

「ハイ、そうです。……凄い偶然ですね。偶々休憩がてら入ったお店にこれから御厄介になる家の人が働いているなんて……」

「偶然を通り越して運命だよ!」

冬華の言葉を遮って突然立ち上がった由紀がりゼの両手を握ってそう叫ぶ。

(いきなり運命感じられた!?)

対するリゼは突然の事で着いていけず、

(昨日のココアさんみたいな事言ってる……。)

チノは昨日のココアと似たような事を言う由紀に、(なんだこの客)と、怪しいものを見る視線を送った。

「リゼちゃん、このお客さんと知り合いなの？」

話の流れに唯一着いて行けてないココアがきよんとした顔をしてリゼに問いかける。

「あ、ああ。チノには言ったけどそういえばココアにはまだ言っていなかったな。」

紹介するよ、2人は今日から私の所でホームステイする事になった、」

「上白 冬華です」

「丈槍 由紀だよ」

「で、こっちはこのラビットハウスで一緒に働いてる、」

「香風 智乃です」

「保登 心愛だよ」

「チノはこのラビットハウスの代理オーナーなんだ。」

「代理オーナー!? すごーい!!」

「だね。チノちゃん小さいのに偉いよ。」

リゼからチノの説明を受けた由紀と冬華は共にチノを褒める。

……冬華はチノの頭を撫でるオプション付きで。

「……!／／／ あ、あのトウカさん、これは……?／／／」

その頭を撫でる動作があまりにも自然だったため、自分が撫でられてる事に気付かなかったチノだったが、自身の状況を理解すると、顔を真っ赤にした。

「ん？ ああ、いつもユキにするからつい癖だね。……ごめん、嫌だよね。」

そんなチノの表情が怒っている事と勘違いした冬華はチノに謝つてから頭から手を離す。

その時にチノが小さく「別に嫌ではなかったです。」と呟いたが、その音はココアの「リゼちゃん、次は私を紹介して。」という声にかき消されて誰の耳にも届かなかった。

「分かった分かった……。えっと、ココアは春からこの街の高校に通う事になって昨日この街に来たんだ。ちなみにホームステイ先はここだぞ。」

「そうなんだ。じゃあ下宿人同士よろしくね♪」

リゼからココアの説明を受けた由紀がココアにひまわりのような笑顔を送ると、

「うん、よろしく♪」

ココアもひまわりのような笑顔を返す。

そんな2人を見たりゼと冬華は、

(なんか2人ってよく似てるな。)

と感じた。

「それにしても昨日の今日で、もうアルバイトを始めてるなんて凄いですね。」

「それは、私が通う学校の方針で、ホームステイ先の家でお手伝いをしなさい”って規則があるから手伝っているの。」

でもその規則が無くても、こういうお店で働いてみたかったんだ。」

「そうなんですか。制服、よく似合ってますよ♪」

冬華は笑顔でココアを褒める。

ココアが着ているピンク色の制服はココアによく似合っていたからだ。

「ありがとう／＼」

そして褒められたココアは若干顔を赤らめながら笑顔で礼を言った。

## かんげい2

冬華 side

「そういえば、トウカとユキはいつ家に来るんだ?」

しばらくおしゃべりをして、お互いがお互いを気軽に名前で呼べる位に仲良くなった頃、リゼが僕とユキにそう質問してきた。

「うーん、僕的には一緒に行きたいですね。でもリゼのバイトって……」

僕は少し期待を込めた瞳でリゼを見上げるが、リゼの「ああ、まだ暫くかかるな。」という返答を聞いて「そっか……。」と顔を下ろした。

僕とユキはリゼの家が描かれた地図を持っているし、ユキは地理に強いので迷う事はないのだが、始めて訪れる街でやはり不安もある為、リゼに付いてきて欲しかったのだ。

ちなみにさつきからリゼを呼びすてで呼んでいる理由は、リゼが自分の事は呼びすてで呼ぶようにと言ったからである。

「それでどうする? 私と一緒に行くのならもう少し待ってもらおう事になるけど。」

リゼの提案に僕は「……んー」と少し悩んだ後、  
「やっぱり先に行きます。」

リゼに付いてきて貰うのは心強いけど、そのせいでリゼのお父さんを待たせるわけにはいきませんし、ここで待たせて貰うのもお店に失礼ですし。……えっと、勝手に決めちゃったけど、ユキもそれで良い?」

「うん、大丈夫だよ。チノちゃん、コーヒーとケーキ、ごちそうさまでした♪」

自分の不安よりも待っている理座リゼのお父さんさんや、このラビットハウスの事



を思って先に進む事を決めたが、僕一人で勝手に決めてしまった事に気付いて、ユキに確認をとったら、ユキは僕の案に賛成してくれて、チノちゃんに向かってお礼を言った。

そしてそれと同時にカウンター横の扉から、1人のバーテンダーの服を着た男性が現れた。

――第11話　かんげい2――

カウンター横の扉から出てきた男性はチノちゃんのお父さん、香風タカヒロさんだった。

そして彼は僕とユキに「ラビットハウスで働いてみないか？」と提案してきた。

その突然の提案に驚いたけど、ユキが「やってみたい」と言ったので僕も働く事にしたのだ。

僕らが働く事になったので、僕とユキは今、ココアちゃんの案内で更衣室に向かっていた。

その間にチノちゃんは僕らの制服を取りに、リゼは店番を、タカヒロさんは理座さんに僕とユキが遅れる事と、リゼと一緒に行く事を電話で伝えてもらっている。

本当は僕が電話しなきゃいけないのだが、タカヒロさんは理座さんとも知り合いで、他にも用があると言っていたのでお願いして貰った。

「それにしても春樹おじさんとチノちゃんのお父さんとリゼちゃんのお父さんが知り合いだったなんて驚きだね。」

2階へと続く階段を上がっていると、後ろを歩いているユキが僕に声

をかけてきた。

そのユキの言葉に僕は「そうだね」と答える。

父さんと旧知の仲であるタカヒロさんは、僕の事も知っていた。

何故かと聞くと、彼は笑って「君のお父さんは俺によく『俺の息子は働き者で人に優しい良い子だ。』と電話でよく話していたよ」と答える。

それを聞いて、恥ずかしくてつい赤くなってしまったのはユキには内緒だ。

「ここが更衣室だよ。」

ココアちゃんの声で我に返った僕が顔を上げるといつの間にか2階に来ていて、ココアちゃんが2階にあるいくつもあるドアの中の1つを開けた所だった。

ココアちゃんの元に行つてその部屋を覗くと部屋の中にはクローゼットがズラリと並んであるのが見える。

部屋の雰囲気からしてどうやらここが女子更衣室らしい。

「わあ！ クローゼットがたくさんだ。」

更衣室の中に入ったユキがそんな感想を漏らした。

(さて、女子更衣室の案内が終わったし、次は男子更衣室の案内かな。) そう思つてココアちゃんの方を向くが、いつまで経つてもココアちゃんは男子更衣室の案内を始めず、

「じゃあ、ユキちゃんが使うクローゼット選ぼつか。」

と、更衣室に入つて行こうとしていた。

「ね、ねえココアちゃん。僕はどこで着替えれば良いの?」

慌てて部屋に入るココアちゃんを呼び止め、そう質問すると彼女は

頭に？マークを浮かべる。

……その表情を見て、僕は何か嫌な予感を察知した。

「あ、あのココアちゃん、」

「トウカさん、ユキさん、制服持って来ました。」

その嫌な予感を確かめようとしたが、タイミング悪くチノちゃんがやってきて、廊下にいる僕と更衣室の中にいるユキに透明な袋に入ったラビットハウスの制服を渡した。

そして肝心のココアちゃんもユキに呼ばれ、更衣室の中に入ってしまった。

しかもココアちゃんは更衣室に入る時にドアを閉めた為、廊下に一人残された僕は疎外感が半端ない。

「自分で確かめるしかないのか……。」

僕は渡された制服を袋の上からしばらく眺め、ため息を吐いた後、恐る恐る袋から中身を取り出していく。

袋から出てきたのは、若草色のベスト、白色の長袖のシャツ、襟に付けると思われる緑色のリボン、そして……、

「……………」

それを目にした瞬間、僕は先程の嫌な気配が的中してしまった事を思い知らされた。

……何故なら今僕が袋から取り出したのは黒色のスカート。

チノちゃん達が履いているものと全く同じタイプのものだった……。

「……………」

僕は取り出した制服を綺麗に畳んで袋に戻していく。

「? どうしたんですか? トウカさん」

その時更衣室のドアが開き、中から出てきたチノちゃんが不思議そうな顔をして僕の元にやってきた。

「……チノちゃん、僕、こういう者なんだ。」

出した制服をシワなく袋の中にした後、財布から中学校の時の学生証を取り出してチノちゃんに渡す。

「学生証ですか? どうして今更自己紹介など。」

相変わらず不思議そうな顔をしたチノちゃんは、そう言っただけで僕が学生証を受け取ると、無言でそこに書かれている内容を眺め始めた。

「……!!」

そして少しした後、僕の学生証のある一点を見つめ固まってしまった。

……どうやら見つけてしまったらしい。

「チノちゃん、どうしたの?」

ドアの開閉音と共に、更衣室の中にいたココアちゃんも廊下に出てきた。

「学生証? あっトウカちゃんのかあ。へえー、*“冬華”* ってこう書くんだ。」

チノちゃんの手を持つ僕の学生証を覗いたココアちゃんが、そこに書かれてる事を読み上げていく。

「巡ヶ丘市の巡ヶ丘学院中学校か……。聞いた事もない所だね。えつと、年齢は……。わあ、私と一緒に……。あれ?」

ココアちゃんもチノちゃん同様に僕の学生証のある一点を見つめ動きを止めた。

そして、しばらくした後、

「……男、の子？」

と、呟いて僕を見上げる2人の瞳は、信じられないものを見る色をしていて僕がコクンと頷くと、ラビットハウスの2階にココアちゃんの驚いた声が響き渡った。

そしてその声で下からリゼとタカヒロさんがやってきたので、放心するココアちゃんとチノちゃんに代わって僕が2人に事情を説明する羽目となる。

不幸中の幸いかりゼとタカヒロさんは僕の性別が男だと知っていた為、説明したらすぐに分かってくれた。

――

そんな軽い騒動の後ラビットハウスの2階、更衣室とは別の部屋で、僕はタカヒロさんが用意してくれたバーテンダーの服に袖を通す。

気がかりだったサイズもぴったりで、そのままボタンを閉めズボン履き、襟元に蝶ネクタイを付ける。

「……。うん、オッケー。」

近くにあつた姿見でおかしな所がないのを確認した後、更衣室から出て階段を降りていく。

「ふう……。よし。」

1階のホールに続く扉の前に辿りついた僕は、その前で軽く深呼吸した後、扉を開けた。

「お、来た来た。うん、トウカよく似合ってるな。」

「だね。トウカ君格好良いよ。」

「サイズもぴったりですね、良かったです。トウカさんよく似合ってますよ。」

「トー君かっこいい。」

扉を開けると、その音に気が付いたのか、4人が僕の方を振り向き褒めてくれた。

嬉しい反面恥ずかしいな。

「みんなありがとう／＼ ユキもその制服似合ってるよ。」

「ありがとう、トー君。」

ユキの服装がここに来た時の服からチノちゃん達が着ているラビットハウスの制服に変わっている事に気付いた僕はユキを褒める。

ユキに渡された制服の色はオレンジ色で、活発でいつも元気なユキによく似合っている色だった。

### かんげい3

いよいよ始まった冬華と由紀の初バイト。

しかし幾ら待っても肝心のお客さんが来ないので、チノの提案により2人はリゼからラテアートを習う事になった。

「取り合えず手本はこんな感じだ。」

「おおー！」

先にリゼが手本としてウサギの絵を描いてみせる。

リゼの描いたウサギはとても上手で可愛く、その出来栄えにおもわず2人の口から感嘆の声が出た。

「リゼ、ラテアートすごく上手だね！」

「そ、そんなことはないぞ。」

冬華に褒められて恥ずかしかったのか、リゼは顔を赤くした。

「そんなことあるよ。リゼちゃんが描いたこのウサギの絵、上手で可愛いよ！ ねえ、他にも何か描いて。」

そんなリゼに由紀は上目遣いをしながら、まるで姉に甘える妹の様におねだりした。

「そうか、他のも見たいか。よしユキ、トウカ、よく見とくんぞぞ！ うおおお!!」

由紀のおねだりで気をよくしたりゼは、物凄い勢いでカップにミルクで絵を描き始める。

「出来たー！」

数十秒後、ラテアートが完成したりゼは満足気に、描いたそれを冬華と由紀に見せる。

「こ、これは！」

カップに描かれていたのは1台の戦車の絵だった。

しかもその車体には迷彩柄が入っていて、砲台の先には砲撃を撃つ

た後なのか、煙が出ているという芸の細かさだった。

「す、すごい！」

その凄さに冬華と由紀はさつきとは違う意味で感嘆の声を出した。

その後2人もラテアートに挑戦し、冬華は祖母が飼っている柴犬を、由紀は髪に付けているヘアピンのクマをそれぞれ描いて、リゼによるラテアート教室は幕を閉じた。

——第12話 かんげい3——

「……それにしても、お客さん来ないですね。」

ラテアート教室が終わって暫くした後、店内を見渡したチノが呟いた言葉につられ、他の4人も店内を見渡す。

ランチの時間もおやつ時間も過ぎたこの時間は、客足が少なくなる時間の為、店内には1人も客はいなかった。

そんな店内を見て、席に座っていたココアが突然「そうだ！」という声と共に立ち上がる。

「ど、どうしたの、ココアちゃん？」

冬華は驚きながらココアにそう尋ねる。

他の3人もココアの突然の行動に驚いて自然と視線をココアに向けていた。

そして、4人の視線を受けたココアは、

「お客さんいないなら私たちがお客さんになれば良いんだよ！」

と、元気よくそう言い放った。

「!」

「?」

ココアの提案を理解したりゼと冬華と違い、よく分からず頭に？マーク浮かべた由紀とチノだったが、



「なるほど、つまりチノちゃん達がお客様役をやって、僕とユキの接客スキルを見るって事だよな？」

「その通り！」

という冬華とココアの会話で2人もココアの提案内容を理解した。

「しかも今回は店員役のトウカ君とユキちゃんはお客さん役の私達の事を『お客様』じゃなくて『おねえちゃん』って呼ばなきゃだめだからね！」

「なんだそのルール！ 2人も何とか言ったらどうだ。」

ココアの立案におもわずリゼがツツコミを入れ、冬華と由紀に聞く。

ココアの案は、ただ単に2人から『おねえちゃん』と呼んで貰いたいがための下心丸出しの案なのだが、当の本人達は「まあ別に良いよ？」と特に気にすることなくそれを受け入れた。

「やったー!! じゃあ早速！」

自分の案が受け入れられ、テンションが跳ね上がったココアが、外に出て行こうとすると、

「でもココアさん、お客さん役と店員役に全員が分かれてしまうと、実際にお客さんが来た時に対応が遅れてしまうので、せめて2人位は残しておいた方が良いのではないでしょうか？」

と、チノが冷静に指摘する。

「そっか、それもそうだね。それに気付くなんてチノちゃんエライエライ。」

指摘を受けたココアがチノの頭を撫でるが、撫でられたチノは「子ども扱いしないで下さい」と少し不機嫌そうな声を出すだけだった。

「それじゃあじゃんけんでお客さん役を決めよっか。勝った人が出来るからね！ じっくりよー。」

「じゃん、けん、ぽん！」

掛け声と共にココア、リゼ、チノの3人は同時に手を振り下ろした。

――

ラビットハウスの店内に「チリンチリーン」と、来客を知らせるベルの音が鳴り、客役のリゼとチノが来店してきた。

「いらっしやいませ♪」

その2人に向かって明るく笑顔と共に出迎える店員役の由紀と、その由紀を既にテストを終え、ティツピーとともにカウンターから暖かく見守る冬華。

「ううう……。」

そして、ホールの隅っこの方で項垂れているココア。

先程行われたお客さん役を決めるじゃんけんは、ご覧の通りココアの1人負けという結果に終わった。

そして、その時からココアのテンションはだだ下がりだった。

「いらっしやいませ、おねえちゃん達。こちらの席にどうぞ！」

項垂れているココアに気にせず、店員役の由紀がりゼとチノを窓側の席に案内する。

その際に由紀が言った「おねえちゃん」というフレーズを聞いて、ココアは「うっ！」と声を洩らし、更に項垂れるのだった。

ココアがここまで落ち込んでいるのは、雰囲気は違うがチノと声の似ている由紀から「おねえちゃん」と呼ばれる事で、少しでもチノから「おねえちゃん」と呼ばれる感覚を味わおうと企んでいたのだが、

「グーが、私のグーがあ!!」

その計画は、ココアが出したグーにより一瞬にして崩れ去った。

「おねえちゃん達、ご注文は何が良い？」

席に案内した由紀が手に持つメニュー表をチノとりぜに渡し、2人に注文を尋ねる。

「では、カプチーノとサンドイッチをお願いします。」

「じゃあ私はキリマンジャロとナポリタンで。」

「かしこまりました、しばらくお待ちください。」

2人の注文を受けた由紀が、その場で一礼してカウンターの方に歩いて行く。

そしてカウンターにいる冬華に注文の品を伝え、事前に用意してあった水の入ったカップと、空のお皿がそれぞれ2つずつ乗ったお盆を冬華から受け取り、リゼとチノの元に運ぶ。

「オツケーです。ユキさんも合格です。」

再びその場で一礼してカウンターの方に歩いて行く由紀の後ろからチノがテストの終了と合格を告げた。

その後、実際に何組かのお客さんを接客して、冬華と由紀の初バイトは無事終了し、5人で店内を掃除した後、冬華は空いている部屋で、他の4人は更衣室でそれぞれ私服に着替え、リゼ、冬華、由紀の3人はラビットハウスを後にした。

## かんげい 4

「♪」

ラビットハウスを出た3人は今、リゼの家に向けて歩いている。そしてリゼは気分が良いのか鼻歌を歌っていた。

「リゼちゃん、どうしたの？　なんかご機嫌だけど。」

「ん？　ああ、なんかこういうの良くなって思ってたな。」

「？」

由紀の質問に答えたりゼの言葉に冬華と由紀は首を傾げた。

それを見てリゼは話し始める。

昨日バイトが終わって更衣室で着替えている時、横で夕食を一緒に作ろうと楽しそうに話しているココアとチノを見て羨ましく思った事を。

2人がまるで姉妹のように話していて、ひとりっ子で昔から兄弟姉妹というものに少なからずの憧れを持っていた自分は、2人の姿を余計に羨ましく思ってしまった事を。

そしてそのせいで、1人で家に帰るのが少し寂しかった事を……。

「……。」

その話を冬華と由紀はただ黙って聞いていた。

何故なら、少し前を歩くりゼの顔は、後ろを歩く2人の位置からは見る事は出来ないが、2人はリゼの声色から彼女が悲しんでいるのは分かったから。

「だから、今朝親父から、『下宿人が来る』って聞いた時は驚いたし、嬉しかった。

だけど嬉しい反面、どんな奴が来るのか知らないから、仲良く出来るか不安だったんだ。でも、」

そこで一旦言葉を止めたりゼは、その場で立ち止まり、冬華と由紀の方にクルリと振り返る。

「2人とは仲良く出来そうだな。これからよろしくな。」

2人の顔を真っ直ぐ見て笑顔でそう言うリゼの顔は、照らされる夕日に負けない位輝いていた。

――13話 かんげい4――

その後、リゼに連れられてリゼの家に辿り着いた冬華と由紀は、初めて目にするリゼの家の大きさに驚いたり、3人を出迎える為にズラリと並んでいた黒服とメイドの多さに驚いたり、無事に理座リゼの父親に挨拶した後に出された夕食の豪華さに驚いたり、圧倒されっぱなしだった。

そして、

「ここが今日からトウカが使う部屋だ。」

「おおー！」

夕食後、リゼに案内された部屋はとても広く、テレビやシャワールーム等も付いており、そこら辺のホテルの部屋よりも豪華だった。

「で、こっちがユキの部屋だな。」

「わあー！」

リゼは冬華の左隣の部屋の扉を開ける。

由紀の部屋となるその部屋の中は、冬華の部屋と同じ間取りだった。

「じゃあ、私の部屋は隣だから何かあったら私に言えよ。」

「ありがとう、リゼ（ちゃん）」

由紀の左隣の部屋に入っていったリゼに2人はお礼を言ってから、冬華と由紀はそれぞれの部屋に入る。

そして冬華は、部屋に届けられていた自分の荷物を早速開封して

いった。

「ふう、さっぱりした〜」

数時間後、荷物の整理も終わり、お風呂から上がった冬華はベッドに寝転ぶ。

寝転んだベッドはとても心地よく、徐々に眠気が襲ってくるのを冬華は感じた。

このまま寝てしまおうと意識を沈めていく冬華だったが、扉をノックする音で目を覚ます。

「はーい」

扉を開けるとそこには、

「やつほー、トー君。遊びに来たよ。」

「や、やあこんばんは、トウカ。」

いつも通りの由紀と、その由紀に背中を押されて若干赤くなったりゼが立っていた。

就寝前なのか由紀もリゼも寝間着姿で、リゼはツインテールの髪も下して、何故か眼帯をしたうさぎのぬいぐるみを抱えている。

寝間着姿という恰好のせいか、手に持つぬいぐるみのせいか、それとも顔が赤くなぜかもじもじしているせいか、出会った時から見せていたリゼの凜とした雰囲気は影を潜めていた。

「？ リゼどうしたの？」

そんな今までの態度と違うリゼに冬華がそう問うと、

「わ、私は止めたんだ！ いくら同じ屋根の下に住む事になったとは言え、やつぱり夜に年頃の男の子の部屋に行くなんて／＼で、でも、ユキが『大丈夫だから』と無理やり連れてきて……、それでその、」

「？」

段々と尻すぼみになっていくリゼの声に、冬華はキョトンと顔で頭に？マークを浮かべる。

「……と、トウカは気にしないのか？」

「？ なにが？」

そんな冬華の表情を見て、リゼは何かを確認するように聞くが、またもや頭に？マークを浮かべられた。

「……。」

「ね、言ったでしょ？ トー君とはそんな事にはならないから大丈夫だって。」

「？ ユキ、何の話？」

「ううん、こっちの事。」

冬華の態度に唾然としたリゼ。

そのリゼに向かって明るく言う由紀の言葉が気になり、冬華が由紀に質問するが、曖昧に答えられてうやむやになってしまった。

その後、何故か吹っ切れた表情になったリゼと、いつも通りの由紀を部屋に通した冬華は、部屋にあったクッションを2人に渡して自分も座る。

そして3人で色んな話をして、気付いたらいつの間にか寝てしまった2人をベッドに運んで、自分は床に毛布を敷いて眠りについた。

そして次の朝、冬華が部屋を出て行った後に目を覚ましたリゼが、冬華のベッドで寝ていた事に気が付いて、顔を赤くしたのはまた別の話だ。

## にゆうがく1

前から薄々と感じていたとある違和感。

それはきつと本当に些細なものから始まったんだと思う。

“彼女”は周りとは比べて賢過ぎていて、どこか人間くさい、というその違和感は、ある1つの仮説を生んだけど、それは普通ではあり得ない事だったから最初は気のせいだと思って僕はその考えを切り捨てていた。

だけど“彼女”を見ていると、その仮説が日が経つごとにどんどん大きくなっていった、ある日ついにその証拠となる出来事に遭遇してしまった時、僕は“彼女”<sup>彼女</sup>を今まで通り見る事が出来なくなっていた。

そう、数日前から正式にバイトとして働く事になったラビットハウスで、飼っているウサギのティツピーの事を……。

「……。」

今、僕の目の前にいるチノちゃんとティツピーは共に青い顔をして、僕の視線から逃げないようにそっぽを向いていた。

同じ行動を取っているその2人（正確には1人と1匹）の雰囲気はよく似ていて、まるでイタズラが親に見つかった子供のような印象を僕に与える。



……その時点でおかしい。

ウサギのティツピーがチノちゃんと同じ行動を取ってるなんて、まるでティツピーが人の感情を持つてるみたいじゃないか。

普通のウサギなら我関せずでどこかに行けば良いのに。

そう指摘するとチノちゃんもティツピーも「ハッ」と気付いた表情をして、ティツピーはそそくさとどこかに行こうとするので、

「今更遅いよ……。」

と、少し呆れるように呟いて、ティツピーを掴んで元いたラビットハウスのカウンターの上に戻す。

ジダバタ暴れていたティツピーだが、

「どうやら言葉も通じてるみたいだね。」

と、言葉を放つとシュンと大人しくなった。

その行動からみても、そのタイミングからみても、人の言葉を理解していないと無理な芸当だからティツピーは本当に人の言葉を理解しているようだ。

「……まあ別におかしな事ではないか。

一緒に暮らしてる動物が人の言葉を理解したり、行動を真似するのはよくある事らしいし。

実際におばあちゃんが飼ってる柴犬もそうだから。

……でも、ティツピーの場合は違うよね？」

「！」

最後に付け加えたその言葉でギクリと身震いする2人。

……その行動はどう見ても肯定を示していた。

「……。」

「……。」

ホールに重たい空気が流れる。

目の前にいるチノちゃんの表情は辛そうで、それを見ていると段々

と申し訳ない気持ち膨らんできた。

だから、話を区切ろうと口を開きかけた時、

「あの、ここにいる私達と、父以外の人には絶対に言わないで下さい。」  
と前置きをして、チノちゃんは話始めた。

香風家だけが知っているティツピーの秘密を……。

――

チノちゃんが話してくれた内容はある意味衝撃的だった。

だって、ティツピーの中には数年前に亡くなったチノちゃんのおじいさんが憑依していて、彼が表にいるから人の言葉も理解出来るし、人の言葉も話せる。なんて話、まるで漫画の世界みたいじゃないか。そんな事、普通なら信じないだろう。

……でも僕は、たどたどしくも真剣に話すチノちゃんの様子を見て、彼女の言葉を信じる事にした。

まあその後、実際に喋ったティツピーを見て、これが本当の事だという事を嫌でも信じなきゃならなかったけど……。

――

「……ごめんね、つらい思いさせちゃって。

そしてありがとう、話してくれて。」

話終えた後、辛そうな表情をして俯いているチノちゃんを見て、僕のおふとした好奇心で彼女に辛い思いをさせてしまった事を実感させられ、まずはその事を謝ってから、話してくれた事に対する感謝を述べる。

「いえ、大丈夫です。それであの……。」

「うん、大丈夫。誰にも言わないよ。ユキにもリゼにも。」

心配そうに上目遣いをしてきたチノちゃんを安心させるようにそ

の言葉を呟くと彼女の表情は少し明るくなった。

そんな彼女の表情を見て、自然と僕とティツピーの顔もほころんだ。

「さて、話してくれたお礼、何かしないといけないね。」

「いえ、悪いです、そんな。」

僕の提案に慌てて立ち上がるチノちゃん。

そんな普段あまり見れない彼女の慌てた様子に再び顔をほころばせて、

「良いよ良いよ。」

僕が無理やり喋らせたようなものだし。

……と、言っても特に思いつくものないからな。

まあ僕に出来ることがあつたらなんでも言つてよ。

俺に出来ることがあつたらするからさ。」

そう言つて彼女の頭を撫でると、少し顔を赤くしたチノちゃんは「なんでも……。」と、小さく呟いた。

この時はまだ知らなかった。

この言葉が後にあんな事になるなんて……。

ーにゆうがくーー

「「いつてきまーす」」

ティツピーの一件から数日が経ったある日の朝、玄関に僕とリゼと

ユキの明るい声と、

「おう、3人とも気を付けてな。」

『いってらっしゃませ!!』

僕ら3人を見送る理座リゼの父さんと彼の周りにいる使用人さん達の声が響き、僕ら3人は門から敷地の外に出た。

「いいなー、リゼちゃんは。トー君と同じ学校行けて。」

天々座家を出て少しした頃、自分の通う学校の場所を確認する為についてきたユキが、僕と同じ学校に行くリゼに向かって羨ましそうな寂しそうなそんな表情で眩き、リゼは「同じ学校とは言っても、学年は違うんだけどな。」と返す。

……ユキの言葉通り、ユキが通う学校と、僕とリゼが通う高校は別々で、僕とリゼが通う学校は今日が入学式なのに対し、ユキが通う学校は明日が入学式である。

その為、今制服を着ているのは僕とリゼだけで、ユキは私服姿なのだ。

『引越したとしても、僕と違う学校になるけどそれでも良いの?』

ユキが僕と一緒にこの街に行くと言った時、僕はそう忠告した。

その忠告を聞いても尚、『一緒にいたい』と言ったユキは自分の両親を説得して、僕と共にこの街に引越して来た。

その為最初っから僕と同じ学校に通えない事をユキは知っている。

……知っているんだけど、それで彼女が納得しているかは別の話で、最近ユキが寂しそうな顔をしているのをよく見るようになった。

だから、少しでも元気付ける為にユキとある1つの約束をした。

「今度、ユキの好きなお菓子を1つ作る」という約束を。

僕が作るお菓子は結構好評で、中学の時はよく同級生から作ってとせがまれたり、誕生日パーティーをする際はお店でケーキを買わずに僕

がケーキを作る事が多かった。

お菓子作りの時は大抵僕が作るのを選んでるけど、誕生日の時はその誕生日の人がリクエストしたケーキを作っていた。

だからなのか、ユキに「好きなお菓子を作る」と言った時に「私まだ誕生日来てないよ?」とキョトンとした顔で言われてしまった。

その後、「今回は特別だよ。」と微笑むと、思った以上に喜んでくれたユキを見て、少しでもユキを元気付けようと思っただけの提案がこんなにも効果があつた事に対する驚きと、期待されてる事への喜びを感じ、ユキが何を注文しても過去最高の出来にしようと思つて決めたのはついこの間の事だった。

「それにしても、ユキ一人で大丈夫なのか?」

「ん? どういう事?」

少し前を歩くユキの背中を見て、少し前の事を思い出して微笑んでみると、横にいるリゼが心配そうな顔で僕に聞いてきた。

「いや、この街ウサギいるから、追っかけて迷子にならないか心配なんだけだ……。」

リゼの不安はよく分かる。

この街にいるウサギはどれも可愛く、見つけたらついつい追いかけてなくなる衝動に駆られるからだ。

ここ数日間、リゼにこの街を案内してもらったとは言え、僕もユキもまだまだ知らない場所の方が多い。

そんな場所にウサギを追いかけて、辿り着いたら帰るのが困難だろう。

でも、ユキなら大丈夫だ。だって、

「ユキ、ああ見えて地理に強いから大丈夫だよ。」

「そうなのか?」

リゼが少し意外そうな声を出す。

よく意外だと言われるけど、ユキは地理が強い。

知らない場所に一緒に行く時は、僕が持つより彼女に地図を持たせた方が上手く行く事が多いのだ。

この街に最初に来た時のように。

だから今回もユキ1人で高校の場所を確かめに行くのに実は特に不安や心配はしていなかった。

その事をリゼに説明するとリゼは「じゃあ、大丈夫か」と、安心して表情でそう呟く。

「おーい、トー君、リゼちゃん！早く早く。」

それと同時に少し前の方から僕らを呼ぶユキの声が聞こえてきた。

「はーい、今行くよ。」

その声に返事をして、僕とリゼは待っているユキの元に歩き出す。

## にゆうがく2

??side

ピッピピ、ピッピピ、ピッピピ、ピッ

いつも通りの時間に規則的な音で鳴り始めた目覚まし時計を止め、のそりと立ち上がった私は部屋のカーテンを開ける。

それと同時に心地良い朝日が部屋を照らし、開けた窓からは爽やかな風が部屋を通り抜ける。

きつと今日も良い天気になるだろう。

そう感じる事が容易に想像出来る程、清々しい朝だった。

「……。」

けど、私の今の気分はまるでどんよりとした曇り空のようにもやもやしていて、そんな気持ちを抱えたまま冷蔵庫に向かい扉を開ける。

冷蔵庫の中には昨日のスーパーのタイムセールで勝ち取った食材が並んでいて、その中から朝食に使う食材を取り出して調理していく。

「いただきます。」

十数分後、家具がほとんどない部屋に、折りたたみ式の簡素なテーブルを広げてその上に作った料理を置いて朝食を食べ始める。

1人分でそれ程量のないからあまり時間をかけずに朝食を食べ終えた私は、身支度をして昨晚の内に用意しておいた鞆を持って家を出た。

「千夜は……いないのね。」

家の隣にある甘味屋で働いてる幼馴染に会おうと、お店の窓から店内を覗いたけど目的の人物の姿はなく、看板ウサギが台の上にちよこんと座っているだけだった。

「……はあ。」

幼馴染がいなくておもわずため息が口から漏れた。

……別に彼女に用があったわけじゃない。

ただなんとなく、今朝は顔を見たくなくなったからお店を覗いてみたのだ。

でもないのなら仕方ない。

私は早々に諦めて、学校に向けて歩き出した。

ーにゆうがく2ー

トウカside

目の前にある分岐路は、右に行けばユキが明日から通う高校に、左に行けば僕とリゼが今日から通う高校に繋がっている。

……つまり、ここでユキとお別れという事だ。

僕らはなるべく3人の時間が長く続くようにと、少しゆっくりしたペースで歩いていた。

でも「楽しい時間はあつという間」という言葉通り、気付いたら分かれ道に到着していたのだ。

「あーあ、もう着いちゃったんだ。次に会えるのはお店だね……。」

少し前にいるユキが呟く。

僕の位置からはユキの背中しか見えないからユキがどんな顔をしていたか言葉で呟いたかはわからない。



でもその背中はどこか寂しそうだつた。

「ユキ……。」

そんな彼女を慰めたくて僕は手を伸ばす。

その手の行き先がどこになるかは分からないけど、手を伸ばせるのに伸ばさなくて、後で後悔するのは僕には出来なかつた。

そして、ユキに触れるか触れないかのその瞬間、

「なーんてね！

トー君迷子にならないように気を付けてね。リゼちゃん、トー君の事よろしくね。」

さつきまでの寂しそうな声はどこかへやら。

振り返つたユキは元気いっぱいで、僕の心配をしてくれた。

「……え？」

突然の事で僕もリゼは固まる。

でも少し冷静になってみると、ユキのさつきの行動は僕らに心配かけないようにと気にかけてくれた事に気付いた。

彼女のそういった心配りを昔からよく見て知っていたから。

そして、そんなユキの心配りに嬉しくなつて、伸ばした手で彼女の頭を撫でると、ユキは気持ち良さそうに目を細めた。

「それじゃあユキ、「行ってきます。」」

「うん。トー君、リゼちゃんいつてらっしゃい。」

そしてしばらくユキを撫でた後、僕はリゼと共にユキに見送られ、左の道に歩き始めた。

ちよつと後ろ髪を引かれながら……。

――

ユキと別れた後、リゼとおしゃべりしながら学校に向かって歩いてみると、

「そういえば、トウカの前の学校の制服ってカッターだったんだな。」  
「うん。まあこの制服に袖を通したのって今日が2度目なんだけだね。」

「そうなのか？」

「そうだよ。」

話題が僕が着ている服装から巡ヶ丘学園高校の制服の話になった。

普通ならこれから入学する高校の制服を着なきゃいけないのだけど、今僕が着ているのは、前の街で進学する筈だった巡ヶ丘学院高校の制服。

1ヶ月と少し前にユキと一緒に買いに行った赤色のネクタイの付いた白いカッターシャツに紫のズボンといった格好だ。

何故僕が前住んでいた街の高校の制服を着ているのかというと、これから通う高校はお嬢様学校、つまり女子校だからだ。

普通であれば男の僕が女子校へ通う事は出来ない。

だけど、その学校は今年から共学化に向けて動いていて、その中の「男子生徒特別入学制度」という、男子生徒を特待生として実際に入学させて、その生徒に改善点を挙げさせる制度が出来て、それを利用して僕は女子校へ通う事になったのだ。

しかし、去年まで女子校だった学校に男子を入学させるという特異な状況の為に、学校側も色々準備で忙しかったのか忘れていたのか、男子用の制服は用意出来なかったそうだ。

その後何度か話題を転々として色んな話をしながらリゼと共に学校に向かつて歩いていると、前方からココアちゃんが歩いて来るのが見えてくる。

制服を着ているところを見ると、どうやら彼女も今日が入学式のようだ。

「あ、リゼちゃん、トウカ君おはよう♪」

ココアちゃんは僕らを見つけると駆け寄って来る。

彼女が着ている制服はピンクのカーディガンに赤いチエツクのスカートといった明るめのもので、いつも元気な彼女にその色はよく似合っていた。

「おはようココア」

「おはよう、ココアちゃん」

「2人の学校の制服かっこいい!」

「ありがとう」「別に普通だろ?」

ココアちゃんの言葉に僕は普通に返答したが、リゼはちよつとツンとした言い方で返す。

ツンとした言い方だったけど、彼女の頬は少し赤くなっている。きつと褒められて嬉しかったのだろう。

ココアちゃんもそれに気付いたのかクスクス笑っていた。

「ブレザーもいいなー。ねえ、制服交換してみない?」

「おいおい、自分の学校に行けよ。遅刻するぞ?」

「あ、そっか。じゃあまたお店でね〜!」

そう言ってココアちゃんは去って行った。

「次にココアちゃんに会うのはお店かな。」

「だな。じゃあトウカ行こっか。」

「うん。」

そんな会話をして、僕らは再び学校に向けて歩きだす。

しかし……、

「あ、リゼちゃんにトウカ君。また会ったね♪」

数分後、僕らは再びココアちゃんに出会ってしまった。

(ココアちゃんもしかして迷ってる!?)

「お前学校への道分かってるのか?」

僕と同じ事を思ったリゼがココアちゃんに声をかけるが、  
「心配なくても大丈夫だよ。じゃあね〜。」

ココアちゃんはどこ吹く風といった感じで去っていった。

「なあトウカ」

ココアちゃんが見えなくなつてすぐ、リゼが声をかけてくる。

その声は少し心配の色がこもっていた。

多分リゼも僕と同じ事を考えてるのだろう。

「うん。ココアちゃん、迷ってるね……。」

僕らの予想は案の定その通りだったようで、その後も何度かココアちゃんと出会い、仕舞いにはリゼも「異次元に迷い込んでしまったのか!？」と、迷走した事を言い始めてしまう始末だった。

――

その後、漸くしたらココアちゃんと出会わなくなつて、平常心(?)に戻ったりリゼと共に高校に辿り着いた。

昇降口で2年の教室に向かうリゼと別れ、僕は職員室に向かおうと

したけど、ここで1つ事件が起こる。

「あれ……？ 職員室ってどこだっけ……。」

……なんと迷子になってしまったのだ。

お嬢様が多く通うこの学校は、とても綺麗であると同時にとても広く、歩けど歩けど「職員室」と書かれた教室なんてない。

まだ時間の方は大丈夫だけど、いつまでもこうしていたら転入初日から遅刻する事になるし、そろそろ職員室に着いておきたいのに、

「どうしよ、職員室の場所分かんない……。こんな事ならリゼに着いてきて貰えば良かった……。」

肝心の目的地がどこにあるかも分からないから行く事が出来ない。まさにピンチの状況だった。

そんなピンチの中、

「あ、あのっ！」

誰かに呼ばれて声のする方を向けば、そこには不思議そうな顔で僕を見つめる金色の髪の子が立っていた。

にゆうがく3

??side

幼馴染が働いているお店を離れて学校に向かう中、私の心の中にはここ最近の悩みの大元の、不安という名の感情が渦巻いていた。

原因は分かっている。

それは今日から始まる学校に対する不安。

その事を口に出すと今はいない心配性の幼馴染が心配してしまうから言えなかつたけど、心の中心なら言わせてほしい。

私のこの想いを。

——にゆうがく3——

私の家は正直言ってあまり裕福な家庭ではなく、お父さんとお母さんは出稼ぎに出ている、一緒には暮らしていない。

私自身もそんな両親の負担を少しでも減らそうと、幾つかバイトを掛け持ちしているし、これから通う高校も勉強を頑張ったおかげで、学費のかからない特待生として入学する事が出来た。

……お金持ちの家の女の子がたくさんいる、いわゆるお嬢様学校に。

そう、よりにもよって私が今日から通うのは、私と住む世界が違い過ぎる人がたくさんいる学校で、そんな所に行つてちゃんと馴染めるか。

その不安がここ数日の私の悩みの種だった。

そんな思いを抱えながらこの前買ったばかりのローファーを鳴らして歩いていると、徐々に私と同じ制服を着た女の子が増えていく。その女の子達はいかにもお嬢様といった雰囲気を持つ女の子達で、そしてその人数が10を超えた頃、見上げた先には立派な門のある綺麗な校舎が見えていた。

「大きい……。」

漸く辿り着いた学校の外観は、お嬢様学校と言われるだけあって広くて綺麗で、校門の方を見ると次々と生徒が校門をくぐっているのが見える。

そんな彼女達の後を追うように私も校門を通り抜け、昇降口で靴を履き替え、クラスに向かう。

私のクラスは1-A。

場所はこの校舎4階の1番奥の教室で、経路は先に廊下を突っ切って向こう側の階段を上るか、先にこつち側の階段を使って4階まで行ってから廊下を突っ切るかの2つがある事は事前に貰った配布物で確認してあるから迷う事もない。

(……ん?)

なんとなく先に廊下を突っ切る事にした私は、その途中で中庭を挟んだ向こうの校舎で困った顔をして右往左往している1人の女の子を見つけた。

(どうしたのだろう、あの子……)

……迷子かな?)

他校の制服を着て、不慣れな様子で右往左往するその女の子の事が気になった私は、渡り廊下を渡って向こうの校舎に入り、女の子に近付いていく。

女の子に声をかけるために。

(……あれ?)

でもその途中でふと、ある事に気付いて足を止める。

(……なんであの子、男性用の制服着ているのかしら?)

私の視線の先にあるのは、女の子が履いている紫色のズボン。

それはどう見ても男性用のものだ。

(え!? もしかしてあの子、男の子!?)

他校の男の子がどうしてこの学校に!? も、もしかして不審者!?

……ってそんなわけないわよね。

女子高であるのこの学校に男子生徒がいるのは不自然だったから、不審者なんてそんな考えに至っちゃったけど、その考えは女の子の顔を見た瞬間に消しとんだ。

だって、こんな女の子みたいな顔立ちの男の子なんている筈ないから……。

(きつと、姉妹か誰かの忘れ物を届けに来たのね。)

……そう結論付けた私は、

「あ、あのっ!」

緊張して戸惑いながらも彼女に声をかけた。

「ふえっ!」

突然声をかけて驚かせてしまったらしく、その女の子は可愛い声を



出して、ビツクリした表情をして私の方を見る。

でも、すぐに自分がした返事を思い出して恥ずかしくなったからか、カーと顔を赤くして俯いてしまった。

「……大丈夫?」

「は、はい。大丈夫です／＼ ……それで僕に何か用ですか?」

顔を上げた女の子の頬はまだ恥ずかしさが残っていた為赤かったけど、その瞳は不思議そうに私を捉えていた。

「えっと、なんか困っているみたいだから声かけたのだけど……もしかして迷子なの?」

「!」

“ギクリ”という音が聞こえて来そうな程、明らかに動揺したその女の子はパツと顔を下げる。

その反応を見るにどうやら迷子というのは本当だったみたいで、俯いて半分隠れた女の子の顔はみるみる内に再び赤くなって、暫くした後「……はい。入学手続きの書類を出しに職員室に行きたいのですが、場所が分からなくて……。」と小さく答えたその声は恥ずかしそうな雰囲気纏っていた。

(良かった。どうやら新入生みたいね。)

不審者ではなかった事に安堵してホツと一息吐く。

「そう。じゃあ職員室に案内してあげるから私に着いて来て。……つとその前にまずはあそこに行かなきゃならないわね。」

「?」

最後の言葉の意味は分からなかったみたいで彼女はコテンと首を傾げた。

冬華 side

ついさつき初めて会った女の子に「職員室に案内するから着いて来て。」と言われて着いて行くと、到着したのは保健室だった。

そしてそこで僕は女の子からある物を手渡される。

女子生徒用  
この学校の制服を。

(……ああ、久しぶり……でもないかこのデジヤブは。前にも、それもここ最近同じような事がラビットハウスの2階であったしなあ……。)

「どうしたの?」

既に懐かしいと思えるほど感じた既視感に襲われながら、(そういえばまだ言っけなかつたなあ。)と佇んでいると、キョトンとした顔で女の子が聞いてくる。

「えっと、実は僕、こういう者なんだ。」

そんなキョトンとしている彼女に僕はいつも通り一枚のカードを差し出す。

「? これ、この学校の生徒カードよね?」

僕がこの学校の生徒だと記したそのカードを戸惑いながらも受け取った女の子はそこに書かれた内容に目を通していく。

そして数秒後、

「え!!? ええええええええ!!?」

例外もなく彼女も驚愕の声を上げたのだった。

シャロside

迷子になっていた女の子……でなく男の子の上白 冬華君を無事に職員室に送り届けた私は、朝礼のチャイムが鳴る間近のタイミングで教室に辿り着いて、自分の席でグダーとする。

思い出すのは上白君の事。

さっきの事は今でも信じれない。

(まさか、男の子だったなんて……。)

生活の為に色んなバイトをしてきて色んな人を見て来たから、人を見る目には多少の自信があった。

けど、それでも分からない位、上白君は女の子っぱかった。

登校時に見かけたお嬢様オーラを纏った女の子達に全く顔色もない程に……。

そんな風に考え事をしてしていると、ふと教室の色んな所から黄色い声が聞こえてくるのに気付いた。

(ん？ ……なんだろう?)

「あの、何かあったんですか?」

気になったので、たまたま近くにいた人に聞いてみると、その子は、「この学校に男の子が来るみたいなんです! 同じ学年にならないかしら。」

と興奮した様子で話してきた。

周りを見渡すと同じような話題が所々で上がっている。

話題の男の子とは十中八九、今朝たまたま会った上白君の事だろう。

朝だけの短い時間だったとしても、違う学校の、それも男性用の制服を着ていた上白君の姿は多くの人に見られていたみたいで、もうこんなに話題になっていいるなんて、やっぱり女子校に男の子が来るなんてスゴイ事なんだ……。

(……同じクラスだったら良いな。)

ふと思った瞬間、チャイムの音がなってそれと同時に担任の先生と思われる少しボーイッシュな女の先生が教室に入ってきた。

それを見て、立っていた生徒はみんな自分の席に座る。

……私の前の席以外は。

……ん?

「みなさん始めまして。このクラスの担任となりました、夏海なつみ 甘奈かんな

です」

先生の明るい声が教室の中に響く。

「気付いた人はいると思いますが、このクラスには1つ空いている席がありますね」

その言葉に教室中がざわつき、みんなの視線が私の前の席に向けられた。

「その席に座る生徒を紹介する前に、この学校は今年から共学化へ向けて色々と準備を行っています。」

その試みの1つの男子生徒の試験入学ですが・・・、みなさんもう気付いていますね、そうです。そこに座る生徒こそが、その男子生徒です」

『キャー！！』

ざわめきだった声は歓声に変わった。

「ハイハイ、静かにしないと進められないよ。……よし、静かになったね。じゃあそろそろ良いかな？ 上白君、入って来て」

静寂が包む教室に1人の男子生徒が入って来て黒板の前に立つ。その男子生徒こそ、朝迷子になっていた上白君だった。

こんな物語みたいな偶然があるのだろうか。

教室を見渡した上白君は私を見つけると軽く手を振ってきた。

途端に周囲がざわつく。私は赤くなりながらも手を振り返した。

「ん？ 桐間さん、彼と知り合い？」

「は、はい。今朝偶然一緒になって」

「なら良かった。彼の席は君の前だし、色々フォローしてあげてね。じゃあ上白君、自己紹介お願い。」

「はい」

上白君は返事をして黒板に自分の名を書くとお辞儀をしてから自己紹介を始めた。

「巡ヶ丘という街から来ました、上白 冬華です。今回、共学化の試験という事でこのクラスでみなさんと共に学ぶ事になりました。

色々と至らない事もあると思うので何かあったら遠慮なく言っして下さい。

後、遠慮せずに気軽に話しかけて来てくれたら嬉しいです。これから同じクラスメイトとして宜しくお願いします。」

自己紹介を終えた上白君が再びお辞儀をすると一斉に拍手が起こった。

「上白君ありがとうね。君の席はさっきも言った通り桐間さんの前だよ。桐間さん、席前後だし知り合いみたいだから上白君の事色々フォローお願いね」

「はい、分かりました」

「シャロさん、これからよろしくお願いします」

前の席に座った上白君が右手を差し出してきた。

「うん、こちらこそよろしくね」

私もそう言って右手を差し出し彼と握手を交わす。

朝、感じていた不安はいつの間にか消えていた。

## にゆうがく4

ト一君とりぜちゃんを「いつてらっしやい」と見送った後、私はとりあえず当初の目的である高校の場所を知る為に、地図を見ながら分岐路の右の道へと歩き始めた。

「ん、なんか静かだなあ……。」

歩きながら呟くけど、その言葉に返す人は誰もいない。

（それもそっか。今ここには私一人しかないんだもんね。）

「……1人か。」

そう呟いて私はある事に気付いて足を止める。

（……そういえば1人で歩くのって結構久しぶりかな。）

この街に来てからはもちろん、前に住んでた街でもいつも隣にはト一君がいた。

ト一君の部活料理部の活動がある日みたいに、用事がある時は仕方ないけどそれ以外だったらいつも隣にト一君がいてくれたし、途中で別れるなんてこともなかった。

けど、明日から学校が始まれば、こうして途中から私1人だけで学校に行く事になる。

（また、だ……。）

ト一君が『転校する』と言ったあの日から、寂しい気持ちになると湧いてくるこの気持ち。

その正体は何なのか分からないけど、心がもやもやして、ぎわぎわして、周りの景色が色あせて見える。

綺麗な街の景色でさえも……。

(最近はなかったんだけどな……。)

つい最近までこのもやもやした気持ちは何かの度に頻繁に起こった。

この気持ちのせいで元気がない日もあった。  
でもある日、トー君が『ユキ私の好きなお菓子ケーキを作る』と言ってくれた。

トー君が誰かのリクエストしたお菓子を作ることは、誕生日みたいな特別の日じゃないとしないから「私まだ誕生日来てないよ？」と聞くと、トー君は優しい笑顔で「今回は特別だよ。」と微笑んだのを見て、私を元気づけてくれていている事に気付いて、心がぽあつとあつたかくなつたのを覚えてる。

それから全然もやもやした気持ちは起こらなかつたのにまた起こった。

(……やっぱりトー君と離れたから、かな?)

自分が思っていたより寂しい気持ちを抱いていた事に気付いて目をぎゅつとつむる。

綺麗な筈の街の景色が色あせている所を見たくないから。

「ん?」

しばらくそうして目をつむっていると前の方からガサガサと草が揺れる音が聞こえる。

その音が気になって目を開けた私の視線の先には、

1羽の白兔がちよこんと立っていた。

「おはよう。君も1人なのかな？」

しゃがんで近付いて来たそのウサギを抱えて膝の上に乗せる。

抱える際に少し暴れたけど、頭を撫でたら大人しくなって気持ち良さそうに目を細めていくそのウサギを見て、その柔らかな毛に触れて、さっきまで沈んでいた気持ちが少し軽くなったのを感じた。

————

「まてー♪」

「ん？」

どの位時間が経ったか分かんないけどウサギを撫でて和んでいると、後ろの方から聞き覚えのある女の子の声が聞こえてくる。

「あつ。」

そしてそつちに意識が向いた瞬間、膝の上に乗っていた兎がピヨンと飛び降りてどこかへ駆けていき、その後ろを別の白ウサギが追いかけていった。

「あう、逃げられちゃった……。」「

まだちよつと物足りなかったから、ムスウという気持ちが湧いてくる。

「あれ、ユキちゃん？」

そんな気持ちを抱えていると、後ろから私を呼ぶ声。

その声に反応して振り返ると、

「……ココアちゃん？」

そこにはどこかで見覚えのある制服を着たココアちゃんが立っていた。



「やっぱりユキちゃんだ。おっはよく。」

私の声に反応したココアちゃん元気よく挨拶して来る。

「おはよく、ココアちゃん。ココアちゃんはこれから学校？」

「うん、今日からなんだ♪」

「そうなんだ。」

(あれっ今日、入学式の学校ってトー君達の学校以外にあったっけ?)

ふと湧いた疑問はココアちゃんの「ユキちゃん聞いて聞いて。」という声に遮られる。

「どうしたの? ココアちゃん。」

「さっきリゼちゃんとトウカ君に会ったの!」

「え! トー君達に?」

「うん。しかも何回も会ったんだ。すごい偶然だよね!」

嬉しそうにそう話すココアちゃん。

……でも1つ気になる事があった。

「……何回も?」

「うん、何回も! 不思議な事もあるんだね。」

「ん、それはココアちゃんが迷子になったからじゃないかな……。」

「ん?」

ココアちゃんはキョトンとした顔で首を傾げる。

どうやら迷子だったって自覚はないみたい……。

それからココアちゃんとおしゃべりしながら暫く歩いていると、自然にっぱいの公園に辿り着いた。

そこは数日前にトーくんとリゼちゃんと一緒に来た公園で、リゼちゃんいわくウサギがよく来る公園らしい。

「わあ、ウサギだあ!」

「沢山いるね!」

今日も公園のいたる所には黒や白、茶色や灰色など色んな色のウサ

ギがいて、特に噴水の周りに多く集まっていた。

「……あれ?」

「ユキちゃんどうしたの?」

「あそこ、女の子がいる。」

私が指差す先、噴水のすぐ傍に緑色の和服を着た女の子がしゃがんで周りにいるウサギに何かをあげようとしていた。

「ホントだ。それになにかウサギにあげてるね、棒アイスかな?」

「んー、なんだろう……。」

女の子の手に持つ、黒色の棒アイスみたいなものが気になった私たちは、少しずつ女の子に近付いて行く。

そして、

「おいでー、おいでー。……羊羹、食べないわね。うちの子は食べるのに。」

「……ん? あら?」

手に持つ羊羹に1羽もウサギが食べなかつた事に少ししよんぼりした女の子が私達に気付いて顔を上げて静かにその羊羹を差し込んできた。

「千夜ちゃんっていうんだ。深みを感じる良い名前だね。」

「ありがとう。ココアちゃんもユキちゃんも良い名前ね。」

緑色の和服を着た女の子、宇治松 千夜ちゃんが差し込んできた羊羹を受け取って、近くのベンチに千夜ちゃんを挟む形で座った私たちは互いに自己紹介をする。

「それにしてもこの羊羹すつごくおいしいね。」

「だね! それにこの黄色いのって栗だったんだね。」

そう言いながら再び一口、栗羊羹を食べる。

程よいあんこの甘さと柔らかい栗の食感が口に広がって、とても美味しかった。

「気に入ってくれた？ それ私の自信作なの。」

「え、これ千夜ちゃんが作ったの!? すごい！」

「ええ。幾千の夜を行く月、名付けて『千夜月』！ 栗を月に見立てた栗羊羹よ！」

「すごい」「かつこいいい、」

「意味わかんないけど！」

ババン！ とそんな音が聞こえて来そうな雰囲気でその栗羊羹を掲げる千夜ちゃんに、最後の部分を被りながら答えると、千夜ちゃんは私たちの手を握る。

「私達気が合いそう。それにココアちゃんとは同じ学校みたいね。」

「あっ」

千夜ちゃんのこの言葉で気付いた。

上に着た桜色のカーディガンのせいでさつきは分からなかったけど、ココアちゃんが今着ているのは、明日から私が通う学校の制服。

入学式は明日の筈なのに、既に今日制服を着ているココアちゃんにその事を聞こうと声をかけようとココアちゃんの方を向いた瞬間、

「同じ学校……。あ~~~~っ！ 大変、もう始業式が始まっちゃう！」

千夜ちゃん、急いで!!」

当のココアちゃんは、いきなり大声を出して千夜ちゃんの手を取って駆け出してしまった。

「え……。いっちゃった……。」

どうしようトー君、ココアちゃんきつと日にち間違えてる。」

慌ててトー君に何かアドバイスを貰おうと振り向くけど、そこにはトー君はいない。

(そ、そうだよ、今はトー君と一緒にじゃないんだ！ んんどうしよ。)

いつも隣にトー君がいるから、ついいつもの癖でトー君に話しかけたけど、今はいない事に気付いて更に慌てる。

……そんな私の元に、

「あれれ、戻って来ちゃった！」

さつき駆け出して行ったココアちゃんと千夜ちゃんが帰って来た。

「良かった、戻って来た。って千夜ちゃん大丈夫!」

「あ、ありがとう、ユキちゃん。……あのね、ココアちゃん、うちの学校、入学式、明日なの。」

辛そうに呼吸する千夜ちゃんの背中をさすると、千夜ちゃんは息も絶え絶えさせながらココアちゃんに入学式が明日だという事を告げる。

「え?」

「だから入学式は明日で、今日はまだ春休みだよ。」

キョトンと首を傾げたココアちゃんに今度は私が入学式が明日だという事を告げて、背負っている白い羽の付いたピンクのバックから入学案内の紙を取り出してココアちゃんに見せる。

「……。」

「……。」

「……。」

「うわ~~~~っ! 恥ずかしい~~~~」

数秒の沈黙の後、ココアちゃんが手で顔を隠してその場に座り込む。

手の間から見えるココアちゃんの顔はまるでリンゴみたいに真っ赤だった。

「ふふふ、面白い子ね。それにその入学案内の紙、ユキちゃんも同じ学校だったのね。」

「うん。学校の場所がちょっとあいまいだから確認したくって。」

「そうなの。それなら2人が明日から迷わないようにみんなで一緒に下見に行きましょう。私、ずっとこの街に住んでるから学校の場所、知ってるの♪」

「二め、女神さま!」

学校の場所を案内するそう言って微笑む千夜ちゃんの後ろには私とココアちゃんにだけ見える後光が輝いていた。

「そういえばユキちゃん、トウカ君達は学校着いたかな?」



にゆうがく5

トウカside

自己紹介をした次の休憩時間、

(どうしてこうなったのかなあ……。)

自分の席に座っている僕は目の前の光景にただ、何も出来ず困惑していた。

とりあえず落ち着くのと、状況を確認する為、周りをぐるりと見渡す。

そこには空いている隙間なんてない位にどこを見てもクラスメイトの女の子が立ち塞がっていて、この状況を簡単に言うとは僕は今、クラスメイトによって包囲されていた。

「ねえ、上白君の好きな食べ物って何ですか?」

「ご趣味は?」

「巡ヶ丘ってどこにあるの? 私、行ってみたいな。」

「髪綺麗ですね。どこの商品を使っているの?」

「そもそも女の子にしか見えないけど上白君って本当に男の子なの?」

聞こえて来るのはあちらこちらから上がる僕への質問の声。

それは聖徳太子でもいっぺんに聞き分けられない程多く、時間が経つごとに比例して収まるどころか包囲の輪と共に増えていつている。

さつき周りを見渡した時に確認したけど、包囲の輪の中にはさつき自己紹介をした時にはいなかった女の子も多数いるし、人数的にも考えて他のクラスから来ている人もいるのだろう。

さつきから次々前と後ろのドアから他のクラスと思える女の子が教室の中に入ってくるのがその証拠だ。

まだ朝礼が終わって数分も経っていないのにこの状況である。

(いったい、いつになったら終わるの……?)  
そんな不安を覚えながら僕はただただ女の子たちの勢いに圧倒されていった。

結局、担任の先生夏海先生が来るまで質問の嵐は収まらず、僕の高校デビューは騒がしいもので幕を開けたのだった。

——第18話 にゆうがく5——

チノside

学校が終わり、家に帰った私はラビットハウスの制服に着替えていつも通りカウンターの上で転がっているおじいちゃんティツピーと喋りながらコーヒートの準備をしていると、

カランカラン

来客のベルの音と共に、トウカさんがお店に入ってきて来るのが見えました。

「おかえりなさい、トウカさん。」

「ただいまチノちゃん。学校どうだった？」

「はい、楽しかったです。友達とも同じクラスになりましたし。」

いつも学校の行きと帰りを一緒歩くメグさんとマヤさんと同じクラスになった事をトウカさんに話す。

中学校1年生だった去年、クラスに馴染めなかった私に声をかけて来てくれたのをきっかけで友達になった2人は私の大切な人です。

つい1年前にあった大切な記憶を思い出ししていると、トウカさんの「そっか。」と呟く声と共に頭に何かが置かれる感覚が。

見上げるとトウカさんが優しい笑顔を浮かべて私の頭を撫でていました。

「!／／／」

最近トウカさんによく頭を撫でられます。

出会った日やティッピーの中におじいちゃんがいるのがばれてしまった時以外にも、バイトの時や一緒に買い出しに行った時などに……。

別にトウカさんに頭を撫でられるのは嫌ではないです。

……嫌ではないのですが私は家族以外の、それも歳の近い年上の男の人に頭を撫でられる経験があまりない為、こうして頭を撫でられるとどうすれば良いか分からなくなります。

だからでしょうか？

トウカさんに頭を撫でられる度に私は顔がかーっと暑くなるのを感じます。

(……)

トウカさんは優しい人です。

トウカさん以外のラビットハウスで働いている人達はみなさんどこか騒がしい人ばかりなのですが、トウカさんはそんな事はなく私のペースを合わせてくれます。

私はひとりっ子なので分かりませんが、お兄ちゃんがいたらこんな感じなのでしょうか？

分かりません。

この気持ちは何なのかも……。

「トウカよ、いつまでそうしているつもりなんじゃ？」

「! そっか、着替ええないといつまで経ってもお仕事出来ないですね。じゃあチノちゃん、ちよつと待っててね、すぐ用意してくるから。」

しばらくした後、おじいちゃんに指摘されてハツとなったトウカさ



んは。パタパタと急ぎ足で裏へと消えていきました。

「チノちゃんおまたせ。」

数分後、裏へと繋がるドアが開きバーテンダーの服に着替えたトウカさんがホールにやって来ました。

そしてそれと同時に『カランカラン』と、お客さんのいない店内に來客を告げるベルの音が鳴り、「いらっしやいませ」と言おうと振り向いた瞬間、身体が包まれる感覚と共に視界が真つ暗に。

見上げると満面の笑みを浮かべたココアさんが私に「ただいま」と言ってきました。

……ココアさんはよく抱きついてきます。

出会った日から事ある毎に……。

嫌ではないのですが、暑苦しいですし、やめて下さいと言ってもやめてくれないので正直困ってます。

「ユキ、学校の場所ちゃんと分かった？」

そんな時、ふと聞こえてきたトウカさんの声につられて隣を見ると、ココアさんが私に抱きつくようにユキさんがトウカさんに抱きついていました。

「うん、バッチリだよ。」

途中で同じ学校に通う女の子に会って案内してもらったんだ。

でね、その子、千夜ちゃんって言うんだけど、千夜ちゃんと友達になつて明日の入学式も一緒に行く事になったの♪」

ただ違う点と言えば、私が若干嫌そうな表情でココアさんに抱きつかれているのに対し、トウカさんは優しい笑顔を浮かべて楽しそうに

話すユキさんの頭を撫でています。

そしてお2人の会話の内容は今日の学校の事。

「そういえばココアさんは高校、どうでした？」

「！こ、この街って、可愛い建物が多くて素敵だよね！」

そんなお2人に習って今日入学式があったココアさんにも学校の様子を聞くと、何故が別の答えが返ってきました。

……聞こえなかったのでしょうか？

「そうですか。高校はどうでしたか？」

「まるでおとぎ話の中の街みたいだね！」

ならもう1度と、繰り返した同じ質問にまた別の答えが返ってきました。

「あの、高校は……」

「聞かないで！」

「ユキさん、ココアさんが……。」

「あー、えーと実はココアちゃん、私と同じ学校だったの。だから、その……。」

私はココアさんと一緒に帰って来たユキさんに助けを求めると、ユキさんが言いにくそうに答えます。

(ユキさんと同じ学校……。)

ユキさんの通う学校は明日が入学式だから……。)

「……つまり入学式の日付を1日間違えた、ということですね？」

「言わないでー!!」

凶星だったようで、ココアさんは顔を真っ赤にして叫びながら膝から崩れ落ちました。

その後ココアさんが復活した頃に珍しく遅れてきたリゼさんも到着し、5人でお店を回していきます。

そしてその日もいつも通りココアさんとユキさんがミスする以外、特に問題もなくお仕事は終わりました。

そして次の日、

「ねえねえチノちゃん、このお店に大きいオーブンってないかな？」

ラビットハウス

「ここに来て早々、ココアさんがそう尋ねてきました。」

その後ろではユキさんがリゼさんとトウカさんに、ココアさんと昨日友達になった「ちやさん」という方と同じクラスになった事を嬉しそうに話しています。

「大きいオーブンですか？ それならうちにありますよ。おじいちゃんが調子に乗って買ったやつが。」

「つい、調子に乗って」の部分強調して言うと、頭の上に乗っているおじいちゃんティツピーがビクンと身じろぎました。

「ホント!?」じゃあみんなで見板メニュー開発しない？ 焼きたてパンおいしいよ！」

しかしそんなティツピーの様子など気付かず、ラビットハウスに大きなオーブンがある事を知ったココアさんが私やトウカさん達にパンを作る事を提案して来ました。

聞く所によるとココアさんの実家はベーカリー屋で、幼い頃からよくパンを作っていたらしいです。

そんなココアさんが今日、ユキさんと「ちやさん」と一緒に学校の帰り道を歩いている時にパン屋を見つけ、そのパンの匂いとショー

ケースに並んでいるパンを見て、久しぶりに作りたくなったらいいです。

「良いね、いつにする?」

「今週の土曜日はどうか?」 チノちゃんどう?」

「えっと、その日は……。大丈夫ですね、特にこれといって予定もありませんし。」

カレンダーでお店に予定がない事を確認すると、丁度その日は予定はありませんでした。

「やったー♪ 今から週末が楽しみだよ」

ユキさんは今からテンションが上がっています。

「話ばっかしないで仕事しろよ」

「「「」」」

リゼさんの指摘によって私達4人はハツとします。

そうでした、今はバイト中。

お客さんがいないからって少し気を抜き過ぎていました。

さて、お仕事しましょうか。

くきゆるるるるるく

(……今の音って。)

音の鳴った方を見ると赤くなったりリゼさんの姿が。

「出来たてのパンってすつごく美味しいんだよ」

「そんな事分かってる!」

くきゆるるるるるく

ココアさんの言葉にリゼさんが返答すると、再びリゼさんの方から音が鳴り、リゼさんの顔は更に赤くなりました。

……リゼさん、お腹空いてたんですね。

## にゆうがく6

シャロside

「あー！もうこんな時間。……仕方ない、近道しちゃおう。」

入学式のあった日の放課後、バイトまで時間があるからと立ち寄ったカッパ屋で思いの外多く時間の消費してしまった私は、バイトに遅刻しそうになったため近道しようと路地裏に入った。

「！」

けど、路地裏に入った瞬間に私は自分の行動を強く後悔する。

だって道の真ん中を塞ぐようにして座っている、そいつに出会ってしまったから。

鋭い眼光に、悪そうな顔立ちで植物の茎を啜えている、右目にある大きな傷跡のあるそいつに……。

(逃げなきゃ。)

そう頭では分かっているのにそいつを見た瞬間、身体はいう事が効かなくなり恐怖で足がすくえ、動く事が出来なくなる。

そしてそんな私に向かってじりじりとその灰色のそいつは近付いて来た。

逃げる事は出来ない。恐怖ですくんだ足が言う事を聞かず動く事が出来ないから。

今の私が出来る事といえば、

「た、たすけて……、誰か助けて……。」

ただ震える事と、か細い声で助けを呼ぶ事しか出来なかった。

だけどその助けを呼ぶ私の声は、

「あ、また道塞いでるな。」

幸運にも運命的な出会いを私に届けた。

振り向くと私と同じ制服を着た紫色のツインテールの女の人  
が立っていた。

「ほら、あっちいった。」

その女の人は勇敢にも私とそいつの前に立ち、手で追っ払う仕草を  
する。

するとそいつは悔しそうに啜えている植物の茎を吐き出してどこ  
かへ去って行った。

途端に安堵が私を包み、強張っていた身体から力が抜けて私は立つ  
事も出来ずにその場でペタンと両膝をついてしまう。

「大丈夫か？」

その声に顔を上げると力が抜けて立てない私を心配した表情で見  
下ろすさっきの女の人。

「ほら、立てるか？」

そう言って差し出された右手を一瞬躊躇った後掴むと、ふわりと手  
を引かれ立たされる。

「うーん、摺ったりした所はなさそうだな。良かった、けがしてなく  
て。」

私の周りをぐるりと回って私にけががない事を確かめると、その女の人は安心した表情で笑顔を浮かべる。

「じゃあ私はこれで。」

そして颯爽と去っていくその人の後ろ姿はまるで物語に出てくる王子様みたいにカッコ良くて、私はいつまでもその後ろ姿を見つめていた。

そしてしばらくした後、女の人にお礼を言う事と名前を聞く事、そしてバイトの始業時間が迫っていた事に気付いて、慌ててバイト先のクレープ屋に走って行ったのだった。

——第19話 にゆうがく6——

そんな運命的な出会いを果たした2日後のお昼休み。

「パン作り？」

「うん、バイト先に実家がベーカリーの子がいて今度の土曜日にその子指導の元、パンを作る事になったんだ。だからシャロもどう？」

学校初日の朝の一件のおかげか、席が前後という事もあってよく一緒にいて、互いにタメ口で下の名前で呼び合い、お昼も一緒に食べる位仲良くなったトウカからパン作りに誘われた。

「……。」

「どうしたの？ ……もしかして何か予定、あつた？」

答えずにいるとトウカは切ない表情で聞いてくる。

その表情が女の子以上に女の子らしくて、（本当にトウカって男の子なの？）と、つい出そうになった言葉を首を横に振って消してから、「予定はないんだけど、行っても良いの？ 私、パン作った事ないから



上手く作れるか不安で。それに初めて会う人もいるし……。」  
代わりにトウカに今の自分の不安を正直に応えた。

誘ってくれたのはとても嬉しい。

でもその反面、私の中には不安もある。

初めて会う人達と一緒に、初めてするパン作りがちゃんと出来るか、という不安が。

そんな私の不安を聞いたトウカは微笑んでゆっくり「大丈夫」と答える。

「実は僕もパン作りは始めてだからちよつと不安なんだ。上手く作れる自信ないし……。」

でもそれは他のみんなも同じで、例え上手く出来なくてもそれを悪く言う人は僕のラビットハウス先にはいないよ。

それにパンの作り方を教えてくれる子、ココアちゃんって言うんだけど、ココアちゃんも友達連れて来るみたいで、その子とは僕も初めて会おうんだ。

だから、シヤロも気にせず来てみない？ きつと楽しいと思うよ。」

その言葉を聞いて、さつきまでであった不安な気持ち少し晴れるのを感じた私は「じゃあ、行ってみようかな」と、頷いた。

――

そして更に日が進み土曜日になった。

今日はいよいよパン作りの日。

トウカに連れられて喫茶店、ラビットハウスに行くと、水色の長い髪の色のエプロンを着た女の子がそこにいた。

「おかえりなさい、トウカさん。えっと、そちらの方が、」

「うん、紹介するよ。こちら僕のクラスメイトの桐間 紗路さん。席

が前後で仲良くなったんだ。

シャロ、この子はこの喫茶店、ラビットハウスのオーナーのお孫さんで、僕のバイトの先輩でもある香風 智乃ちゃん。

まだ中学生だけど凄くしつかりした子なんだ。」

女の子の私を見る視線に気付いてトウカは互いの事を紹介してくれた。

女の子、チノちゃんの頭を撫でながら……。

「はじめましてチノちゃん、今日は一緒に頑張ろうね。」

「は、はい／＼ 頑張りますよう、シャロさん。」

あえて撫でられている事には触れずに挨拶するとチノちゃんは少し顔を赤くしながらも挨拶を返してくれた。

以前トウカからまだ中学生だけど年齢より落ち着いている子がバイト先にいる事を聞いていた。

きつとチノちゃんの事なのだろう。

けど初めて会う人の前で頭を撫でられて恥ずかしくて顔を赤くしてるのに、その手を払わずに撫でられたまま少し嬉しそうな表情を見せるチノちゃんは、年相応の女の子にしか私には見えなかった。

ガチャ

そんなチノちゃんをほほえましく思っただけで見てみると、私の視線の先、正確にはお店のカウンター横のドアが開き、中から一人の女の子が現れる。

「！」

その人を見た瞬間、私は自分の心臓が飛び出るのではないかと思う位大きくはねるのを感じた。

……だってそこにいたのは数日前に颯爽と現れてヒーローみたいに私を助けてくれた女の子だから。

「ん？」

「!!」

見つめていたせいで私の視線に気付いたのか、女の人が私の方に顔を向けたので目が合ってしまった。

その瞬間、急激に体温が上がり、カーと頬が熱くなるのを感じる。……鏡を見なくても分かる。きっと私の顔は真っ赤なのだろう。

この1週間、私はこの人の事を忘れた日はなかった。

学校の休憩時間や登下校の時に再び会えないか探した日もあった。会って一言お礼を言うために……。

でも名前も学年も知らない相手を短い休憩時間や、学校やバイトの時間を気にしながらの登下校では十分に探す事は出来ず、あの1回以降再び見つける事は出来なかった。

そんな相手が今、目の前に立っている。

きっと彼女は私の事なんて覚えていないだろうけど。

「こ、この前は助けていただきありがとうございます！」

それでも言いたかった一言を私は頭を下げるのと同時に言う。

きつと頭を上げた先には女の人の戸惑った表情があるのだろう。

この人からしてみれば、身に覚えのない事だから。

「気にしなくて良いよ、私は特に何もしてないから。」

それより学校初日に大変だったな。あの後大丈夫だったか？」

「へ？」

……そう思っていたから、返された言葉の意味が一瞬何の事か分からなかった。

だけど、「学校初日の」という言葉を聞いて少しずつだけ理解出来た。

この人は私の事を覚えててくれていたという事に。

「あれっ リゼとシャロって知り合いだったの？」

そんな私達の様子を見てトウカが尋ねてくる。

「ああ。入学式の日には学校が終わって、ここに来る途中で出会ったんだよ。」

「あ、だからあの日来るのが遅かったんだね。」

親しそうに女の人と会話をしているトウカ。

その姿を見て、何故かちくりと胸が痛んだ。

その胸の痛みはその後女の人とも互いに自己紹介をして、彼女が天々座 理世さんというお名前前で、私やトウカの1個上の先輩だという事を知るまで続いたのだった。

自己紹介を終えた後、少ししてから私はある事に気付いて周りを見渡す。

けど、お店のホールのどこにも今日パンの作り方を教えてくれるココアって子と、トウカの幼馴染のユキって子、それにその2人の友達の姿はなかった。

「ねえ、トウカ」

「ん？ シャロどうしたの？」

「ココアって子とユキって子とその2人の友達の子は？」

「ああ。2人は今、その友達を迎えに行っている所なんだ。だからもうすぐ、」

カランカラン

「みんな、遅れてゴメンね。」

「おまたせく。」

トウカが言い終わる前にお店のドアが開き、2人の少女がやって来た。

多分2人がココアとユキなのだろう。

……どっちがどっちだかまだ分からないけど。

「えっ！」

でも私の視線はすぐに2人ではなく、その後ろから来た女の子に向く。

「紹介するね、私達のクラスメイトの千夜ちゃんだよ。」

「宇治松 千夜よ。今日はよろしくね。」

だってそこに立っていたのは私の幼馴染だったから。

にゆうがく7

トウカ side

「それにしても千夜ちゃんがトウカ君のクラスメイトであるシャロちゃんと幼馴染だったなんてね。」

「そうなの。まさか会えるとは思ってなくてビックリしたわ。」

全員揃って互いに自己紹介をした僕らはパン作りの舞台である厨房へ向かっていた。

その間の話題はやはり、ユキとココアちゃんのクラスメイトであり友達の千夜さんがシャロと幼馴染だと言う話を中心だった。

「あらそちらのワンちゃん……、」

そして厨房に到着してすぐ、千夜さんが厨房のテーブルの上にあるパンの材料や道具などの隣にいたティッピーに気付く。

「ワンちゃんじゃないです。」

チノちゃんがツツコミを入れる。

「そうだよ！ この子はただの毛玉じゃないんだよ」

ココアちゃんが便乗する。

「まあ毛玉ちゃん？」

「もふもふ具合が格別なの！ 2人とも触ってみて」

そしてユキに促されシャロと千夜さんはティッピーに手を伸ばす。

「ホントにもふもふねえ」

「はあ、この手触り癒されるう」

2人の顔は気持ち良さそうで、撫でられてるティッピーも気持ち良さそうな顔をしている。

そんな2人、正確にはシャロに向かってリゼは、

「シャロ大丈夫なのか？ テイツピーって『アンゴラうさぎ』って品種のウサギだぞ」

という言葉が発した。

「きゃあー！」

その瞬間、悲鳴と共に僕は身体に軽い衝撃とちよつとした拘束感を感じて視線を少し下げると、シャロが僕に抱きついていてた。

「シャロ、どうしたの!？」

「あらあら。実はシャロちゃん、昔うさぎに噛まれて以来うさぎが苦手なのよ。」

僕に抱きつくシャロを見て、彼女の幼馴染の千夜さんが説明してくれた。

……気のせいかな、少しイタズラっ子な表情を浮かべて。

「あつ、そうなんだ。」

それならシャロ、大丈夫だよ。ティツピーは大人しいウサギだから噛んだりしないから。」

抱きついたシャロを落ち着かせる為に彼女の頭を右手でポンポンしながら諭す。

「うう……、ホント?？」

顔を上げるシャロ。その声は震えていて、目尻には光る雫が。

「うん。それは僕が保証するよ」

ティツピーの中に、既に亡くなったチノちゃんのお爺さんがいるのを知っているので僕は自信を持ってそう答える。

シャロの恐怖心を少しでも減らせるように笑顔で少しゆっくりとした口調を意識して。

それが功を奏したのか、シャロは安心した表情をして「良かった」と、呟いた。

「……！」

だけどすぐにシャロの動きがピタリと止まり、みるみる顔が赤く  
なっていく。

(? どうしたんだらう?)

「あつ、ゴメンなさい、えつとわざとじゃなくて、その……／＼／＼」  
そんな事を思っているとパツと僕から離れ、赤い顔で謝ってくる  
シャロ。  
その声はとても慌てていた。

「? えつと、気にしなくていいよ。それよりこっちこそゴメンね。  
シャロ、ウサギ嫌いなのに先に注意出来なくて。」

「えつ! えつと あ、……うん。」

シャロがウサギが苦手だということを知らなかったとはいえ、ティツ  
ピーがウサギだというのを先に伝えておくべきだったと思い放った  
言葉。

フオローのつもりで言ったつもりだったけど、その言葉を聞いた  
シャロの顔は少し寂しそうになる。

(……何か間違えた、かな?)

たぶんそうだろう。  
だって、さつきより僕とシャロの間を流れる空気が少し重くなった  
気がするから。

(……あれ?)

でもよく見ると、その重い空気は僕とシャロの間から発生したもの  
でなかった。

気配を辿るように振り向いた先には、こちらを微笑ましいものを見



る瞳で見る千夜さんと状況に着いて来れていないココアちゃんとチノちゃんの間にムス重いつ空気として不機嫌発生源な表情であるをしたユキトリゼがいた。

(……えっと千夜さん、何でそんな微笑ましいものを見る瞳でこっちを見てるの?)

そしてユキトリゼ、何でそんな不機嫌な顔してるの!?)

何故か不機嫌になってしまったユキトリゼ。

そんな2人の機嫌を治すのにしばらくかかりました。

——第20話 にゆうがく7——

「それじゃあそろそろパン作り始めたいからみんな、各自パンに入りたい材料提出して!」

ユキトリゼの機嫌が治った所で漸く始まったパン作り。

まずは 1人1人が持ち寄った材料を机の上に出すところから始まった。

まず先陣を切ったのは、

「私は新規開拓に、焼きそばパンならぬ焼うどんパン作るよ!」

厨房のテーブルの短辺に1人いるココアちゃんが取り出したのはうどん。

炭水化物 on 炭水化物に新たなページを刻むらしいです。

「私は自家製の小豆と梅と海苔を持って来たわ。」

続いて材料を取り出したのはココアちゃんの右側のテーブルの辺にいる千夜さん。

小豆は自家製らしいけど、彼女の家は何かお店をやっているのかな?

「冷蔵庫にいくらと鮭と納豆とゴマ昆布がありました。」

3番手はココアちゃんの向かい側、千夜さんからは右側のテーブルの辺にいるチノちゃん。

……その材料ってタカヒロさんが夕食に使うんじゃないの？  
使って大丈夫？

そう思いながらチノちゃんの右側にいる4番手の僕が取り出したのはトマトの水煮と小さめに切ったソーセージやピーマン等の具材にチーズ。

これらでピザ風パンを作ろうと思ってます。

それにしても……、

(これってパン作りなのかな?)

今までに出てきた材料を見回して思わずそう思ってしまった。

ココアちゃんはまだ良いとして、千夜さんもチノちゃんもいったい何を作るつもりなのだろう。明らかにパンの材料でないのが混じってるんだけど……。

まあピザ風パンを作ろうとしてる僕も人の事、言えないけど。

どうやらチノちゃんの隣にいる5番手のリゼも僕と同じことを思っていたらしく、イチゴジャムとマーマレードをそれぞれの手に持って「これってパン作りだよな……。」と僕と同じ事を心配そうに呟いていた。

そんなリゼの心配が実を結んだのか、その後は千夜さんの隣にいるシヤロがバターと砂糖、そして僕の隣にいるユキがピーナツクリームと比較的無難なものを出していた。

因みに今回ココアちゃんが仕切っているのは、久しぶりのパン作りで歴戦の戦士の如く燃えている（リゼ談）ココアちゃんに軍人モードになったリゼが仕切り役を任せたから。

その任命式（？）の光景は両者敬礼するリゼとココアちゃん、何故か仲間に加わろうとする千夜さん、そんな3人を見て「暑苦しい」と呟くチノちゃん、そして初めて見るリゼの軍人モードに驚くシヤロと苦笑いするユキと僕といった少しカオスなものだった。

因みに「軍人モード」とは、軍関係の話題になった時にまるで軍人みたいになってしまいうりぜの事で、きつと理座リゼのお父さんさんの影響だと思う。

「じゃあパン作り、始めるよ！

まずはボウルに強力粉を入れて、」

全員がパンに入れる材料を出して、1人に1式ずつボウルやめん棒、まな板等の道具が行き渡った所で、さつそくココアちゃんがボウルに強力粉を入れ始める。

ココアちゃんが今作っているのはパン生地で、本当なら僕らも彼女の説明を聞きながら一緒に作っていかなきゃいけないけど、生地は入れる材料の割合によって千差万別に出来上がりに差が出てしまい、ココアちゃん以外の僕ら6人がパン作り初挑戦で丁度良い割合にするのは難しいだろうという事もあって、今回は生地を作るのはココアちゃんに任せて僕らは生地をこねる所からの参加だ。

「次にドライイーストも入れるよ。」

「ドライイーストってパンをふつくらさせるんですよね？」

ボウルの中に強力粉を入れ終わって次に取り出したドライイーストを見てチノちゃんがつぶやく。

「そうそう、よく知ってるね、乾燥した酵母菌なんだよ。」

ココアちゃんがチノちゃんをほめながら説明する。

「こうぼ、きん。……っ!!」

「そ、そんな危険なものを入れる位なら、パサパサパンで我慢します!」

「どゆこと!?!」

「……おそろく違う字を連想したのね。」

急に震えだすチノちゃん。それを見て驚く僕の横でシャロが冷静に指摘する。

それは正しかったみたいで、酵母菌の説明がてらその連想したものを聞いてみるとチノちゃんは丸い体に2本足の生えた“功歩菌”なるものがドライイーストの中にうじゃうじゃいるのを想像したのだと説明してくれた。

（攻撃する歩く菌で“功歩菌”か。本当にいたら確かに危なそうだし、そんなの入れられるよりかはパサパサパンの方が良いかな。）

そんな僕らの横でココアちゃんはボウルに水を入れて先に入れた材料となじませ、ある程度生地が固まったところでそれをボウルから取り出し7等分にして僕らに配る。

ついに生地をこねる段階までやってきたようだ。

僕らは受け取ったパンをそれぞれがめん棒でこねていく。

でも初めて経験するパンの生地をこねる作業は思った以上に力のかけ方が難しく、みんなどこか動きがぎこちない。

その点やはり経験者であるココアちゃんは手つきが僕らより様になっっていて手際も良い。

ココアちゃん以外がパン生地に悪戦苦闘すること30分、

「ぱ、パンをこねるのがつてすごく体力がいるんですね。」

「う、うでが……、もう動かない……。」

「うう、つかれたよ……。」

チノちゃんと千夜さんとユキが体力の限界が近づいてきた。口に

は出してないけどシャロも疲れた表情を見せ始めている。

残りのメンバーはココアちゃんは余裕な表情だし、リゼも顔にうっすらと汗が出ているけどまだまだ大丈夫そう。

かという僕も少し腕にだるさを感じるけどまだまだ余裕だ。

「千夜ちゃん大丈夫？ 手伝おうか？」

千夜さんのしんどそうな表情を見て、ココアちゃんが交代を申し出る。

「大丈夫よ、ココアちゃん。」

対する千夜さんはココアちゃんの申し出を断って、額の汗をぬぐって気合を入れなおす。

だけどその手に握られためん棒が彼女の手から離れた。

「えっ？」

キョトンとした顔で千夜さんは後ろを振り返る。

そこにはめん棒を取り上げたシャロがあきれた表情を浮かべていた。

「まったく。あんた体力ないんだから無理しないの。」

シャロはそのめん棒で千夜さんのパン生地を伸ばしていく。

少しそっけない言い方だけどその行動は幼馴染を気遣っているのが見て取れた。

「シャロちゃん……。ありがとう」

だから、シャロに礼を言った千夜さんも嬉しそうで、シャロを見つめるその瞳は優しい色を灯していた。

## にゆうがく8

厨房の机の上に腕枕をしてスヤスヤと寝息を立てる幼馴染のユキ。さつきまで一生懸命パン生地をこねて疲れて寝ちやった幼馴染を起こさないようにその身体にそっと毛布をかけると、穏やかな寝顔がより強くなったような気がした。

……それにしても、

「みんなぐつつすり寝ちやってますね。」

ユキの頭を撫でながら僕は後ろにいつもより小さい声で声をかけると、後ろから「ああ、そうだね。」と優しい声色を含んだダンディーな声が帰って来る。

振り向くとチノちゃんに毛布をかけたタカヒロさんが彼女を撫でていた。

ココアちゃん指導のパン作りは今、パン生地を数時間寝かせ、生地中部にある攻歩菌……ではなく酵母菌を発酵させる段階まで来ているんだけど、さつきまでパン生地をこねていてやっぱり多少なりとも疲れたのか、それとも春の陽気にあてられたからなのか、僕以外の6人はみんな眠ってしまった。

パン生地を一生懸命こねていたからみんな多少なりとも汗をかいてるはずで、最近暖かい日が続いているとは言ってもさすがにまだ何もかけずに寝るのは肌寒い。

身体を冷やすと体調を崩す恐れだつてある。

だから香風家の居住部にいたタカヒロから毛布を借りてそれをタカヒロさんと一緒にみんなにかけていったのだ。

「そういえばタカヒロさん、どうして先程冷蔵庫の前で固まったんですか？」

さつき毛布を借りる時にタカヒロさんは僕を気遣って冷蔵庫から

ジューズを取り出してご馳走してくれたんだけど、その途中、冷蔵庫を開けた際に数秒ほど固まってしまったのだ。

あまり聞くべきではないと分かっているけど聞いてみた僕の質問。

その質問にタカヒロさんは「今日の晩にと用意しておいた食材が消えていた。」と苦笑いで教えてくれた。

その犯人は今もタカヒロさんに頭を撫でられてあどけない寝顔を浮かべていて、そんな彼女をタカヒロさんは優しい笑みで見つめていた。

「さてまだ時間もあるし、店の方に行つてのんびりしようか。」

タイムマーの時間を確認して立ち上がったタカヒロさん。

その彼の提案に僕は「はい。」と答えて2人で厨房から出る。

タカヒロさんがカウンターに立つと僕は向かいの席に座り、ほどなくしてタカヒロさんが淹れた2人分のコーヒーが僕らの前に置かれる。

そのコーヒーを飲みながら話した内容は主に僕の両親の事だった。

父さんと母さんが昔ここで働いていた当時の事をタカヒロさんから聞いて、僕も今の2人の事を話した。

色んな事を聞いたし、色んな事を語った。

……本当に色んな事を。

——第21話 にゆうがく8——

ユキside

ピ。ピッ、ピ。ピッ

(……?)

まどろみの意識の中、聞こえて来たのはいつもと違う目覚ましの音。

その音の違いに疑問を感じ、閉じていた目を開けると目の前の机の

上には音を出しながら軽く振動している台の上に乗ったウサギの置物が視界に入った。

「……………」

(あれ、こんな置物私、持ってたっけ?)

腕を伸ばしてその置物を手取る。

近くで見てもやっぱり見覚えのないそれは台の部分に目盛りが付いていて、よく見るとキッチンタイマーだというのが分かった。

(なんでこんなものがあるんだろう。)

…………あれ? そういえばここ、トー君のお部屋じゃない…………)

周り見渡すと、この街木組みの街に来てから私がいつも寝起きしてるリゼちゃん家のトー君の部屋…………ではなくどこかで見た事のある厨房。

…………すぐにそこがラビットハウスの厨房だという事に気付いて、周りで毛布をかけて寝ちゃってるリゼちゃん達と机の真ん中にラップで蓋をしたボウルを見つけて、今日ここでみんなと一緒にココアちゃんからパンの作り方を習っている事を思い出した。

「目がさめた?」

そしてそれを同時に不意に後ろから優しい声がかけられる。

声のした方向に顔を向けると、すぐそばの流し台に寄りかかって私に優しい笑顔を向けたトー君がコーヒーカップを手にとって立っていた。

「おはよう、トー君。」

そんなトー君に寝起きでまだ少しボーっとしながらも私は挨拶を返すと、

「おはよう、ユキ。」

とトー君も笑顔で挨拶を返してくれた。

「……………」

でも気のせいかなその表情に少し寂しさが浮かんでいた様な気がし



た。

トウカ side

「トウカ君、ずつと起きてたの?」

目が覚めたみんなに寝起きに良いシュガー入りのホットミルクを渡してみんなでホーツと一息ついていると、一番遅くに起きたココアちゃんからそんな質問が。

その質問に「いや、タカヒロさんとお喋りしてたよ。」と答えると何故かユキが僕の顔をじーと見つめていた。

「! さ、さて、パン生地どうなったかな。」

「?」

視線に気付いてユキの方を見ると、慌てて視線をそらしたユキが立ち上がって机の中心に置いてあるボウルの中を覗いた。

(……?)

そんないつもと違うユキの様子に疑問を覚えていると、ユキにつられてボウルの中を見たみんなから「「「お、お〜!」「」」と歓声が上がる。

何だろうと思つて僕もボウルの中を覗くと1時間前よりも1回りも2回りも大きくなったパン生地がボウルのそこに鎮座していてラップを取つて触つてみると、ふつくらとした手触りが指から伝わつて来た。

その大きくなった生地をココアちゃんが7等分にしてみんなに配つて、みんなそれぞれ思い思いに形を作っていく。

楕円形にしてるココアちゃん、生地に丸や星の型枠を次々押ししているユキ、そして人の顔の形を作ってるチノちゃん。

「……。」

他のみんなも色々な形を作っていて、そんな個性豊かな形の生地を鉄板の上に乗せて、それをオーブンの中へ入れていくのだけど、その

間にココアちゃんはりぜに小声で何かを話をし、2人して厨房から出ていった。

「ねーね、チノちゃん、チノちゃんはどんな形にしたの？」

2人を視界の端に捉えながら聞こえてきた会話に視線を向けるとオーブンの前でユキがチノちゃんに作ったパンの形を聞いている所だった。

「おじいちゃんです。小さい頃から遊んでもらっていたので。」

「へー、チノちゃん、おじいちゃんっ子だったんだね。」

「はい、コーヒーを淹れる姿はとても尊敬してました。」

視線をチノちゃんの頭の上に移動させると、案の定ティツピーが顔を赤くして照れていた。

僕と目が合うと慌てて何でもないように取り繕うとするけど、  
おじいさん  
ティツピー、赤いほっぺが隠し切れてないですよ。

まあ面白いから言わないけど。

「チノちゃん、オーブンの設定出来た？」

「はい。」

……それではこれからおじいちゃんを、

焼きます。」

「ふえっ!?」「チノちゃん、それ誤解産む!」「ノ〜ノ〜!」

まるでお爺さんを火葬するような事を言うチノちゃんに思わずツツコみを入れる僕の隣でユキもチノちゃんの言葉に驚いていた。

後おじいさん、出てる! 声、出てる!!

みんなにバレるよ!

「千夜ちゃんシャロちゃん、ちよつと良い?」

そんな僕の心配は丁度タイミング良く戻ってきたリゼとココアちゃんによって杞憂に終わった。

そういえば2人ともどこかに行ってたんだらう?

何故か2人とも両手を後ろに隠してるし。

「どうしたの? ココアちゃん。」「ん?」

だから千夜さんもシャロも頭に?を浮かべていた。

「じゃじゃくん。2人におもてなしのラテアートだよ」

「さつきこつそり作ってきたんだ。」

その2人の前でココアちゃんとリゼちゃんは隠していた手を前に出す。

その手に持っていたカップにはコーヒーが入っていて、そこにミルクによってそれぞれウサギと戦車の絵が描かれていた。

「わあ、かわいい♪」

「す、すごいです。」

ちよつといびつなウサギのを見て驚きながらも嬉しそうにする千夜さんと戦車のリアルな絵に戸惑いながらも目を輝かせているシャロ。

さつきココアちゃんがリゼに内緒で何かを話していたのはこの事だったんだ。と理解していると、千夜さんが「でも」と呟く。

「私は嬉しいけど、シャロちゃんはちよつとコーヒーは……。」

言いにくそうにそう呟く千夜さんはシャロを心配そうに見つめる。

「も、もしかしてシャロ、コーヒー苦手だった……のか?」

それを聞いたリゼがシュンした顔をする。

いつもはキリつとしたリゼだからその表情は珍しく、そんな普段と異なるリゼの顔を見たシャロは、

「い、いえ、大丈夫です！ いただきます！」

何故か顔を赤くして掛け声と共にカップを一気に傾けた。

隣の千夜ちゃんが「あっ」と言う間に。

「……。」

コーヒーを飲みきったシャロはカップを静かにテーブルに置く。

その顔は俯いたままで僕の位置からはシャロの表情を見る事が出来ない。

「じゃ、シャロ……？」

動かない彼女に声をかける。

するとゆつくりとシャロは顔を上げた。

「ふわあく、りぜしえん<sup>せ</sup>ばいのコーヒー、おいしいです。」

赤い顔で舌つ足らずな喋り方で……。

「」「へっ？」「」

「トローカー！」

いつもと違うシャロと千夜さん以外の僕らは素っ頓狂な声をあげると、シャロが文字通り飛びついてきた。

「おっと。」

「ふにやく。」

まるでユキや姉さんのように飛びついてきたシャロを受け止めて、つい2人にするように頭を撫でるとシャロは気持ち良さそうな声をあげる。

「千夜ちゃんどういう事？ シャロちゃんどうしちゃったの？」

「実はシャロちゃん、カフェインを取り過ぎると異常にテンションが上がっちゃう体質なの。」

まるで猫みたいにごろごろとノドを鳴らすシャロ。

そんなシャロを見たココアちゃんが千夜さんに質問する。

「……つまりカフェイン酔いつて事か？」

「ええ、そうなの。しかもその時の状態も本人は覚えてないみたいで。」

「そんなのあり得るんですか？」

「チノちゃん、今のシャロちゃんを見てもそんな事言える？」

「い、今のシャロさんの状況ですか？」

みんなの視線がシャロに向く。

今のシャロの状態は、

①陽気になる↓普段の彼女では考えられない位にすごく陽気です。

②皮膚が赤くなる↓真っ赤です。頬なんて特に。

③判断力が低下する↓僕異性に抱き着いている時点でお察しを。

「あ、スリーアウト。」

これ完全に酔爽つて快る人の症状だ。」

僕が呟いたその言葉と共にオーブンがパンの焼けたのを知らせる音がラビットハウスのホールに虚しく響いた。

おもいでー

トウカside

バターを加えて混ぜ合せた生地を耐熱皿に乗せた円形の型の中に流し込む。

ヘラも使ってボウル内に残った生地も全て型に入れたら、使い慣れて来たオーブンの中へ耐熱皿ごと入れて、タイマーで焼く時間をセツトしてスタートボタンを押す。

庫内で回り始めたそれを確認した僕は、振り向いた先にある時計で今の時間を確認した。

「ふう、なんとか時間までに終わった。」

事前に予想していた通りの時間に終わってホッと一息ついた僕は、テーブルや流し台を軽く片付けて厨房を後にした。

シャロside

ピッピピ、ピッピピ、ピッピピ、ピッ

朝、いつも通り規則的な音で鳴り始めた目覚まし時計を止め、のそりと立ち上がった私は眠い目を擦りながらいつも通りに部屋のカーテンを開け……ようとしたけど、掴んだそのカーテンの柄が昨日までと違う事に気付く。

「……？ 千夜がまた勝手に変えたのかしら。」

でもそれは幼馴染の仕業だと思って、特に気にすることもなく再び掴んだカーテンを開けた。

「……えっ？」

それと同時に私の口からそんな音が漏れた。

だって目の前の、窓の向こう側には私が見た事もない、まるで金持ちの家の庭みたいな景色が広がっていて、振り返って見た部屋の中はうすい紫を基調とした見覚えのない部屋。

「……、ど……？」

目を覚ますと、私は知らない部屋にいた。

「とりあえず外に出てみよう。」

突然の事で最初は慌てたけど、次第に落ち着いてきた私は、状況把握の為に部屋から出る事にした。

部屋にあるドアノブを回して廊下に出る。

ターン！

「っ!？」

その瞬間、遠くの方で何かが炸裂するような音が聞こえて思わず身体がビクリとなる。

「今の、音って……。」

聞こえた音は聞き覚えがある音。

とは言っても、それを耳にするのは刑事ドラマみたいなフィクションの世界の中だけで、普通に日常生活を送る上ではまず聞くはずのない音。

銃声だった。

「っ！」

音のした方に走り出す。

この先に何かがあるのか分からない。もしかしたら危険があつて逃げた方が良かったのかもしれない。

そんな事、頭ではわかつていたけど、何故か私は音のした方向かって足を動かしていた。

暫く走っていると、ある1つの建物に辿り着いて、私はその建物の扉を思いっきり開ける。

「！」

……中には腹這いの状態でライフルを構え、遠く離れた的に向かって狙いを定めているクラスメイトの姿があつた。

——第22話 おもいで1——

トウカside

厨房を後にした僕はある建物の中で1人の男性と向かい合つて立っていた。

僕らから離れた場所にはターゲットマーカーのついた幾つもの人型の模型<sup>的</sup>。

すぐ近くのテーブルには黒光りする銃。

僕は今、天々座家の射撃場にいる。



「さて、トウカさん。今日は射撃訓練を行いましょう。」  
「はいっ！」

目の前の赤紫色の髪の長身の男性、リゼのお父さん理座さんの秘書をしている佐倉さくら茂智しげのりさんの言葉に僕は大きく返事を返して点検の為にテーブルの上にある銃を分解し始める。

お寝坊さんのユキは知らないけど、僕はこの家に来た1週間目から毎日彼から射撃や格闘術、他にも幾つか色んな事を教わっていた。

その日に何を習うかは佐倉さん次第。  
だけどその頻度は僕の習得に応じてある程度比例している。

例えばこの街に来てから教わり始めた射撃は、僕自身の習得率が低いため訓練する頻度は多い。

2日に1回……とまではいかないけど、それに近い頻度で教えてもらっている。

逆に格闘術、特に護身術については、中1の頃から家に道場がある音緒君おとせに自衛の為に習っていて、男子から告白された時とか、部活で遅くなった日に近道のために入った路地裏とかでたまに不本意ながらも使う機会があった。

そのせいで、おかげ振られて逆上した相手を鎮めたり、僕を女の子と勘違いして襲ってくる変質者を“無力化”させられる位の技術は身に付いていたから、射撃と比べるとあまり訓練する頻度は多くない。

ん？ // 無力化って何をするのか。 “だ”って？

そんなのもちろん、靴底のかかと部分に体重を乗つけて思いつきり相手のとある箇所を潰してから警察に通報する簡単なお仕事だよ♪

……後ろで佐倉さんが「トウカさん、なんか黒いオーラ出てますよ。」って呟いてるけど気のせいです。

気のせいだったら気のせいです。

そんなこんなの中に点検の為に一度バラした銃を組み立てた僕は、  
腹這いの状態  
伏射体制で銃を構える。

狙いは離れた所に立ててある人型の模<sup>的</sup>型。

「スーツ、ハアーツ。」

その的に向かつて銃口を合わせた僕は、深呼吸した後にスコープで狙いを定めて静かにトリガーの引き金を引いた。

バーン

そんな銃声とは違う大きな音が射撃場に響いたのは、射撃を始めて10分した頃で、的の頭部に10連続で弾を当てた時の事だった。バっと顔を上げると開かれた扉と、その中心に立つ金色の髪の女の子が。

「お、おはようシャロ。よく眠れた？」

突然の事だったから戸惑いながらその女の子、シャロに挨拶する。するとシャロは僕の方に向かって歩いてきて、

「トウカ、ハンどこなの!？」

若干困惑交じりの戸惑った声で僕に疑問をぶつけてきた。

その質問にキョトンとして「ここはリゼの家だよ。」と正直に答える。

その数秒後にシャロの大きな声が射撃場に響き渡った。

――

シャルロside

「ゴメンね、まさかそんなに驚くなんて思ってたなくてさ。」

「う、うん。こっちこそゴメン／＼ 大きな声、出しちゃって。」

(うう、恥ずかしい／＼)

落ち着いた頃、さっき叫んでしまった事を思い出して恥ずかしさから赤くなる私。

叫んでしまったのは目が覚めたら憧れの人の家においてビックリしたから。

そんな私をフォローしながらトウカが説明してくれた。

トウカ曰く、昨日私は天々座先輩が淹れてくれたコーヒーを飲んで酔って眠ってしまったみたい。

それを聞いて私は「またか……」と呟く。

私はコーヒーを飲むと酔ってしまいう体質みたいで酔っている間はものすごくハイテンションになるらしい。

自覚がないのは酔っている間の記憶は目覚めた時、覚えてないからだ。

そんな酔って眠ってしまった私を天々座先輩が呼んだ車でこの家まで運んだらしい。

そしてそれを天々座先輩にお願いをしたのは千夜だった。

……まあ、なんとなくそうかと思っただけ。

大方、目覚めた私を驚かせる為にやったのだろう。

イタズラっ子な幼馴染のイタズラにいつも被害にあっているおか

げで、簡単にそう予想出来るのにその通りになってしまった自分がちよつと悔しい。

「トウカさん、この方が桐間さんですか？」

「っ！」

悔しがっていると突然すぐ後ろで男性の声が出た。

慌てて振り返ると、執事の格好をした赤紫色の髪の男性が優しげな笑みを浮かべ、私の後ろに立っていた。

「えっ、いつの間!?」

突然気配もなく現れたその男性にビックリする私。

そんな私にその男性は優しげな笑みを浮かべたままクルリと振り返って、この部屋の壁に向かって歩いていくと、

「かげ、うすい……」

どんよりとしたオーラを纏いしやがみ込んでしまった。

—————

「初めまして、桐間さん。私は親方様、リゼお嬢様のお父上の執事をしている佐倉さくら 茂智しげのりと申します。

僭越ながらトウカさんの射撃を教えてください。」

復活した男性、佐倉さんはそう言って私におじきをした後ニコリと微笑む。

その動きは洗練されていて、佐倉さんの整ってる顔と相まって彼の背後にキラキラとした眩しい光が見える。

きつとその笑顔にやられる女の子も多いだろう。

そんな人がまさかさつきまでシヨボーンと効果音が付く位に落ち込んで、歳下のトウカに散々フォローされていた。なんて言っても信じれる人は少ないと思う。

だからそんな様子を見てしまった私はどうしようもない気持ちになつた。

「そういえばトウカって射撃やってたのね。」

佐倉さんが仕事があるからと部屋を出て行った後、周りを見渡した私はそう呟く。

さつきは慌ててたから気付かなかつたけど、ここは射撃場だった。

「うん。射撃にもパルクールとかも習ってるよ。」

「パルクール?」

聞きなれない単語を聞き返すと、トウカは「あー」と呟いた後、ケータイを取り出して操作し、1つの動画を私に見せる。

そこには噴水を飛び越えたり、道路の端から端をバク転で横切ったり、家と家の屋根やビルとビルの間をまるで忍者みたいに駆け抜けている人達の映像が映っていた。

「すごい! トウカもこんな事出来るの!?!」

動画を見終わった私は興奮してトウカに聞く。

「まだ習い始めだから出来ないんだ。」

と苦笑いで答えるトウカ。

「けど、絶対に出来るようになる。」

だけどその後すぐにそう宣言した彼の瞳は強く輝いていた。

――

その後、銃を片付けたトウカに連れられて射撃場を出た私は、トウカから1つのお願いをされてある部屋に案内される。

「スー、スー」

そこは天々座先輩が眠っている部屋だった。

私はトウカから先輩を起こしてきて欲しいとお願いされたのだ。

「はわわわわ／＼／＼」

先輩の寝顔はいつもの凜とした雰囲気はなくて、あどけない表情だった。

そんないつもと違う先輩の寝顔に顔が暑くなる。

ずっと見ていたい気持ちもあるけど、その気持ちをなんとか堪えて、私は視線を先輩の隣に移動させる。

そこには先輩の隣、同じベットで眠るユキの姿があった。

おかしい。

なんで先輩とユキが一緒に寝ているの？

まさか2人は……。

「……／＼／＼」

一緒に布団で眠る。

そしてその先の事を想像してより赤みを増す私の頬。

そんな私の疑問は、心配を感じて起き出した先輩によって解決す

る。

なんでもここは、先輩の部屋でもなくユキの部屋でもなく、実はトウカの部屋だったという事。

そして2人は毎晩おしゃべりをする為にこの部屋に遊びに来るらしい。

大抵はユキが1番最初に寝てしまい先輩とトウカが残るのだけど、先輩が最後まで起きている事はまだなく、それを聞いて私はトウカの睡眠時間が心配になった。

だって今日私が目を覚ました時間ですら結構早かったのに、その時点で既にトウカは目覚めて射撃練習をしていたから。

しかもトウカは私が見た限りで学校で眠る事はない。

一体トウカって睡眠時間大丈夫なのだろうか？

――

「そんな事があったのね」

先輩の家で朝食をご馳走になって家に戻った私はその足で幼馴染が働くお店に向かい、今日の事を話した。

いろんな事があり過ぎてパンクしそうだったけど、千夜に話したら少し気持ちが落ち着けた。

そんな私に千夜は微笑んで「実はこの後、またラビットハウスに遊びに行くからシャロちゃんも一緒に行きましょう」と言ってくる。

この時はまだ知らなかった。

まさか、千夜に連れられて行ったラビットハウスであんな事が起こるなんて……。

## おもいで2

シヤロが帰った数時間後、僕はラビットハウスにいた。  
今日は朝からラビットハウスでアルバイトだからだ。

ここでのバイトはたまに大変な時もあるけど、バイト自体は面白いし、最近は何事か貰う仕事が増えて、お店に貢献出来てるって気がして楽しいです。

今日はまだリゼとユキは来ておらず、ココアちゃんは2階の彼女の部屋でティッピーを枕代わりにして寝ているらしい。

なので珍しく僕とチノちゃんの2人で店をまわしている。

カランカラーン

お客さんのいない店内に來客を告げるベルが鳴り、仕事の手を止め振り向くと、僕より少し年上の若い女性が入って来るのが見えた。

「いらっしやいませ。更衣様（かいつくさま）、本日もお越し頂きありがとうございます。」

「こんにちはトウカさん。いつものサンドイッチお願いね。」

「はい、かしこまりました。」

今、來店して来たのは更衣さん。

ラビットハウスの常連さんで女性用の服屋で働いている女の人だ。

（更衣さんの「いつもの」はキリマンジャロ。）

カウンターに向かう途中で彼女がいつも注文するコーヒーを思い浮かべる。

最近、常連さんにも顔を覚えられ、常連さんがいつも頼むメニューも分かるようになってきた。

これも成長の証かな？



「チノちゃん、キリマンジャロを一つお願いね。」

「分かりました。」

そんな事を考えながら、カウンターに立つチノちゃんにコーヒーを頼んで、僕は裏の厨房でサンドイッチを作り始める。

「トウカさん、コーヒー出来ました。」

サンドイッチをお皿に盛り付けた頃、タイミング良くチノちゃんがコーヒーを淹れるのに使った道具をお盆に乗せて持って来た。

「了解、こつちも丁度出来たよ。」

「ありがとうございます。」

チノちゃんを持つてきた道具を受け取って代わりにサンドイッチが盛り付けられたお皿をお盆に乗せると、彼女は礼を言って厨房から出て行った。

更衣さんの接客をチノちゃんに任せ、その間に僕とチノちゃんが使った器具や道具を洗っておく。

少ししてホールに戻るとチノちゃんが更衣さんの相手をしているのが見えた。

「ー」

「ー」

洗い終えたコーヒーの道具を棚に戻している間に2人、というより更衣さんの声がメインの会話が聞こえて来る。

けど2人が声を抑えて話している為か、何を言っているのかまでは聞こえない。

「ありがとうございます」

そうしている内にコーヒーとサンドイッチを食べ終えた更衣さんが会計を済ませ満足そうな表情でラビットハウスを後にするのでそ

れを2人で見送った。

「チノちゃん、更衣さんと何話してたの？」

更衣さんが帰った後、テーブルを拭きながら2人が話していた内容がちよっと気になったのでチノちゃんに聞くけど、「何でもないです」と答えを濁される。

(……個人的な事だったのかな?)

最近割とよくある事なので、特に気にする事なく僕はテーブルを拭いていく。

さつきチノちゃんと更衣さんの間でどんな会話があったかも知らずに……。

——第23話 おもいで2——

チノside

トウカさんはよく働いてくれます。

コーヒーを淹れるのはまだもう少しですが、それ以外の仕事である、お客さんの接客や、料理や清掃、買い出し等はばっちりです、特に料理の腕は私達の中で一番美味しいです。

それに前の街でコーヒーを淹れていたらしく、コーヒーの味の違いも分かっています。

そんなトウカさんですが、1つ困った事が。

それは、お客さんの殆どがトウカさんを“女性”だと思っている事です。

今、いらっしやっている更衣さんもその1人。

トウカさんが作ったサンドイッチと私の淹れたコーヒートをトレイに載せて、更衣さんのテーブルに運ぶと、更衣さんは

「前から気になっていたんですが」

と、前置きして、

「どうしてトウカさんは女の子なのに男性用の制服しか着ないの？」

と聞いて来ました。

トウカさんは男性なので男性用の制服を着ている事は何も間違っていないです。

しかしトウカさんが女の子みたいな顔立ちをしているせいで、彼を女性だと思っっているお客さんは違和感を感じてしまい、最近こんな質問をよくされます。

そういう時、対応に困ってしまいますが、私は「彼は男性です。」と、正直に答える事になっています。

そう言うとお客さんは驚いて、半分以上が信じてくれないのですが、

「えっそうだったの!?! ずっと女の子だと思ってた!」

更衣さんは信じてくれました。

「そっか、男の子だったんだ。……でも彼、女の子の服も似合いそうね。」

「!?!」

少しイタズラっ子な笑みを浮かべながら更衣さんが呟いたその言葉に過剰に反応してしまった私。

……何故なら、私も同じ気持ちだからです。

それを素直に更衣さんに話すと、更衣さんは「やっぱり、そうだったのね♪」と微笑んだ後、トウカさんに似合いそうな女性服を色々挙げていきます。

その中にはよく分からないものもありましたがどれも興味深いもので、こんなに色々アイディアが浮かんでくるのは何故かと聞くと、更衣さんは女性用の服屋で働いていて、前々から色々な服をトウカさんに着せたいと思っていたらしいです。

その気持ちはトウカさんが男性と分かった今も止まらず、寧ろ増加してしまつたようで、途中から洗い物を終えたトウカさんがホールにやって来たので、私はこの話の内容が彼に聞こえてないかどうか気が気ではありませんでした。

一通りトウカさんに似合う服を挙げ終わり、食事を済ませ満足した表情をした更衣さんはお店を後にしました。

会計の時にこっそり私に一枚の名刺を渡して……。

「チノちゃん、更衣さんと何話してたの？」

テーブルを拭きながら、トウカさんが聞いて来ました。

トウカさんの声の感じからすると、どうやら会話の内容は聞こえてなかったようでちよつと安心して、私はいつも通り「何でもありません」と答えて仕事に戻りました。

制服のポケットにさつき更衣さんから貰った名刺を大事にしまつて……。

トウカ s i d e

ゾクウツ

「!?」

テーブルを拭いてる途中、突然背中に寒気を感じて周りを見渡す。だけど、そこにあるのはいつも通りのラビットハウスの光景でどこもおかしい所なんてない。

「どうしたんですか？トウカさん。」

カウンターの向こうでコーヒーマシンの用意をしていたチノちゃんが尋ねてくる。

チノちゃんがいる方向はさつき僕が寒気を感じた方向と一緒に。

もしかして、チノちゃんが……？

そういえば心なしか彼女の瞳に光がないような……。

「……いや、まさか気のせいだよな。」

「？」

浮かんだ自分の考えをありえないと切り捨てる。

そんな僕を見て、チノちゃんは小首を傾げていた。

その後、少しした後にはリゼとココアちゃんがやって来たけど、その中にユキの姿はなかった。

なのでリゼに「ユキはどうしたの？」と聞くと「ああ、まだ寝てるよ。」と返ってきた。

相変わらずお寝坊さんの幼馴染に苦笑いした後、4人でお店をまわしていく。

特にハプニングも起こらず平穏にバイトしていたが、その平穏は突然何の前触れもなく放ったココアちゃんの一言がきっかけにより崩れ去った。

……でも今にしてみれば、それは遅いか早いかだけの問題で結局はこうなっていたのかもしれないと思う。

おもいで3

私とかずねえの間には、あるルールがあるの。

“トー君を女装させちゃいけない”ってルールが。

前に一度トー君を女装させた時に本当に女の子みたいになったトー君がとつても可愛いくて、ついやり過ぎちやった過去があるから。

だから自制の意味を込めて2人でそんなルールを作った。

『自分達が発端となってトー君を女装させないように』って。

……だから、今回ののは別にルール違反じゃないから大丈夫だよね♪

——第24話 おもいで3——

冬華 side

「うう……／＼／＼」

ラビットハウスのホール。

時間的要因もあって全くお客さんのいないその場所に今、羞恥で顔を赤らめ、両腕で自分の身体を隠すようにしてその場にしゃがみ込んでいる僕の姿があった。

「こ、これは、なんて言うか……／＼／＼」

「か、かわいい／＼／＼」

「似合い過ぎて全く違和感がありません／＼／＼」

僕の目の前には多分僕程ではないにせよ赤らめた顔をしたリゼと

ココアちゃんとチノちゃんの姿。

その3人からかわいいだの似合ってるだの言われるけど全然嬉しくない。

……だって、今僕が着ている服は、

ラビットハウスの女性用の制服だから……。

きっかけは何の前触れもなく放ったココアちゃんの一言だった。

『トウカ君って女の子の服、似合いそうだね。』

という一言。

そんな突拍子もない言葉に固まる店内。

すると『ボタン』とホールの扉が閉まる音と共に、さっきまでそこにいたチノちゃんが消え、少ししてパタパタという足音と共にホールにやって来た彼女が手に持っていたのは、みんなと色違いのラビットハウスの緑色の制服。

それは前にチノちゃんが僕の性別を知らなかった時に彼女から間違えて渡されたもの。

その時点で嫌な予感しかしない。  
そして、その嫌な予感は見事的中して、僕の元にやって来たチノちゃんは、『では、これを着てみてください！』と、少し興奮気味でその緑色の制服を渡してきた。

もちろん断った。

……断わったのだけど、それでも尚迫ってくるチノちゃんと言い出しっぺのココアちゃん。

その迫力に押された僕は助けを求める為にリゼの方に顔を向ける……が、

そこには赤い顔で何処からか取り出したロープを持ってジリジリと近付いてくるリゼの姿があった。

『着ないのなら私が無理矢理でも着替えさせるぞ！』

と迫ってくるリゼ。

その姿に恐怖を感じ、前から迫ってくるチノちゃんが周りに聞こえないように呟いた『そういえばこの前の〃出来ることがあったら言つてよ。〃』と言う約束ありましたよね？』と、ティツピーの正体を知った時に言った約束を呟いたのが決め手となり、僕はチノちゃんの持つ女性用の制服を手にとったのだった。

2階のいつも着替えている部屋で『どうしてこうなった……。』と自問自答しながら、合わせが逆な上着にもたついたり、スカートを履くのにかなりの抵抗があったりと、色々なものと戦いながら女性用の制服に着替えた僕は1階に降りる。



そしてホールに続く扉を開けた瞬間、僕を待ち構えていたのは、

3人によるかわいいや似合ってるという嬉しくない感想だった。

リゼ side

「こ、これは、なんて言うか……／＼／＼」

「か、かわいい／＼／＼」

「似合い過ぎて全く違和感がありません／＼／＼」

女性用の制服に着替えたが、恥ずかしさから顔を真っ赤にしてその場にしゃがみ込んだトウカの姿を見てそんな言葉を零す私達。

女性用の服を着ているトウカだが、トウカ自身が女の子みたいな立ちと身体付きの為、全くと言っていいほど違和感なく、どこからどう見てもラビットハウスの制服を着た女の子にしか見えなかった。

そんなトウカから私は視線を外し、横を向く。

そこにはトウカ程ではないにしろ、真っ赤な顔をしたチノとココアがトウカを見入っていた。

かと言う私の顔もきつと赤いのだろう。

さつきから顔が暑いのはその証拠だ。

私は視線を再びトウカに向ける。

緑色のラビットハウスの制服を着たトウカの、その赤くなった顔と涙で潤んだ瞳を見ると、

(なんだろう。こっ、ドキドキが止まらない……。)

男の子であるトウカに女の子の服を着せている背徳感からか。

それとも女の子の格好をしたトウカが女の子みたいに恥ずかしがっている姿がものすごく可愛いからなのか。

理由は知らないが、とにかく私の心臓は煩い位にバクバク鳴っていた。

「なあ、トウカ。1つ聞きたい事があるんだけど聞いていいか？」  
……だからきつとそう口走ってしまったのはこの煩い心臓のせい  
だろう。

「今、履いてる下着は男性用、女性用どっちなんだ？」

だって私の口から漏れたその言葉は普段の私なら絶対に言わない  
言葉だから。

トウカ side

「なあ、トウカ。1つ聞きたい事があるんだけど聞いていいか？」

「う、うん、な、何？」

不意にリゼが声をかけてくる。

その時点で嫌な予感はしていた。

だけど、突然だったせいで身体がビクリと跳ねながらも聞き返して  
しまった。

「今、履いてる下着は男性用、女性用どっちなんだ？」

「……………え？」

最初、彼女が何を言っているのか理解出来なかった。

というかしたくなかった。

だってその言葉は、この数日リゼと一緒に暮らしてきて感じた彼女

の印象とかけ離れていたから。

「えっ、ちよつと待って。リゼさんなんかキャラ違いますよね？ てか、なんで3人ともジリジリと迫ってくるんですか!? 何をしようと思ってるんですか!!?」

「大丈夫、ちよつと確かめるだけだから♪」

危機感から早口&敬語口調になった僕の質問にココアちゃんが笑顔で答える。

「いや、全然大丈夫じゃないですよ！ 何を確かめようとしてるんですか、つてなんでそこで3人とも顔を赤くするんですか!? てか、リゼさんそのロープほんと何処から出してるんですか!?!」

赤い顔で迫ってくる3人から逃げようと下がるけど、すぐ後ろが扉で既に逃げ場なんてない。

(もう、ダメだ!)

文字通りお縄につかれる。

そう思っただけか、入り口の扉が開き、

「みんな、おっはよう! ……ってあれ?」

救世主  
ユキが現れた。

「ユキ!」

ユキが来た事により出来た一瞬の隙を突いて、リゼ達の包囲網を突破してユキに抱きつく僕。

「ど、トー君!?!」

いつもはユキが僕に抱きつくけどその逆はほとんどないし、僕のこの格好も相まってユキはビックリしていたけど、瞬時に状況を理解し

て、

「もうみんな、トー君に何着せてるの！」

3人に向かって怒った。

「トー君に似合うのはもっとお淑やかな服だって！」

リゼ達が僕に女装させた件ではなく、僕に着せた服について……。

(……うん？ ユキさん、なにをいつているのかな？)

そう思いながら、(そういえば昔、ユキと姉さんにも女装させられて大変な目に遭ったなあ)と、思い出したくなくて封印した過去の記憶が蘇り、恐る恐るユキを見上げると、彼女と目が合った。

……ユキがニツコリと微笑む。

「トー君、前みたいにかわいくしてあげるね♪」

その笑顔のまま彼女が放ったその言葉は、僕に最後の希望が潰えた事を告げるには十分過ぎる言葉だった。

(ちよつとユキさーん！)

そんな心の叫びをあげながら、僕は後ろから迫って来たりリゼ達によつて2階にドナドナされて行くのだった。

――

(……よ、ようやく、おわった。)

バイト終了後、僕は更衣室として使っている部屋で今まで着ていた服を脱いできれいに畳んでいく。

着せ替え人形みたいに次々と女性用の服を着せられ、しかもその姿で接客させられ、やって来たお客さんからも「違和感がない」とか「似合ってる」と言われ続けたけど、僕は女装の趣味はないので嬉しくないし、恥ずかしいだけだった。

「もう、女装はこりこりだよ。」

そう言いながら自分の服に着替える僕。

久しぶりに着た男性用の服が妙に懐かしく、何処か安心するのを感じた。

そんな風に安堵を感じるのはこの服が女性用の服ではない事が大きいからだろう。

もう女装をしなくても良い。

……そう、思っていた時期が、僕にもありました。

「ちよつと待つて！ ソレ何なの！ 何なんだよ！」  
外は大雨、身体からは滴り落ちる水滴。  
そして目の前のタカヒロさんからは、

「すまないトウカ君、この家には君に合うサイズの男物の服はないんだ。」

そんな死刑宣告を先ほど告げられた。

……どうやら僕の受難女装はまだまだ続くらしい。

## おもいで 4

色々言いたい事はあるけど、まずは、なんで僕が水浸しになっているか、それを話す所から始めようかな。

……あれは今から数時間前の事だった。

――

「いらっしやいませ〜♪」

ラビットハウスの店内に、ある1人の店員の明るい声が響く。

その店員は緑色の制服を着て、張ち切れんばかりの明るい笑顔と俊敏な動きで次々と来店してくるお客さんを捌いていく、

僕の姿があった。

リゼ達にドナドナされてからしばらく経った頃、僕は色々と壊れていた。

ユキ side

“トー君は女の子みたいだ。”

それはトー君と関わったほとんどの人がトー君に持つ印象。

“かっこいい” というよりは “きれい” や “かわいい” という言葉が似合う容姿。

男の子にしては高音で透き通るきれいな声。

料理は勿論、お菓子もかなりのレベルで作れるその料理スキル。

まあ他にも色々あるけど、そのほとんどが女の子みたいな特徴のも

のばかり。

だからトー君は女の子みたいだ。

そんなトー君は、自分では嫌がって否定しているけど、昔からモテていた。

トー君が中学に上がってからは毎月と言っていい程に誰かから告白されていたし、3年の、卒業を控えた頃には毎週のようにトー君の元にはラブレターが届いていた。

「中学時代、一番モテていたのは誰か」

なんて質問を同じ中学校に通っていた同級生みんなに聞けば、全員が真っ先に口を揃えてトー君の名を挙げるだろう。

それぐらいトー君はモテていた。

異性<sup>女性</sup>からじゃなくて同性<sup>男性</sup>から。

そんなただでさえ女の子みたいなトー君が、女の子の、しかもかわいいウエイトレスの格好をしたらどうなるのか。

そんなの分かり切っていたはずなのに、その時の私は浮かれてそんな簡単な事にも気付けなかった。

「いらっしやいませ〜♪」

ラビットハウスの店内に、ある1人の店員の明るい声が響く。

その店員は緑色の制服を着て、張ち切れんばかりの明るい笑顔と俊



敏な動きで次々と来店してくるお客さんを捌いていく、

僕の姿があつた。

リゼ達にドナドナされてから1時間位経った頃、僕は色々と壊れて  
いた。

「……」

僕がこうなる数時間前、ラビットハウスは珍しく繁盛していた。

って「珍しく」、なんて言ったらチノちゃんのおじいさんティツピーに怒られちゃうだろ  
うけど、でもたまに仕事中小客さんが来ずになんと立っているだけで  
バイトが終わっちゃう時もあるから、ある程度はお客さんが来てくれ  
た方がお店的には嬉しいんだ。

……そう、ある程度は、ね。

「店員さん、注文良いですか？」

「頼んだ料理まだく？」

「お会計お願いします。」

「」

「」

「」

「」

だけど今のラビットハウスの状況は、ある程度なんて言葉、鼻で  
笑っちゃう位にたくさんのお客さんが押し寄せていて、とてもじゃな  
いけど4人だけじゃお店を回せない程、混雑していた。

ふう、ようやく客足が少し穏やかになってきた。

そんな時、

カランカラン

と来客の鈴が鳴る。

シャロside

「ちよつと千夜、そんなに急かさないでよ！」

「ふふふ、だって早く行きたいんだもの。」

とある喫茶店に走って向かう私たち。

その喫茶店で昨日実家がパン屋の女の子が開催したパン作りにクラスメイトのトウカから誘われて参加した私は、そこで偶然にも今前を走っている幼馴染の千夜に会った。

聞くとところによると千夜も私と同じくクラスメイトからパン作りに誘われていて、出会った縁でその喫茶店のマスターのお孫さんのチノちゃん、パン作りを開催したココア、トウカの幼馴染であるユキと知り合った。

……そして、クラスメイトのトウカや私の憧れの人でもある天々座先輩とも前よりも親密になれた気がする。

そんな個性的な5人が働く喫茶店に私たちは向かっている。

状況的に千夜に手を引かれて走っているけれど、

「もう、だめ……。しゃ、シャロちゃん、おねがい、ひっぱって……。」

……案の定、体力のない幼馴染はすぐに動けなくなって、早々に立場は逆転した。

「……ね。」

幼馴染を引っ張って数10分後、私と千夜はラビットハウスの扉の前に立っていた。

そこでふと、隣に立つ千夜が思い立ってようにつぶやく。

「そういえば私、このお店にお客さんとして来るの、初めてだわ。」

私はカフェインを飲むと酔ってしまう体質だから、喫茶店にはあまり行かないけど千夜はそんな体質はないから、何回か行ったことがあるのかと思っていた。

「へえ、意外ね。って事は昨日が初めてだったんだ。だから」

「ええ、昨日はパンを習いに来たし、その前は敵城視察として来たから。」

「……ん？」

扉を開けるとそこには、

「いらっしやいませ〜♪」

女の子の格好をしたクラスメイトの男の子が、満面の笑みで出迎えてきた。

パタン

扉を閉める。

「でも、今は……」

そう言いながらそつと扉を開けると、

「ううう／＼／＼」

お店の隅の方で真っ赤な顔をして自分の身体を抱くようにしてうずくまる、トウカの姿があった。

チノside

ラビットハウスには2つの顔があります。

1つは日中の喫茶店としての顔。

私や冬華さん達が働いている時間帯です。

そしてもう1つが夜、お父さんがやっているバーとしての顔。

そこではコーヒーマインがメインの日中と違ってお酒がメインとなります。

ラビットハウスはその2つの顔を持っていて、主な収入源はバータイムの方です。

だから私達が働いている間はあまり収入の事とか考えなくて良いと前にお父さんが言ってくれた事がありました。たまたま働いている間中ずつとお客さんが来ない時もあるので、隠れ家的な静かな店を目指しているおじいちゃんには悪いですが私としてはある程度はお客さんが来てくれた方が安心します。

そう、ある程度は……。

「店員さん、注文良いですか？」

「お会計お願いします」

珍しく繁盛している店内。

「注文を伺います。——ティータイムメニューのベーカリーセットです。かしこまりました♪」

「お会計は合計で1,200円です。——はい、丁度ですね。ありがとうございました♪」

そしてそれをほぼ1人でさばっていくトウカさん。

そんな彼の今の服装は、ラビットハウスの制服から何故かうちにあったメイド服です。

……誰か、この状況を説明してください。

——第25話 おもいで4——

「いらっしやいませ♪」

カランカランと来客を告げるベルの音と共にラビットハウスの店内にトウカさんの明るい声が響く。

その声はいつもより少しだけ高い声で、今トウカさんが着ている格好や、ふとした仕草と相まって私でも女の人と間違えてしまう時があります。

ユキさんいわく、数か月前まで通っていた中学校では多い時には毎週告白されていたらしいトウカさん。

そんなトウカさんの笑顔を向けられたお客さんは2人とも顔が真っ赤になって、1人は恥かしそうにチラチラと、もう1人はボーっとした顔でじっとトウカさんを見つめます。

「お客様、ご注文はなんでしようか♪」

トウカさんが満面の笑みで来店してきた2人組の若い男性客を席に案内して注文を聞くと、2人は顔を赤くして、

「えっ！ えーとおれはブルーマウンテンで。」「じゃ、じゃあおれもそれ。」

どもりながら注文をしてきた。

そして注文をした後も2人は僕の方を赤い顔で見る。

……うん、ちょっと待とうか。

別に接客態度を変えた覚えはない。

いつもと違うのは今着ている服装のみ。

……なのになんで、

……ものすごくゾワゾワする。

「はい、ブルーマウンテンをお2つですね、かしこまりました♪」

「店員さん、注文良いですか？」

「はい！では少々お待ちください。」

別のお客さんに呼ばれたので、目の前にいるお客さんにぺこりとお辞儀をして、そのテーブルから離れます。

気のせいかわかれたテーブルから熱っぽいわ視線を感じますが、今はお事中なので少々心苦しいですか気にしない事にします。

今日はユキ

くく

……その頃の僕は色々と感じがマヒしていつもよりハイテンションで接客をしていた。

後でみんなに聞いたら、その時の僕は声もいつもより高い声で、仕事も普段では考えられない程女の子っぽかったらしい。

メイド服も着ていた事もあって、まあとてもじゃないけどクラスメイトには見せられない姿だった。

カランカラン

来客を告げるベルの音。

多分その時、店内にはハプニング好きの神様が妖精でもいたのだらう。

「いらつしやいま……！」

振り返って固まる僕。

浮かべた笑顔も固まる。

なぜなら振り返った視線の先には、

クラスメイト  
シヤロがいたから。

「……。」

「……。」

気まずい沈黙が僕らの間に流れる。

それは私<sup>男性用の服</sup>服に着替えて1時間も経っていない時の事だった。

「2人とも今日は遊びに来てくれてありがとう。」

ホールにはシヤロと千夜。

2人とも遊びにきていた。

クラスメイトだった。

「……」

シヤロが来てから目が覚めた。

僕は何をしていたんだろう。

ふと視線を下に下げる。

そこにはラビットハウスの緑色の制服を着た僕が映っていた。

「／／／／」

さつきまでなんでもなかったのに、正気に戻った今、この格好がものすごく恥ずかしい。



急いで隅の方に隠れる

「2人とも今日は来てくれてありがとう」

そんな僕に変わってココアちゃんか2人の前に水の入ったグラスを置く。

## ごちおと

ご注文は下宿人ですか？

### 1話

トウカside

僕の名前は上白 冬華。

この春から高校1年生となり、それに伴い親元を離れ、この『木組みの家と石畳の街』にホームステイという形で住むことになりました。

この街は、西洋風の建物が目立ち、日本であるがどこか外国の様な雰囲気を持つ街で、街中に野生の兎が生息している事で有名な所です。

本当は1人暮らしが良かったのだけど、心配症の両親がそれを許してくれず、ホームステイという形で住む事になりました。

ホームステイ先は、父さんの知り合いの天々座さんという方の家にお世話になります。

今、天々座さんの家に向かっていている途中なのですが、この街は建物がまるで迷路のように建っている為、すぐに迷子になってしまいました。

誰かに天々座さんの家を聞こうにも、今の所、誰にも会う事が出来ず、真正正銘ピンチです。

まだ、空が暗くなるまで時間があるけど、ずっと歩きっぱなしなので、正直どこかで休憩したいです。

(・・・ん?)

「ラビット、ハウス？」

休憩出来る所がないかと、周りを見渡すと、少し離れた先に「RABBIT-HOUSE」と書かれたお店が見えました。

どうやら喫茶店ようです。

これはラッキーです。喫茶店なら休憩も出来ますし、天々座さんの家の場所も聞く事が出来ます。

(これはここで休んで行けって事ですね、分かりました。よし、さっそく行ってみよう♪)

僕は意気揚々とその喫茶店に入って行くのであった。

リゼ side

私の名は天々座 理世。

このラビットハウスでバイトとして働いている。

ラビットハウスは隣にいるチノのお爺さんが始めた喫茶店だ。

……彼は去年に亡くなっており、今はチノの父のタカヒロさんが2代目マスターとしてこの店を切り盛りしている。

切り盛りしているとは言っても、タカヒロさんが店に出るのは、夜、ラビットハウスが喫茶店からバーに顔を替えてからだ。

なので、私達が働くのは昼間の間だけで、その間は、私とチノともう1人、昨日この街にやって来たココアの3人で働いている。

ココアは春から高校生でこの街の高校に通う為に、チノの家にホームステイとして、昨日から暮らしている。

ココアの通う高校はホームステイ先の家の手伝いをしろと言う決まりがあるので、彼女は昨日からこのラビットハウスで働き始め、先輩である私は、ココアに色々と指導する立場となったのだ。

ココアのバイト初日という事で少し不安もあったが、特に問題もなく終わり帰宅した。

……バイトが終わり、私が帰る時に仲良きそうに夕食の話をしている2人を見て、羨ましさと同時に少し寂しさを感じたこと以外は。

(そういえば今日私の所にも、ホームステイしに誰か来るんだっかな。)

私は今朝、親父に言われた事を思い出す。

なんでも、親父の軍人時代の同期が「海外に出張に行く間、息子を預かって欲しい。」と、頼って来たらしいのだ。

そして、そいつはこの春から高校生で、共学化試験のため、特待生として私の通っている学校に来るらしい。

(どんな奴なんだろう……。仲良く出来ると良いな……)

「♪カランコロン」

来客を知らせるベルが鳴った。

今は午後2時を過ぎており、ランチを食べに来ていたお客さんが全て帰り、店内がひと段落していた。

「いらっしやいませ」

私が接客する。

来店して来たのは、1人の女性客だった。

女性と言っても、顔立ちは私やココアとあまり変わらないので、多分高校生なのだろう。

彼女は、女性にしては少し短い黒髪で、白いシャツツの上に着いた赤いカーディガンを羽織っており、ズボンは空色のジーパンに赤色のスニーカーでそれらは何故かメンズだったが、違和感はなくとても似合っていた。

更に彼女は旅行者なのか、この辺りで見かけない顔で、大きなキャリーケースを引きずっている。

「お一人ですか？」

「はい」

「では、こちらへどうぞ」

今は他に客がいないので、女性客をカウンターの席に案内する。

カウンターには、チノが珈琲豆を挽いており、チノの頭にはいつも通りティッピーが乗っていた。

女性客はティッピーが気になったのか、席に座った後、ティッピーを不思議な物を見るような顔をして、じーと見つめていた。

「……？ ……あ、これですか？ これはティッピーです。一応ウサギです」

チノは女性客の視線に気づいたのか、チノは手を止め、ティッピーの説明をすると、女性客は「あ、なんですね。」と納得した後、「珍しいクッションかと思いました」と言った時には、ティッピーが若干落

ち込んだ。

「じゃあ、オリジナルブレンドをお願いします」

その後、女性客はメニュー表を開き、少し迷った後、オリジナルブレンドを注文した。

「かしこまりました」

注文を聞いたチノが後ろの棚から珈琲を淹れる器具を取り出し、珈琲を淹れ始める。

「……どうぞ」

数分後、チノが淹れた珈琲が客の前に置かれる。

珈琲からは芳醇な香りがしており、カウンターから少し離れた所の机を拭いていた私の元にもその香りが届いた。

「いただきます」

客は白いカップを持ち上げ、一口飲む。

彼女の二つ二つの仕草はとても上品でまるでどこかのお嬢様の様だった。

「……あの、うちのオリジナルブレンドはどうでしたか？」

チノが客に淹れた珈琲の味を聞いた。

今日はその光景を何度か見る。

何でも昨日、とある客にオリジナルブレンドを出した所、インスタントコーヒーと間違えられたらしいのだ。

まあその客というのはココアなのだから……。

他の珈琲なら気にしないだろうが、オリジナルブレンドはこの店の顔とも言えるものだ。

珈琲の味が、客の口に合うか気になるのだろう。

チノの表情は少し心配そうだった。

「美味しいです。珈琲、淹れるの上手なんですね」

だがそんなチノの心配は杞憂に終わり、女性客はチノに笑顔で珈琲の味を褒める。

それが嬉しかったのか、ホツとしたのか、チノは少し頬を赤らめ口

元をほころばせた。

トウカside

「……？」

ラビットハウスで珈琲を飲み終わった僕は、水色の髪の店員さんの御好意で、ティツピーと言う名のウサギを触らせて貰っていると、何かの視線に気が付き横を向く。

そこには、花の髪飾りを付けた、多分この店の従業員だと思う明るい栗色の髪の少女が、僕を羨ましそうに見つめていた。

(……？ この店員さん、どうしたんだろう？)

「……！ ココアさん、ティツピーをもふもふ出来ないからって、お客さんをそんな目で見つめないで下さい！」

栗色の髪の店員さんの行動に疑問を持ち、彼女を見てみると、水色の髪の店員さんが、僕の視線に気が付き、栗色の髪の店員さんを注意をする。

「えー、私もティツピーもふもふしたいもん！」

注意された栗色の髪の店員さんは駄々をこねる。

栗色の髪の店員さんの方が歳上なのに、歳下の水色の髪の店員さんから注意を受けるその光景を見ると、どっちが歳上か分からなくなつた。

「ウサギを撫でさせていただきありがとうございます」

暫くティツピーの毛並を堪能し、水色の髪の店員さん(の頭の上)に返す。

「いえ、こちらこそ。ティツピーも気持ち良さそうでしたし。……あの、失礼ですが旅行者の方ですか？」

水色の髪の女の子が僕に質問してきました。

「いいえ、引越して来たんです。僕、この春からこの街の高校に通う事になって、今ホームステイ先の家に行く途中なんですけど、迷子になつちやつて……」

それでたまたま見つけたこの店に休憩がてら、道を聞こうと思い、

立ち寄ったんです。」

僕は事情を説明する。

「そうだったんですか……。場所が分かる物をお持ちであれば、道を教えますけど」

「ホントですか！ ちょっと待つてください。バックの中に地図があるの」

そう言っ僕はキャリアバックの中から、ホームステイ先の天々座さんの家の場所が書かれた地図を取り出し、3人に見せる。

「……えっ!？」

地図を見た、紫色のツインテールの店員さんが驚いた声を出しました。

「? ……どうしたんですか?！」

「……ここ、うちの家だ」

「……へ!?!」

紫色の髪の店員さんの眩きに僕は思わず聞き返した。

「ここ、私の家なんだ。……じゃ、じゃあ、お前が今日家に来る上白冬華なのか?！」

「え、はい。じゃあ、貴女が天々座 理世さん、なの?！」

「ああ、そうだ。」

え！ これは凄い偶然ですね。

迷子なってたまたま入った喫茶店に、ホームステイ先の娘さんが働いていたなんて。

偶然を通り越して運命を感じます。

「リゼちゃん、このお客さんと知り合いなの?！」

栗色の髪の店員さんがきよとした顔をして聞いてきました。

後ろにいる水色の髪の店員さんも状況に着いて行けてない感じですよ。

「あ、ああ。そういうえば2人にはまだ言っていなかったな。こいつは、親父の友人の……息子で、今日私の所にホームステイとして住む事になった奴だ」

「初めまして、上白 冬華です」

“息子”の部分に若干の溜めがあったし、それを聞いた残りの店員さん達もきよんとした顔をしたけど、気にしないふりをして僕は自己紹介をします。

多分ツツコンじゃダメなやつだと思うので。

「保登 心愛だよ♪ よろしくね」

「香風 智乃です」

僕が自己紹介をすると栗色の髪の店員さん、ココアさんと水色の髪の店員さん、チノちゃんも自己紹介をしてくれた。

その後4人でおしゃべりをして分かった事をまとめると、リゼさんは僕の1つ上の学年で、ココアちゃんは同じ学年、チノちゃんは2つ下だと言う事。

この喫茶店はチノちゃんのお爺さんが始めたお店で、チノちゃんは3代目らしく、リゼさんは少し前からここでバイトをしていて、ココアちゃんは昨日この街にやって来てこの家に下宿している。

という事が分かり、僕とリゼさ……リゼは、互い呼び捨てで呼ぶ事になった。

「それで、家にはいつ行く？ 私と一緒に行くか、先に行くか。」

話が一区切りした所でリゼがそう聞いてきた。

「うーん、僕的には、一緒に行きたいですね。先に行ってもまた迷いそうですね。でもリゼさ……リゼのバイトって……」

「ああ、まだ暫くかかるな」

「ですよね……。なら先に行きますよ。リゼのお父さんを待たせるわけにはいきませんし、ここで待たせて貰うのも、お店に失礼ですし。」

「それには及ばないよ」

僕が席を立とうとした時、カウンター横のドアから赤いスーツが似合いそうな声の、ダンディーな人が現れました。

(誰!?) と思っていると、チノちゃんが「父です。この店のマスターです」と、紹介してくれた。

「トウカ君と言ったね。君もリゼ君と一緒にここで働けばいいさ」



「……へ？」

チノちゃんのお父さんの突然の提案に素っ頓狂な声が出てしまう。リゼ達も目が点状態です。

「もちろん無理にとは言わない。君が良いならやってみないかな？」

「それは、出来るならやってみたいですけど、僕がどの位働けるか見なくて良いんですか？」

という疑問が僕の頭の中を駆け回ったので、思わず聞いてみた。

「大丈夫だ。君のお父さんとは昔からの仲でね。よく君が働らき者だ」という話を聞いているんだ。

制服もサイズの君に合うのがあるし、やってくれないか？」

「え、そうなんですか！ ……分かりました。やらせていただきます」

と、言う事で急遽僕はラビットハウスで働く事になりました。

……でもその前に、

「すみません、電話貸して下さい！」

僕はリゼのお父さんに電話する事にした。

## 2話

「はい、ありがとうございます。」

僕はそう言って電話をきった。

今、電話していた相手はリゼのお父さんである。

ラビットハウスでバイトをする事になったので、リゼに番号を聞いて、遅れる事とリゼと一緒に行く事を伝えたと、リゼのお父さんは快く承諾してくれました。

電話して知ったのだが、リゼのお父さんとチノちゃんのお父さん（タカヒロさん）と父さんは古くからの知り合いらしいです。

電話の後、タカヒロさんが用意してくれたバーテンダーが着るような蝶ネクタイ付きの服をラビットハウスの2階の男性用の更衣室で着替え1階に降りる。

「お、降りてきた。うん、トウカよく似合ってるな」

「だね。トウカ君格好良いよ」

「サイズもぴったりですね、良かったです。トウカさんよく似合って

ますよ」

1階に降りると、音に気が付いたのか仕事中の3人が僕の方を振り向き、褒めてくれた。

嬉しい反面恥ずかしいな。

「みんなありがとう。それでチノちゃん、まず何をすれば良いの?」

「そうですね……。リゼさん、昨日ココアさんに教えた様に先輩としてトウカさんにも色々教えてあげて下さい。ココアさんも出来たらフオローをお願いします」

「つまり今日も教官という事だな!」

「私も今日は教官だよ!」

気のせいかりぜとココアちゃん後ろに炎が見えた。

「……2人とも嬉しそうだね」

「この顔のどこがそう見える!」

2人の声が見事にハモった。

「いや、2人ともどつからどう見ても嬉しそうだよ?」

「トウカ、上司に口を聞く時は言葉の最後に“サー”を付けろ!」

「私の場合は名前の後に“お姉ちゃん”を付けなさい!」

「落ち着いて下さい、リゼ教官殿!! ココア姉さん!!」

「きよ、教官殿……。「ね、ねえさん……。」

まさか本当に呼ばれるとは思っていなかったのか、教官と姉と呼ばれた言われた2人は暫くヘブン状態になっていた。

そして話が進まないと感じたのか、チノちゃんがメニュー表を持ってきた。

「これが、うちのメニュー表です。ちゃんと覚えて下さいね」

「了解♪ 家でもコーヒー淹れてたし、暗記系得意だから任せて!」

こう見えても勉強の成績は結構良いんです。

……地理以外は。

「そうですね、なら一目見れば大丈夫ですね」

「え!? 流石に一目じゃ無理だよ!」

瞬間記憶能力か何かですか!? そんな能力持っている人なんて……、

「そうなんですか？ リゼさんは一目で暗記してましたけど」  
いたよ！ リゼさん凄いな！ 軍の人って何か暗記の訓練でもしてるのかな？

あ、言い忘れてたけど、リゼの親は軍の関係者です。

「凄いね……。ちなみにチノちゃんはメニュー、どうやって覚えたの？」

「私ですか？ 私の場合は幼い頃からここで働いているので自然と覚えました。珈琲の銘柄も匂いで判断出来ますし」

チノちゃんは当然のように凄い事を言った。

「え、何それ凄い！ ……でもチノちゃん中学生だよ。珈琲苦くないの？」

高校生となった幼馴染の由紀は未だにブラックで飲めない事を思い出して、チノちゃんはどうだろうと聞いた瞬間、チノちゃんはそっぽを向いてしまった。

「……えっと、もしかして砂糖と、ミルクは必須……とか？」

チノちゃんの身体がビクンと反応する。

「……そ、ソナコトナイデスヨ」

(わー、めっちゃ片言だー。しかも顔が少し赤くなっているし)

「チノちゃんはまだ中学生だから仕方ないよー」

「そうぞチノ。私もチノ位の年にはブラック飲めなかったし」

へブン状態から復活したココアちゃんとリゼが共にチノちゃんをフォローする。

ココアちゃんは抱き着きのオマケ付きで、抱き着かれたチノちゃんは口では「子ども扱いしないで下さい」と嫌がっているが、口元は若干微笑んでいた。

「ココアちゃんは何か特技無いの？」

「私は特に無いんだよね……」

僕はココアちゃんにも特技を聞くが、ココアちゃんは何もないと残念そうに答えた。

「ココア、89×87は？」

「え、7, 743だよ」

「!?」

突然リゼさんが計算問題を出し、それをココアちゃんは瞬時に答える。

「じゃあ、 $128 \times 112$ は?」

「14, 336だね」

「!!?」

再びリゼさんが計算問題を出し、ココアちゃんは瞬時に答える

その後も3, 4問リゼは計算問題を出すが、ココアちゃんはそれを全問が物凄い速さで答えていた。

「チノちゃん、これって」

「はい、これがココアさんの特技です。しかも本人はそれに気が付いていません」

「マジですか……」

ココアちゃんの意外な特技を知った瞬間だった。

「珈琲豆が切れてきそうなので、すみませんがココアさん、トウカさん、お2人で倉庫から取って来て下さい」

「はい」「うん、分かった」

少しして2, 3組のお客さんを相手にした後、チノちゃんが珈琲豆が切れそうなのに気が付き、僕とココアちゃんて倉庫に行く事になった。

因みにリゼとチノちゃんの厳正な審査の結果、僕の接客態度は合格でした♪

倉庫には珈琲豆の入った袋が大小あり、大きい袋と小さい袋を2つずつ持っていけば良いらしい。

(普通に考えて僕が大きい方を持つべきだね)

そう思い、僕は近くにある大きい袋を2つ持ち上げる。袋は多少の重さを感じるが、もう1つ位なら持って運べる程度の重さだった。

「じゃあ、ココアちゃん、行こう……か?」

ココアちゃんの方を向くと、ココアちゃんは重そうに手をプルプル

させながら、小さな袋2つを持ち上げようとしていた。

「ココアちゃん、大丈夫?! 手伝おうか?」

「だ、ダイ、ジョーブ……。昨日は一個持ってたんだから……。」

そう言っつて、ココアちゃんは袋をなんとか持ち上げた。

「そう、無理しないでね」

「わ、分かった、ありがとう」

僕らは珈琲豆を運んで行った。

「ただいま。あれ? ココアちゃん、リゼは何してるの?」

ホールに戻り、袋をチノちゃんが指定した所に置いた後、ふとホール内を見渡すとリゼがお客さんのテーブルで珈琲カップに何かをしているのが見えたのでココアちゃんに聞いてみた。

「あれは、テラアートをしてるんだよ」

ココアちゃんが得意げに説明してくれたが、多分それは……、

「ココアさん、テラアートではなくラテアートです」

と、チノちゃんがツツコミを入れる。ツツコまれたココアちゃんは顔を赤くして「まだ間違えたー」と叫んでいた。

……前にも間違えた事あるのかな?

「ラテアートってあのミルクで珈琲に絵を描くあれの事?」

「はい、その事です。ラビットハウスでは、サービスの1つとしてやっています」

「そうなんだ。やってみて良い?」

「良いですけど、まずリゼさんのお手本に見た方が良いと思いますよ?」

「そっか、それもそうだね。……つて、あれ? チノちゃんが教えてくれるんじゃないの?」

気になったのでチノちゃんに聞いてみると、チノちゃんは再びそっぽを向く。

「べ、別に下手なわけではないですよ!」

「? ねえ、リゼ。チノちゃんのラテアートってどんなの?」

チノちゃんが描いたラテアートがどんな感じなのか気になったので、丁度戻ってきたリゼにこっそり聞いてみる。

「ち、チノのか……。下手ではないんだが、何とか前衛的過ぎて……。昨日なんかピ○ソみたいない絵描いてたし。」

リゼのその言葉で色々察してしまった。

「で、手本はこんなもんだ」「おー」

その後、ラテアートのお手本として、リゼが珈琲カップにミルクでウサギの絵を描く。

リゼが描いたウサギはとても上手で、おもわず僕とココアちゃんの口から感嘆の声が出た。

「リゼ、上手だね」

「昨日も色々描いて貰ったけど、どれも上手だったよ」

「そ、そんな事ないぞ」

リゼは恥ずかしいのか顔を赤くする。

「そんな事ないよ。ウサギの絵、上手で可愛いし。他にも描いてよ」

「リゼちゃん、昨日描いてくれたあの絵、また描いてよ」

「あれか。よし、トウカよく見ているよ！ うおおおおお！」

そう言って、リゼは物凄い勢いで次のカップに絵を描き始める。

「出来た！」

「こ、これは……!?!」

数分後、リゼが描いたのはリアルな戦車の絵だった。

戦車には迷彩柄が入っており、砲台の先には砲撃を撃った後なのか、煙も出ている。

それはとても人間業とは思えなかった。

……でもなんで戦車？

やっぱり親が軍の関係者だから？

「凄いと言いたいようのないね……」

「だからそんなことは無いって。さあ、トウカも描いてみる」

「トウカくん頑張るって」

「うん、頑張ってみる」

「出来た！」

数分後、なんとかラテアートを描き終え3人に見せる。

「かわいい、犬だ」

「初めてにしては上手く描けてるな」

「上手ですね。これは柴犬ですか？」

「うん、そうだよ」

僕が書いたのは柴犬の絵。

離れて暮らしているおばあちゃんが飼っている太郎丸という名の犬を思い出して描いてみました。

初めて描いたせいで、線がブレブレなのはご愛嬌という事で勘弁してもらえた。

初めてで上手く描けるか不安だったけど3人とも喜んでくれた。

「今日はその辺で閉めましようか」

空が暗くなり始めた頃、チノちゃんが閉店を告げる。

しかしまだ喫茶店を閉めるには早い時間だった。

「え、もう閉めちゃうの？ 早くない？」

「ラビットハウスは夜には父がバーをするので、この時間で一度お店を閉めるんです」

「なるほどね。じゃあ、残りの仕事は掃除位？」

「はい。後少しなので頑張ってください」

「りよーかいです」

その後掃除を終え、更衣室で分かれた僕はみんなより先に着替え終わったので、1人ホールでリゼを待っていると、カウンターの横のドアからティップシーを連れたタカヒロさんが現れた。

「トウカ君、お疲れ様。途中で何度か働きぶりを見させて貰ったけど、ちゃんと働いてくれてたね。働いてみてどうだったかな？」

タカヒロさんはティップイーをカウンターに置くと、バーの準備を始める。

「はい、始めはちゃんと出来るか不安でしたけど、みんなが色々とフォローしてくれたからなんとかになりました」

「それは良かった。これから宜しく頼むよ」

「はい」

「トウカ、そろそろ行くぞ」

タカヒロさんが現れたドアから、私服に着替えたリゼが顔を出す。

「了解。ではタカヒロさん、明日からまたよろしくお願いします」

「ああ、また明日」

僕はタカヒロさんにペコリとお辞儀をし、リゼと共にホールを出た。

「チノ、ココアまた明日な」

リゼに連れられて僕らは台所に顔を出す。

そこでは、チノちゃんとココアちゃんが仲良く(?)夕食を作っていた。

「リゼちゃん、トウカ君、また明日ね」

「リゼさん、トウカさん、お疲れ様でした」

「2人ともまた明日」

2人に挨拶して僕らはラビットハウスを出た。

「〜♪」

僕らは今リゼの家に向けて歩いている。

リゼは気分が良いのか鼻歌を歌っていた。

「リゼ、どうしたの? なんかご機嫌だけど」

「ん? ああ、なんかこういうの、良いなって思ってたな」

「?」

「こうやって姉弟みたいに誰かと一緒に帰るのがさ。

・・・昨日、バイトが終わったココアとチノが姉妹のように一緒に夕食を作っているのを見て羨ましく思った。

私は1人っ子で、昔から兄弟と言う物に憧れを持っていたから、余



計にそう思ったんだと思う。そのせいか、昨日は1人で家に帰るのが少し寂しかったんだ」

「……。」

少し前を歩くりゼの顔は、後ろにいる僕には見る事が出来ないが、その声色からして彼女が悲しんでいるのは分かった。

「だから、今朝親父が、『下宿人が来る』と言った時は驚いたし、嬉しかった。でもどんな奴が来るのかは知らないから仲良く出来るか不安だったんだ。でも、」

その場で立ち止まったりゼはクルリと振り向き、僕の顔を真っ直ぐ見る。

「トウカとは仲良く出来そうだ。これからよろしくな」

リゼはそう言つて右手を差し出す。

「うん、こちらこそよろしく、リゼ」

僕も右手を出しリゼと握手した。

趣味は違うかもしれないけど僕もリゼとは気が合いそうだと思うた。

「着いたぞ。ここが私の家だ」

再び歩き始めて数分後、リゼが指差した先には城のような豪邸が立っていた。

「……すごい」

「いつまで突っ立ってるんだ。行くぞ」

「うわっ!？」

リゼの家の大きさに驚き、ボーと立っていると、突然リゼに手を引かれ、門の方に連れて行かれる。

僕の何倍もある門から敷地内に入り、広い庭を通り漸く玄関に辿り着く。その間ずっとリゼは僕の手を引いていた。

「ただいま〜」

『お嬢様、おかえりなさいませ!! いらっしやいませ、上白様!!』

リゼが玄関の扉を開けるとそこには何人もの黒服の男性と、メイドさんが列を成して並んでおり、僕らを出迎えた。

「お嬢、おかえりなさいませ。お荷物をお預かりします」

「ああ、頼んだ」

「上白様もこちらに」

「あ、はい」

2人、黒服の男性が僕らに近付き、僕らの荷物を受け取る。

「旦那様はこの先です」

「わかった。」

黒服の男性に案内された扉の先は食堂で、長いテーブルの先には1人の男性が座っていた。

どうやら彼がリゼのお父さんなのだろう。

リゼも「ただいま、親父」と声をかけているし。

声をかけられた男性は顔を上げる。

その片方の目は眼帯をしていた。

「リゼ、お帰り。そして、いらつしやい冬華君。さっき電話でも名乗ったが私がリゼの父の天々座 理座だ」

「初めまして、上白 冬華です。今日からよろしくお願いします」

僕はペコリとお辞儀をした。

「色々話したいが、まずは食事にしよう。」

そう言つて天々座さんが手を叩くと、扉からカートを押したメイドさんが何人も現れテーブルに次々と料理を置いて行く。

僕も料理をするから分かるが、どの料理もとても美味しそうだった。

「す、すごい……！」

「さあ、トウカ座つてくれ」

並べられた料理に唾然としながらも、リゼに勧められ席に着いた。

そして、天々座さんの合掌で僕らは食事を始めた。

「御馳走様でした」

「どうだった？ 冬華君、口に合ったか？」

「はい、どれも美味しかったです。ありがとうございます。」

30分後、僕らは食事を終え、今は食後の紅茶を飲んでいる。

天々座さんは気さくな人で、食事中もいろんな話をしてくれた。僕の父さんとの話やリゼの話など。

自分の話になった時のリゼは恥ずかしそうだったけど……。

「さてトウカ、部屋を案内するから着いて来てくれ。」

そう言つてリゼは席を立つ。

「はい。あ、ごちそうさまでした。」

僕もリゼに付いて行くと、部屋を出る時にメイドさんとすれ違ったので挨拶をしてから部屋を出た。

「ここが今日からお前が使う部屋だ。」

「わあー！」

リゼに案内された部屋はとても広く、テレビやシャワールーム等も付いており、そこら辺のホテルよりも豪華だった。

「何かあったら私に言えよ。私の部屋は隣だからな。」

「ありがとう、リゼ。」

リゼは隣の部屋に入つて行つたので、僕も自分の部屋となる部屋に入った。

部屋には既に荷物が届けられていたので、早速開封していく。

「ふう、さっぱりした〜」

2時間後、荷物の整理も終わり、お風呂から上がった僕はベッドに寝転ぶ。

寝転んだベッドはとても心地よく、徐々にだが眠気が襲ってくる。このまま寝てしまおうと思っていると、扉がノックする音が聞こえた。誰だろうか？

「はーい」

扉を開けるとそこにはリゼが立っていた。

就寝前なのかリゼは寝間着姿で、ツイントールの髪も下していた。

……そして何故か眼帯をしたうさぎのぬいぐるみを抱えている。

恰好のせいか、なぜかもしもしているせいか、いつもの凜とした雰囲気は少し影を潜めていた。

「？ リゼどうしたの？」

「と、トウカ、少し話相手になって欲しくて。……邪魔だったか？」

そう言ったリゼの声は少し震えていた。

「大丈夫だよ。でもどうしたの？ 声震えてるけど。」

「し、仕方ないだろ！ 夜に誰かと話すなんてなかったんだし。……

トウカは緊張してないのか？」

「ん……、特にはないかな？ 上に1人、姉がいるし、妹みたいな幼馴染もいたし。」

姉さんと由紀の事を少し思い出す。

「姉がいたのか！ 羨ましいぞー！」

「そうでもないよ？ うちの姉なんて話し相手になって欲しいからって、深夜にも叩き起こしてくるような人だったから」

あれっ、思い出したらなんか嫌な汗が出てきたよ。

「そ、それは凄いな……」

「うん……。だから、リゼは全然気にしなくて良いんだよ」

「そっか、なら良かった」

リゼはぬいぐるみをギュッと抱いた。

その後、僕らはベッドの上で色んな話をして気付いたらいつの間にか眠ってしまった。

それはまるで実家の僕の部屋で姉さんや由紀と一緒に寝ているみたいだった。

そして次の朝に目が覚めたりリゼと一緒にベッドで寝ていた事に気が付いて、顔を赤くしたのはまた別の話だ。

### 3話

リゼの家で暮らし始めて、数日が経った。

その間にリゼに街の案内をしてもらったり、ラビットハウスで働いたり、天々座さんに銃の扱い方を教わったりして毎日楽しく過ごしています。

そして今日もラビットハウスでバイトです。

「仕事にも慣れてきたし頑張っていきましよう♪」

「トウカ君、聞いて聞いて!」

「ん? ココアちゃんどうしたの?」

更衣室でバーテンダーの服に着替えてホールに出ると、ココアちゃんが駆け寄って来ました。

「なんだか嬉しそうだけどどうしたのかな?」

「私、シスターコンプレックスなんだって!」

「フェツ!」

突然、ココアちゃんがとんでもない発言をしてきたせいで、変な声が出た。

「えっとココアちゃん、シスターコンプレックスの意味分かってる!」

「もっちゃん♪ 妹が大好きって意味だよね」

僕の質問にココアちゃんは自信満々の笑顔で答えた。・・・でもそれ、

(意味違う!)

心の中でツツコミを入れてる間に、ココアちゃんは僕の後ろから来たりぜにも同じ事を言い、リゼも固まらせていた。

(やばい、意味を分かってない。早く止めなきゃ・・・)

今日もラビットハウスでバイトです。

ココアちゃんの突発的な言動にはまだ慣れてないけど頑張っていきましよう・・・。

今日からいよいよ新学期です。

支度をしていると扉がノックされ、リゼが呼びかけてきました。

「トウカ、もう用意は出来ているか? そろそろ行くぞ。」

「はい」

鞆を肩にかけ、部屋を出る。

廊下にはブレザー姿のリゼがおり、

「行つて来まゝす」

「行つてらっしゃい、気をつけてな」

僕らは天々座さんに挨拶をして一緒に家を出ました。

僕が通う学校はリゼと一緒にです。

リゼの学校は女子高なのですが、今年から共学化に向けて準備をしているようで、その1つとして、

〃男子生徒を特待生として入学させて色々と改善点を挙げられる。

〃

と、いう試みが出来、それを利用して僕はこの学校に通う事になったそうです。

……ちなみに僕が通う学校が女子校だと、天々座さんとリゼから聞かされたのは昨日の夜だった。

なんでも父さんが黙っておくように言ったらしくて、それを聞いた僕はもういない父さんを怒りたくなつたのは天々座さんやりゼには内緒です。

「それにしてもトウカの前の学校って学ランだったんだな」

僕が着ている服装を見つめ、リゼがそう呟く。

去年まで女子校だった学校に男子を入学させるという特異な状況の為に学校側も色々準備で忙しかったのか、忘れていたのか、男子用の制服は用意出来ず、僕が今着ているのは巡ヶ丘学院高校の制服です。

2ヶ月前に由紀と一緒に買ったのに、転校する事になって着れないと思つていたのでラッキーです。

「そうだね。男子のはこのデザインだけだったけど、女の子のセーラータイプの制服は、襟とスカートの色が緑と紫の2種類から選べたよ」

喋りながら、ふと由紀と制服を買う時の光景が浮かんだ。

緑色か紫色、どっちにしようか決められず、結局僕の好きな紫色の方を選んだんだっけ……。

「へえ、女子だけ2種類あったのか。因みどっちが多かったんだ？」

「圧倒的に緑の方だったよ」

「そ、そうなのか。私は紫色好きだからちよっ残念だな」

自分の好きな色が不人気だった事にショックを受けたのか、リゼの声のトーンが少し落ちた。

「うん、ちよっ残念だよね。でも、紫色のも良かったよ」

『見て見て、トー君。似合ってる?』

再び浮かんだ由紀の姿は、彼女が始めて着た制服をいの一番に僕に見せに来た光景だった。

その後も前の街の話題を中心として、他にも色んな話をしながらリゼと共に学校に向かって歩いていると、前方からココアちゃんが歩いて来るのが見えて来た。

制服を着ているので、どうやら彼女も今日が入学式のようにです。

「あ、リゼちゃん、トウカ君おはよう♪」

ココアちゃんは僕らを見つけると駆け寄ってきました。

ココアちゃんの服装はピンクのカーディガンタイプの制服で彼女によく似合っていた。

「おはようココア」

「おはよう、ココアちゃん」

「2人の学校の制服かっこいい!」

「ありがとう」「別に普通だろ?」

僕は普通に返答したが、リゼはちよつとツンとした言い方だった。ツンとした言い方だったけど、彼女の頬は少し赤くなっている。きつと褒められて嬉しかったのだろう。

ココアちゃんもそれに気付いたのかクスクス笑っていた。

「ブレザーもいいなー。ねえ、制服交換してみない?」

「おいおい、自分の学校に行けよ。遅刻するぞ?」

「あ、うん。じゃあまたお店でね〜!」

そう言つてココアちゃんは去つて行つた。

(次にココアちゃんに会うのはお店かな)

そう思つて僕らは再び学校に向けて歩きだした。しかし……

「あ、リゼちゃんにトウカ君。また会つたね♪」

数分後、再びココアちゃんに僕らは出会つてしまった。

(ココアちゃんもしかして迷つてる!?)

「お前学校への道分かつてるのか?」

僕と同じ事を思つたりリゼがココアちゃんに声をかけるが、

「心配しなくても大丈夫だよー」

と、ココアちゃんはどこ吹く風だった。

「なあトウカ」

ココアちゃんが見えなくなつてすぐ、リゼが声をかけてくる。

その声は少し心配の色がこもっていた。

多分リゼも僕と同じ事を考えてるのだろう。

「うん。ココアちゃん、迷つてるね……」

案の定その通りだったようで、その後も何度かココアちゃんと出会



い、終いにはリゼも「異次元に迷い込んでしまったのか!」と、迷走した事を言い始めてしまう始末でした。

――

「ハアハア、なんとか迷宮を抜け出せた……」

「別に僕らは迷ってなかったけどね」

漸くココアちゃんと出会わなくなつて、平常心(?)に戻つたりゼにツツコミを入れて、再び学校に向けて歩く僕ら。

「いやあー! 来ないでー!!」

「!!」

すると突然、近くの路地裏の方から女の子の叫び声が聞こえてきました。

これは只事ではない雰囲気です。

「トウカ!」

「うん、行こう!」

僕らは駆け出し、その路地裏に入る。

そこにいたのは、

兎に怯えている、1人の少女でした。

「……え?」

「! 助けて下さい!」

予想していたのと違う光景に驚き固まっていた僕らに少女は助けを求めてきました。

とりあえず兎を抱いて路地の方に逃がすと、少女はホツとした顔をしてリゼの手を借りて立ち上がります。

よく見ると少女が着ている服はリゼと同じもので、どうやら彼女も

同じ学校に行くようだ。

「私、桐間 紗路って言います。助けて下さってありがとうございますございました」

「助けたって言ってもただ兔をどけたたけなんですけどね……。」

「それでも私にとっては大きな事です！」

「そうなんだ。」

……ところでシャロさんって兔が苦手なんですか？

「そうなの……。昔ウサギに噛まれてそれ以来苦手で……。」

僕の質問にシュンとした表情でシャロさんが応える。

この街には兔が多くいて大人しいウサギもいれば気性の荒いウサギもいる。

でもそれは一目見ただけじゃ分からないからシャロさんにとっては大変なのだろう。

彼女のその表情を見て苦労しているのがなんとなく伝わって来た。

「また兔に出会おうといけないから同じ学校みたいだし、一緒に行こうか」

「良いんですか！」

「ああ。なっ、トウカ」

「もちろん」

僕らの返答にシャロさんは顔をパァーっと輝かせた。

シャロさんも加わり、学校に向け歩こうとした僕らの視線の先に、登校時間終了まで10分をきった時計台が……。

背筋がサァーと寒くなった。

「しまった！ もうこんな時間だ！」

リゼが叫ぶ。

ココアちゃんの事とかシャロさんの事とかでいつの間にかかなりの時間を消費していたようだ。

……こうなったら最後の手段を使うしかない。

「リゼー！」

「ああー！」

僕らは互いにアイコンタクトを取って、

「シャロさん！」「シャロ！」

「へ!？」

僕がシャロさんの右手を、左手をリゼが持つと、

「走れ〜!!」

ものすごいスピードで走り出した。

「キヤーー!!」

走っていると後ろからシャロさんの叫び声が聞こえて来るが、僕らはそれを無視して学校まで走り切った。

走ったおかげで僕らは登校時間終了まで5分を残して学校に到着し、グツタリしたシャロさんをリゼに任せ、僕は職員室に向かいます。

多くのお嬢様達が通っているこの学校はとても広く、若干迷いそうになったけど、事前に貰っていた地図のおかげで無事に職員室に辿り着く事が出来ました。

職員室で僕は、担任の先生となる若い女の先生と共に応接室に通されるとそこには1人の初老を迎えた女性がいました。

驚きました。まさか、校長先生がおられるとは……。緊張してしまいます。

……えっ？ 何で校長先生の顔を知ってるかって？

それは昨日届いた段ボールの中にこの学校のパンフレットも入ってて、そこに校長先生も紹介されていたからです。

「始めまして上白君、私がこの学校の校長です。まず君にはこの学校の共学化の第一歩として入学して来てくれた事を感謝します」

校長は立ち上がり、深々とお辞儀をなさりました。  
その動作はとても優雅で上品でした。

「こちらこそ、私を共学試験の生徒として選んで頂きありがとうございます  
います。特待生として、恥のないように務めます」  
そう言っ僕もお辞儀を返す。

挨拶の後、軽く学校説明を受けた僕は、担任の先生に連れられて応  
接室を後にしました。

シャロside

(また会えると良いな・・・)

今日の登校中に出会った天々座先輩に教室まで送って貰い、入学式  
に間に合った私は、式が終わって担任の先生が来るまで自分の席で  
ずっと天々座先輩とトウカ君の事を思っていた。

不思議な人達だった。

トウカ君は男の子なのに綺麗で、天々座先輩は女の子なのにかっこ  
良かった。

(・・・そういえば天々座先輩にトウカ君の学年と苗字、聞くの忘れて  
たな)

私はふとそんな事に気付く。

天々座先輩は私と別れる時に名前と学年を聞いたから分かったけ  
ど、トウカ君は学校に着いてすぐに職員室に向かったので知らないの  
だ。

「トウカ」という名前も天々座先輩が彼をそう呼んでいたのが聞  
こえただけだし・・・。

(・・・今度会った時に聞いてみよう・・・ん?)

考え事をしていたせいで気が付かなかったけど、教室の色んな所か

ら黄色い声が聞こえてくるのに気付いた。

(・・・なんだろう?)

「あの、何かあったんですか?」

気になったので、たまたま近くにいた人に聞いてみると、その子は「この学校に特待生として男の子が来るんです! 同じ学年にならないかしら」

と興奮した様子で話してきた。

周りを見渡すと同じような話題が所々で上がっている。

話題の男の子とは十中八九、今朝会ったトウカ君の事だろう。

もうこんなに話題になってるなんて、やっぱり女子校に男の子が来るなんてスゴイ事なんだ・・・。

(・・・同じクラスだったら良いな)

「彼に会いたい。」

さつき思ったその気持ちは、より強く私の中に芽生えていた。

その時チャイムと同時に担任の先生と思われる少しボーイッシュな女の先生が教室に入ってきた。

それを見て、立っていた生徒はみんな自分の席に座る。

・・・私の前の席以外は。

・・・ん?

「みなさん始めまして。このクラスの担任となりました、夏海 甘奈 なつみ かなな です」

先生の明るい声が教室の中に響く。

「気付いた人はいると思いますが、このクラスには1つ空いてる席がありますね」

その言葉に教室中がざわつき、みんなの視線が私の前の席に向けられた。

「その席に座る生徒を紹介する前に、この学校は今年から共学化へ向けて色々準備を行っています。」

その試みの1つの男子生徒の試験入学ですが・・・、みなさんもう気付いてますね、そうです。そこに座る生徒こそが、その男子生徒です」

『キャー！！』

ざわめきだった声は歓声に変わった。

「ハイハイ、静かにしないと進められないよ。・・・よし、静かになつたね。じゃあそろそろ良いかな？ 上白君、入って来て」

静寂が包む教室に1人の男子生徒が入って来て黒板の前に立つ。その男子生徒は、やはり朝私を兎から助けてくれた上白君だった。

こんな物語みたいな偶然があるのだろうか。

教室を見渡した上白君は私を見つけると軽く手を振ってきた。途端に周囲がざわつく。私は赤くなりながらも手を振り返した。

「ん？ 桐間さん、彼と知り合い？」

「は、はい。今朝偶然一緒になって」

「なら良かった、彼の席は君の前だ。色々フォローしてあげてね。じゃあ上白君、自己紹介お願い」

「はい」

上白君は返事をして黒板に自分の名を書くとお辞儀をしてから自己紹介を始めた。

「巡ヶ丘という街から来ました、上白 冬華です。今回、共学化の試験という事でこのクラスでみなさんと共に学ぶ事になりました。」

色々とはらない事もあると思うので何かあったら遠慮なく言つて下さい。

後、遠慮せずに気軽に話しかけて来てくれたら嬉しいです。これから同じクラスメイトとして宜しく願います」

自己紹介を終えた上白君が再びお辞儀をすると一斉に拍手が起こった。

「上白君ありがとうね。君の席はさっきも言った通り桐間さんの前だよ。桐間さん、席前後だし知り合いみたいだから上白君の事色々フォローお願いね」

「はい、分かりました」

「シャロさん、これからよろしくお願いします」

前の席に座った上白君が右手を差し出してきた。

「うん、こちらこそよろしくね」

私も右手を差し出し握手した。

トウカside

(どうしてこうなったのかなあ・・・)

どこを見ても周りにはクラスメイトの女の子達。

僕は今クラスメイトからの包囲されています。

「ねえ、上白君の好きな食べ物って何？」

「巡ヶ丘ってどこにあるの？ 私、行ってみたい」

「髪綺麗だね。どこの商品を使ってるの？」

あちらこちらから聞こえて来る僕への質問の声、まだ朝礼が終わって先生が教室から出て行ってから1分も経っていないのにこの状況です。

後ろの席にいたシャロさんの姿は周囲の輪に飲み込まれた為、既になくなってました。

・・・包囲の輪は他のクラスからも来る生徒でドンドン大きくなっ

ていつてるような気がします。  
いつたい、いつになつたら終わるの・・・？

結局、先生が止めに来るまで質問の嵐は収まりませんでした。

――

「ふう、さつぱりした〜」

夜、お風呂を終えた僕はベットに倒れこんだ。

お風呂上がりで火照った身体がフカフカの布団に包まれる。

~~~~~♪

「ん？」

着信音が聞こえてきた。

手を伸ばしてベットの横の机に置いてあるスマホを取り、表示されている画面を見る。

「！」

そこに表示されていたのは幼馴染の名前だった。

通話ボタンを押し、耳に当てる。

『ヤッホー、トー君。久しぶり♪』

スピーカーから聞こえてきた少し子供っぽい声、それは紛れもなく幼馴染の声だった。

久しぶりに聞く幼馴染の声に懐かしさが込み上げてきて、

「久しぶり、ユキ」

出てきた声は少し震えていた。



## 第4話

リゼ side

夜、寝支度を済ませた私は、自分の部屋から出て、廊下を歩く。私が向かっているのはトウカの部屋だ。

トウカがこの家に来てから、私は夜になったらトウカとお喋りをするために、彼の部屋を訪れるようになった。

トウカとする他愛もないお喋りは好きだ。

そして、気付いたらいつの間にか2人とも眠っていて、そして朝に一緒に目覚めるのも……。

こんな、幼い姉弟がするような事、姉のいるトウカからしたら子どもっぽいと思われるかもしれないけど、ひとりっ子の私にとっては憧れだったし、『誰かが一緒にいる』という安心感のおかげか最近よく眠れるのだ。

「……」

トウカをひと言で表すと、『女の子みたいな奴』という言葉が1番当てはまると思う。

その事をトウカに伝えたらきつとトウカは気を悪くしてしまいそうだけど、私は悪い意味で言っているんじゃない。

トウカは物腰が柔らかかで、気配り上手で気が利く。

ココア程ではないが、初対面の人とでも仲良くなるのも早い。

そのどれも、私が欲しいと思っているものなのでトウカがちよっと羨ましい。

――

トウカの部屋の前に辿り着く。

早速、ドアをノックし・・・ようとしたが、その手は途中で止まった。

部屋の中から電話の着信音と思われる電子音が聞こえて来たから。

『久しぶり、ユキ』

「・・・！」

電子音が止み、代わりに聞こえて来たトウカの声に私は驚いた。

その声は震えていたから・・・。

――

トウカ side

【罪を犯した人間が、その罪の報いを受けるとするならば、それはいつの事だろう・・・。】

僕の家族は、地元では知らない人などいない程の認知度の誇る会社に勤めている父さんと母さん。

3つ年上でちよつとトラブルメーカーだけど、優しい姉さん。

そして離れて暮らしているおばあちゃんと、そのおばあちゃんが飼っている太郎丸という名前の柴犬がいる。

そしてその他に、僕にとって家族と言っても差し支えのない存在がいる。

幼馴染の「ユキ」という名前の女の子が・・・。

僕とユキは家が隣同士で、僕らが同い年だったという事もあって、小さい頃から一緒にいて、まるで兄妹のようになして育った。

まあ僕の容姿が女の子っぽくって、ユキは子どもっぽいでよく姉妹と間違えられていたけど・・・。

ユキとは幼稚園から一緒に、小学校、中学校も同じで、そして、高校も同じ所に行くはずだった。

『ずっと一緒だよ』ってお互い約束して、僕らが一緒にいる事は当たり前なものだと思っていて、2人ともそれを信じて疑わなかった。・・・でも現実には残酷で、そうはならなかった。

僕の引っ越しによって・・・。

ーーーー約1週間前ーーーー

「ちよつと待ってよ、そんな事いきなり言われても困るよ！」

僕の部屋に響く僕の戸惑いの声。

突然両親から突き付けられた“転校”と言う4文字の言葉。

それは地元の高校の入学式が1週間前に迫って、既に高校に入る準備が全て出来ていて、毎日ユキと来たる高校生活について会話の花を咲かせていた頃の事だった。

信じれなかった。

両親の言っている事が理解出来なかったし、したくもなかった。

元々聞いていた話では、地元を離れるのは海外出張のある両親だけ。

僕と姉さんはこの春からおばあちゃんの家に住む事になっていた筈だった。

・・・なのに、

「なんで!?! なんで僕までこの街を離れないといけないのさ!」

引っ越しする必要もない筈の僕まで引っ越し事になっている。

しかも両親の海外出張に着いて行くならまだ納得出来るが、行き先は全く関係ない街。

そこに住む、両親の知り合いの人の家にお世話になる事なつていた。

僕の質問に両親は一言「ゴメン」とだけ呟くと、静かに僕の部屋から出ていった。

絶望した僕を残して……。

――

『――！』

『――、――』

『――！』

両親が僕の部屋を出て行ってから何時間経ったのかは分からないが、かなりの時間が経って、既に外が暗くなった頃、下から姉さんの怒った声が聞こえてきた。

多分、姉さんも両親から僕の引越しの事を聞いたのだろう。

普段は温厚な姉さんのこんなにも怒っている声をその時僕は自分の部屋のベットの上で初めて聞いた。

そして次の日僕は、食事もほとんど取らずに1日の大半をずっとベットの上で過ごした。

たまにドアの向こうから心配そうに話かけてくる姉さんの声も全て無視して……。

――

コンコン

部屋籠って2日目の夜、ドアの向こうから控え目なノックの音が聞こえて来た。

……多分また姉さんだろう。

そう思つてベットの上で横になつたまま寝たふりをしてゐる僕はそれを無視する。

「・・・トー君、起きてる?」

「・・・!」

しかし、聞こえて来たのはユキの声だった。

「・・・トー君、入るね?」

その言葉と共に部屋のドアが開く音と、それに次いで近付いてくる足音、そしてベットが少しきしむ音と感覚が僕に伝わり、背中にユキが抱きついた感触が加わる。

触れているその部分からユキの体温が伝わってくる。

「・・・ねえ、本当に引越すの?」

部屋にユキの静かな声が響く。

その言葉の返答として静かにうなずくと、ユキは「そっか」と悲しそうに呟いた。

「・・・ずっと一緒にいれなくてゴメン」

1日ぶりに出したその声は僕のものとは思えないほど酷く、ガラガラで、とても弱々しい声だった。

そして、一度言葉が出た事で、謝罪の言葉は次から次へと出てくる。

「一緒に学校にいけなくてゴメン」

「約束を守れなくてゴメン」

「ユキと一緒に学校に行きたかった」

「ユキともつといたかった」

・・・

謝罪の中に願いも入っていたけど、それでも僕は言い続けた。

僕が疲れて眠ってしまふまで。

その間ユキは僕の言葉に静かにうなずいて、抱きしめてくれた。  
た。

――

「う、うん・・・?」

朝、太陽がまだ出てない早朝に目を覚ました僕は、体に伝わる拘束感に気付く。

顔を動かすと後ろで眠っているユキを見つけた。

(・・・そっか、昨日。・・・うわっ、恥っ!／＼)

昨日までの事を思い出して急に恥ずかしくなる。

今、冷静になって考えてみると、1日以上も自室に籠る必要があったのかどうか不思議に思えてきた。

別に、一生ユキと会えないわけでもないし、この街から引越し先の街まで行こうと思えば行ける距離だし・・・。

きつと昨日の事は僕の人生の中で黒歴史として刻まれてしまったのだろう。

「・・・」

(でも、それだけ余裕がなかったって事なんだろうな・・・)

突然両親から転校を突き付けられて、パニックになってしまって勝手に絶望した僕。

それをユキは救ってくれたのだ。

・・・きつとユキ本人は無自覚にやっただけなんだろうけど。

僕は身体の向きを変え、ユキと対面し、寝ているユキの頭を優しく撫でる。

「ありがとう、ユキ」

そう呟いて・・・。

「……」

「……うーん、あれ？ トー君？」

しばらく撫でているとユキが目を覚ました。

そのユキに僕は優しく「おはよう」と言う。

ユキは少しまばたきした後、いつもの子供みtainな元気な笑顔で

「おはよう、トー君」と返してくれた。

くきゆるるるるる

「!!」

突然部屋に鳴り響くお腹の音、それは僕から出たものだった。

(そういえば、4食も食べてないんだっけ……)

数えてみて驚く。

よく死ななかつたな……僕。

「トー君のお腹の音、凄いいね」

その声につられてユキを見ると、無邪気に笑うユキの姿。

それを見て僕も自然と笑顔になる。

「ご飯にしょっか」

「うん♪」

僕らは立ち上がり、部屋のドアを開ける。

「!」

反対側の廊下には姉さんが横になって眠っていた。

「……」

寝てる姉さんの目尻には渴いた涙の後が見えて、姉さんにもかなりの心配をかけてしまった事を改めて思い、罪悪感がこみ上げてくる。

僕はいったん部屋に戻り、クローゼットから使っていない、きれいな毛布を引っ張り出すと、それを姉さんにかけて。  
ちよつとした罪滅しだ。

一階に降りた僕らは台所で朝食を食べて、事前に沸かしておいたお風呂に僕、ユキの順に入る。

――

「トー君お待たせ、あがったよ」

暫くして、お風呂に入っていたユキが脱衣所から出てきた。

ユキの服装は黒のボウダーが入った白のシャツにピンクのカーデイガン、グレーのハーフパンツという服装だった。

「はい。じゃあ、ユキこれ着て」  
「？」

お風呂あがりのユキに渡したのは赤色の冬用のパーカー。

「ちよつと街を色々回ってみたいんだ。付き合ってもらって良い？」

「うん、良いよ」

――

頭に外出する時いつも被っているお気に入り、猫耳のような突起の付いた帽子を被り、ユキと一緒に外に出る。

まだ春も早く、少し冷たい風が肌を撫でる。

空はまだ朝早い事もあって藍色だが、東の空はうっすらと青色になっっていた。

そして街はとても静かで、まるでこの世界に僕とユキだけしかないような錯覚を起こす。

家の脇から自分の自転車を引っ張り出し、後ろにクッションを付けて、そこにユキが座らせ、僕もサドルに跨った。



「じゃあ、行くっか」

「うん♪」

ユキの返事を合図に、僕は地面を蹴ってベダルを漕ぎだし、僕らは早朝の街を走りだした。

僕の腰に抱きついてきたユキの体温を感じながら。

—————

「♪♪♪♪」

早朝の街を僕とユキの歌声が響く。

この歌は僕もユキも好きな歌で、その歌の歌詞と同じように早朝の街を2人乗りの自転車で駆けながら、駅へと向かうその歌の歌詞と違う場所に僕は自転車を走らせる。

—————

僕は今、街から少し離れた所にある丘の上の公園に向かっている。

その公園の前には長くてそこそこ角度がある坂があつて今僕らがいるのはその坂だ。

正直しんどい。

「もうちょっと、あと少しだよ！ ガンバレ♪」

自転車の後ろに乗っているユキの楽しそうな声が後ろから聞こえる。

その声を聞いて、不覚にも（頑張ろう）って思った僕はきつと、自分が思っているよりずっと単純なのだろう……。

—————

「とーちやーくー！」

公園にたどり着いた僕ら。

すぐさま寝転んで休みたいけどその気持ちを我慢して、僕はユキの手を引いて展望台の方に向かって行く。

展望台から目の前に見える東側の山からはまだ太陽は登っていない。

(間に合った！)

内心で軽くガッツポーズをして、

「もームリ……」

疲労から僕は展望台の柵に崩れるように寄りかかった。

――

「わあー！」

そのユキの声で顔を上げると、丁度朝日が登ってくる所だった。隣を見ると、はしゃいでいるユキが笑顔。

そのユキを見て、

(この時が永遠に続けば良いな)

って、叶わない幻想を願ってしまった。

――

「トー君、本当に行っちゃうんだね」

暫くした後、隣でユキがそう呟いたのが聞こえる。

「うん……」

僕はそれに頷いた。

昨日の夜とは違って今度は声に出して……。

「そっか。じゃあトー君、1つお願い聞いて貰って良い？」

「お願い？ 何？」

「トー君のその帽子、頂戴？」

「? これ?」

僕は今身に付けている猫耳のような突起の付いた帽子を指差す。

「うん、それ。…トー君引越して会えなくなって寂しいから、トー君がいつも身に付けてるその帽子で我慢しようと思つて。…ダメ?」

上目遣いでユキが聞いてくる。

…そんな事、答えなんか最初っから決まつてる。

「良いよ」

僕はそう言つて微笑み、帽子を外してユキに被せる。

「えへへ、どう? 似合ってる?」

少し恥ずかしそうな顔でユキが聞いてきた。

その頭にある赤紫色のその帽子はユキの桃色の髪によく映え、似合っていた。

「うん。とてもよく似合ってるよ」

「ありがとう♪ …それでねトー君、もう1個お願い聞いて貰つて良い?」

「ん? 何?」

「良いつて言うまでちよつと目、閉じて欲しいの?」

若干の疑問が湧いたが、言われた通り目を閉じる。

視覚を閉じた事で敏感になった耳が、近付いてくるユキの足音を僕に伝える。

…そして不意に、前髪が持ち上がる感覚と共に、露わになった僕の額に小さく柔らかい感触が当たる。

「!?!」

思わず目を開けると、すぐ近くにユキの顔があった。

そして、近くから見るユキの顔はほんのり赤くなっていた。

「ユキ、今何やったの・・・？」

「ふふっ、内緒♪」

そう言ったユキの顔がいつもより大人っぽくって一瞬ドキツとした。

――

結局その後もユキに何をしたのか聞いたけど、ユキは答えてくれず僕は公園を後にした。

そして2人で、これまで過ごしてきた街の、思い出のある場所を辿るように回る。

色んな所に行った。

ちよっと前まで通っていた中学校。

よく一緒に買い物に行ったショッピンモール。

互いの家族と一緒にキャンプした川のほとり。

・・・

本当に色んな所を2人で回った。

その場所場所で色んな思い出をユキと語りながら・・・。

――

・・・そして、最後にたどり着いたのは、

僕がユキと一緒に通う筈だった高校の校舎。

まだ、春休みで朝も早くて誰もいないと思ってたけど、校庭には既にサッカー部や陸上部が部活を行っていた。

僕らは校舎の敷地内に入り、職員室にいた紫色のワンピースを着た若い先生に「学校見学をしに来た」と伝え、校舎の中を見て回った。

その間、手を繋いで・・・。

――

学校を見回った僕らは、校門を出る。

そして、行きと同じようにユキを後ろに乗せて、自転車のペダルを漕ぎ始める。

朝日が登ってからかなりの時間が経っている事もあり、街は少しずつ騒がしくなって来ていた。

「……」

「……」

その中を僕らは無言で通り過ぎた。

「……」

到着したのは駅。

その駐輪場に自転車を止め、駅の中に入る。

そして、券売機で入場券を2枚買い、ユキと一緒に改札口を通過してホームに上がる。

ホームの1番端っことで、僕のキャリーバックを持った姉さんの姿を発見する。

姉さんも僕らに気付いて近付いて来た。

「……もう良いの?」

姉さんの質問に僕は首を振る。

「なら……」

「大丈夫だよ。かずねえ」

ユキが姉さんの言葉を遮る。

「そうだよ、姉さん。もう一生会えないって事じゃないし、会おうと思えば会いに帰れるから」

それを聞いた姉さんは安心したように微笑んだ。

「……」

プルルル

『まもなく、○番乗り場に電車が参ります。黄色い線までお下がり下

さい。』

ホームに僕が乗る電車が来る事を告げるベルとアナウンスが響く。

「じゃあ、行くね。ユキ、街巡り付き合ってくれてありがとう。姉さん、荷物の準備ありがとう。・・・それと心配かけてゴメン」

最後の方は恥ずかしさから小声になってしまったけど、姉さんには伝わったらしい。

姉さんは「気にしなくて良いの」と言っ僕の頭を撫でてきた。

姉さんから荷物とチケットを受け取り、代わりに入場券と自転車の鍵を渡して電車に乗る。

「トウカ!」「トー君!」

2人に呼ばれて振り返ると、笑っている2人の顔。そして、「行つてらっしゃい」の見送りの言葉。

その言葉に僕は「行つて来ます!」と笑顔で答える。

その時電車のドアが閉まって、ゆっくり動き出し、2人が着いて来る。徐々に速度を増して行く電車。

それに伴い2人との距離も少しずつ開いていく。

そして、ホームの端まで来た2人はそれ以上先に進む事が出来ず、僕に向かって手を振っていた。

その2人を僕は見えなくなるまで見つめていた。

—————

『いや、そんな事もあったね』

『だね。最後にユキ、泣いてたし』

『な、泣いてないよ!』

「ははははっ」

スマホのスピーカーの向こうから、ユキの慌てる声が聞こえてきて、それを僕は笑って返す。

時刻はユキが電話をかけて来てから既にかなりの時間が経っていて、そろそろ寝るのには良い時間となっていたが、僕らのトークはまだ続いた。

リゼ side

中からトウカの楽しそうな声が聞こえてくる。

本当に楽しそうな声が……。

「……」

その声を聞いて私は静かに自分の部屋に戻って行った。